

Z32-B88

金の星

第九卷
第四号

四月号



cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



童話作家協會

日本童話選集

第一輯

美裝 五四〇頁
着色挿畫 三八葉
定價 三圓七十五錢
送料 廿七錢

附録—日本童話史・童話著作年表（神橋並に）

岡本歸一 村上知義 武井武雄
川上四郎 初山 滋

執筆員

秋田陽雀・徳谷龍村・安倍季雄・巖谷小波・岩井信實・宇野浩二・小川未明・
小野政方・上野純二・足關岩二・神野岩三郎・北村晴夫・久曾島武彦・横山正雄・酒井朝

志・龍溪荷花・桐島壽三・千

葉百三・豐島與志雄・中島

孤島・長原博・新藤地

天馬・高田廣介・

藤原新彦・馬淵

玲佑・前田晃



兒童の爲め

學校及家庭の文

庫に愛蔵せらるべき

新興童話の傑作集（二著）



小川未明著

初山 滋挿畫
武井武雄裝幀

未明童話集

第一卷

美裝 四八〇頁 定價 三圓
送料 廿七錢



東京日本橋通

丸善株式會社

大阪 神戸 京都 名古屋

横濱 福岡 仙臺 札幌

東京—神田・三田・早稲田・丸ビル

野遊び



寺内萬治郎畫

世界名作童話大系

金の星社發行
無類の安價
錢六料送・錢十六價定・本美入箱判六四

第十編

人買物語

日本のお話として最も有名な王子と王妃のお話は、三社本夫といふ人買ひにあらはれて、さんさんといふ話で、これ程真れた話はありません。

第九編

魔法の小人

面白く、童話です。お母様の病氣を治さんと薬を買ひに行き、孝行な少年が、悪い小人が出て来て、さんさんになやましますが、最後に王様のおほめにあづかります。

第八編

ピーターパン物語

活動寫眞でおなじみの「ピーターパン」の本當のお話を書いたものです。これこそ本當の世界的童話と誰でも感心するでせう。

第七編

大勇士

イギリスの有名な話です。ビオウルフといふ勇士が、怪物退治に出かけて、恐ろしい人喰鬼と戦つたり、海の怪物と戦つたり最後に火龍と戦つて退治する勇壯な物語です。

第六編

利口か驢馬

驢馬が自分の一生を苦さんにお話したのが此の本です。利口な驢馬だけにそのお話もほかでは聞かれない愉快なものです。見世物に出たりして、なか／＼面白いです。

最新刊

こども
ブ・オン
デ

四六判一四五頁
插畫五〇葉
定價一圓廿錢
送料十二錢

★ ラ・フォンタンは初めフランスに行はれた童話で、インツプ物語グリム物語
★ アンデルセン物語など、共に世界童話界の寶である。本書は正續二篇と
★ して發刊さるゝ豫定でまづ本篇にその五十話を納めた。何れも軽い諷刺
と教訓を含んだ極めて意義深いものばかりである。

★ 譯者は本書を完全に低學年用たらしめんとし、假名遣は最も讀み易き
★ 文部省臨時國語調査會案の新假名遣を採用し、且つ分別書方によつて居る。
★ 尙ほ挿畫は話一つ毎に一頁づゝ添へてあるから讀本と繪本とを兼ねたる
★ もの。幼稚園の子供にでも面白い本である。愛兒の書架を飾るべき好著
★ をおすゝめ致します。

こども
ドン・ホー
テ

尋一、二、三年
初等學年用

尾關岩二編

定價一四〇

アリスの
夢物語

ふしぎなお庭

尋一、二、三年
初等學年用

鷺尾知治編

定價
二
〇

發兌

區込牛市京東
四一町伏山

院書アデイ

六五六三 达牛話電
三二四五 一京東督振

日本歴史實傳物語叢書(1) 三島霜川先生著・裝幀・挿畫 羽鳥古山畫伯

源義經

四六判箱入頗美本
内容二五〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金壹圓
送料十二錢

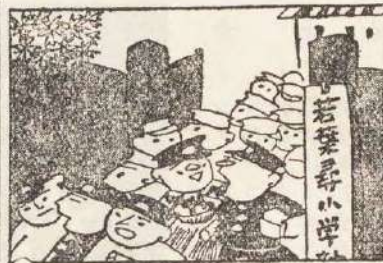
日本の生むた武將のうちで、義經はどれ／＼日本人に好かれる武將はないでしょう。詩的な物語、はな／＼しい傳記、——今も昔も義經ほど、誰からも愛される武將はないでしょう。大人からも、また、少年からも。何故でしょうか。義經は、何故、それほどまでに、今も昔も、われ／＼日本人に、心よく感じられるのでしょうか。義經は、冒険的勇氣があつたからでしょうか。戦が上手であつたからでしょうか。または、情があつたからでしょうか。行動がキビ／＼としてゐたからでしょうか。それとも、その心が潔白であり、快活であり、そして、その運命が、旭に匂ふ山櫻のやうに輝き、また夕べの嵐に散る山櫻の花のやうに哀に散つてしまつたからでしょうか——

著者は、この「か」の疑問を、いくぶんなりと、日本少年の皆様に、お解りになるやうに眞との「義經」の生涯をかいいて見たいと思ひました。すべての「作り話」と、物語的の「嘘」とを除けて。さうしてすゑぶん、骨を折つて見ました。(著者より)

町坂動郷本京東
社星の金
番六九五五京東替振

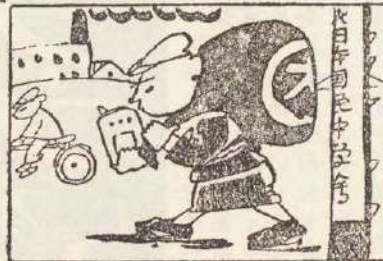
漫画 信吉ノ成功

(一) 小學校ヲソツケテ、イヨ
クサンノコトモダナハ、イ
ヨノナカハ小學校ニハナ
カモツタホド、タノシクハ
カツタ。



小學校卒業後
行くことな事柄で上の學校へ
スグ本會へ入會して日本一
中學諸君で勉強なさい。

(二) シンキチハ、ウチガピンボ
ウナタメ、アツチニダサレタ
ガ、ヒトニマケナイキデ、ダ
イニホンコクミンチユウカク
クアイニフタワイシテ、コ
ーヤロクアメンキヨウシタ。



僅か一ケ年半で中
學卒業の學力と資
格が得られる。

(三) ヨサグモ、ウチノアツガイ
ナレナガラ、コーギロクアベ
ンキヨウシタガ、トンキチハ
ヨダロウハ、トウキヨウハ、ナ
ユウガタヘハイツデモ、ナマ
ケテ、カツドウシヤシン、パカ
リミチアルイタ。



(四) 二十ネンホドアツテ、シン
キチハ、リツバナカイシヤノ
シヤチロウニナリ、ヨサグモ
ンカイギンニナツタガ、
トンキチハヨダロウハ、オナ
サケテ、シンキチノカイシヤ
ニツカワテモラシイル。



◎入會するには今が一番好いときてす
講義録見本の規則書(甲込)無代で進呈
東京 駿河臺 大日本國民中學會
電話神田區空室臺・駿河臺 東京郵便局東京四二〇〇番

世界少年少女名著大系 (30) 金の星社編・装幀・挿畫 平賀輝彦畫伯

ジグフリード王子物語

この物語は、ドイツのライン河のほとりに傳へられてゐる偉大な傳説であつて、また世界にも幾つと数へる程の雄大な物語であります。

『ニベルンゲン古詩』ともいつて、偉大な勇士ジグフリード王子の一生を物語つたものであります。王子の一生が變化極まりない勇壯なものであるために、讀者は思はず自分まで、物語中の勇士になつたやうな感激を覚えるでせう。

王子ジグフリードは、魔の森の大蛇を退治した時、大蛇の血を全身にあびた爲めに、如何なる弓矢をもつても刺すことの出来ない金鐵のやうな身體となつてゐました。そして、あらゆる勇敢な行をして、花のやうに美しいクリムヒルト姫と夫婦になりましたが、最後にいたつて悪い家來のために、力の秘密を知られ殺されてしまふのです。

偉大なる勇士の最後はいつも哀れであります。ジグフリードの場合は、一層に哀れでありました。最近にドイツから活動寫眞になつて來て大評判でした。是非御愛讀下さい。

四六判箱入頗美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五六番

金の星世界少年少女著名大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第六編	第七編	第八編	第九編	第十編
ロビン・フッド物語	アラビヤナイト	ギリシャ神話 オデッセー物語	シエークスピア物語	グリム童話
『ロビン・フッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白い物語りです。シャイワットの森に住んで正義のために戦つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで胸をなぞらせます。悪い知事や僧正や、王をやつつけて、最後に尼のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。	アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として尊ばれてゐる物語りです。昔アラビヤに悪い王があつて、毎日一人づつお姫を迎へては翌日は殺してしまふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜物語つたのが、この『アラビヤナイト』だといはれてゐます。	ギリシャ神聖ホーメの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『イリヤード物語』と共に有名な物語りです。トロイの戦争に幾度海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸へる迄の物語りです。	有名なシエークスピアの芝居の中で、童話として面白いものばかり特に選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御意のま』『ベニスの商人』『かみく』『女馴し』『夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。	童話の間題グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一冊にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

金社の星編 世界少年少女著名大系

四六判箱入類本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第十編 繪入

イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これだけで随分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く一つのお話に一枚づつの立派な畫を入れた、お話と畫と兩方面白く讀ませる本は他にありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたいと思ひます。

第二十編 日本神話

古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありません。實際驚く程立派な面白い物語りです。日本の國がはじめて出来た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

第三十編 子供キリスト傳

新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本です。この尊い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したいと思ひます。

第四十編

西遊記

支那から印度へ、はるく、お経を取りに行つた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々な魔物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない世界的名作です。この本を讀まない者は不幸です。

第五十編

ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心にして、ローマの歴史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロムルスとレムスの不思議な生立物語りからはじまつて、ハンニバルやシーザーなどの大英雄の物語などが順々に現れて来て、息もつけぬ面白い物語です。

金社の星編 世界少年少女著名大系

四六判箱入類本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第六十編

聖書物語

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものはないと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つの物語りとしても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハム、イサカの嫁えらび、鹽の柱になつたロトの妻、虎の肉の好きなイサク、ヨセフの夢判斷など、實に面白い物語です。

第七十編

奴隸トム物語

奴隸トム物語を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隸達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

第八十編

ギリシヤ英雄物語

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一度讀み出したら止められない程に興味のある物語りです。本篇はこれまで、世間に出てゐるものと違つて、有名な世界的文豪キングスレーが、自分の愛兒のために著した名著を、土臺にして書いたものに、最も理想的なものとして誇るもの出來るものです。

第九十編

アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならぬほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

第十二編

小公子

『小公子』の名は古くから知られてゐます。はかない運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推薦されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、神の如く清き母の手に育てられながら、頑迷なる祖父の家に引取られ、絶えず悲劇の主人公として活躍する小公子の運命の物語りを御一讀下さい。

金社の星編 世界少年少女著名大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第十二編 第二十二編 第三十二編 第四十二編 第五十二編

母を尋ねて三千里

本書は伊太利文豪アマナスの世界的名作『タオレ』の中から、最も面白い部分を選んで一冊としたものであります。三千里の道なほるゝと母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難波船に乗り込んで自分の身を棄て、少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生忘れられぬ物語ばかりです。少年少女必読の書。

不思議國めぐり

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がいました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原に行つて草をつんでゐるうちに、つひつと一瞬で眠つてしまひました。その間にアリスは、一つの不思議な夢を見たのです。覺めてからのち、アリスはお姉様とその話をしました。一體それは、どんな夢だつたでせうか？

青い鳥

メーテルリンクの傑作『青い鳥』の名を知らぬ者はありません。原作は劇になつてゐますが、本書はそれを物語風に再改めました。青い鳥の影を追つて夜の宮、未來の國と移り歩くメルセル、ミチル二人の姿は、ちょうど活動寫眞でも見るかのように、皆様の目の前に浮ぶでせう。何人も一讀すべき名著であります。

爲朝一代記

銀西八郎爲朝！この名を聞いて胸を躍らさぬ少年はありませう。また、英雄崇拜の雄々しい精神に燃えてゐる少女諸君にも、この爲朝の一代記は、如何にスペシイ魅力をもつてゐる。本書の表紙裏の、海に向つて弓を射てゐる爲朝の勇姿は、讀まして本書の内容を語つてゐます。金の星社の自費の本として、お薦めします。

ハムレット

ハムレットは、世界第一の芝居の作者シェークスピアの傑作です。デンマークの王子ハムレットの一生にからまる悲しき運命を描いたもので、ハムレットが如何に自分の父母を熱愛したか、又可憐な花の如きオファエリヤ姫のはかない最後など、一讀、再讀、いよ／＼熱涙を覚える名篇であります。

新ロビンソン漂流記

アマナスを輩出した汽船が大暴風雨に出遭ひ、南洋の無人島で難破して、一家族六人の者が助けあひあつた。その内四人は少年で、この六人の者が救ひの船の来るまでの二年間の話を書いたのが此の物語で、野生の植物を食物にしたり、猿や鷹鳥をお友達にしたりして、實に面白いお話です。

ボムペイ最後の日

伊太利のベスビヤス山の大噴火と共に地の下に埋つてしまつたボムペイの町のお話です。妖術使や魔女のやうな悪い人間が出て來ると共に、可憐な盲目の花賣娘や、空の星のやうな美女や、義侠に富む勇士などが現れて、歴史にながく傳へられる『ボムペイ最後の日』のあらはれにして、悲しい物語となつてゐます。

少年鼓手

ナポレオンが伊太利征服のために雪のアルプスを越えた時、雪なだれにあひました。その時なだれの下から勇敢にも軍鼓を打つた『少年鼓手』の話は世界に有名です。かういふ勇敢な少年少女のお話ばかり十篇を集めたのが此の本ですから、血なだり、涙ながれるものばかりです。

ロミオとジュリエット

有名なシェークスピアの作つたロミオとジュリエット二人の物語りは、最初から終りまで泣かずには讀めない程あらはれにしてはかないものです。最後は二人の死によつて終る悲劇中の悲劇ですが、あらはれた話、悲しい話の好きな方々には、さつと大歡迎を受けます。是非讀んでいただきたい世界の悲劇です。

竹取物語

『竹取物語』は世界には、このことの出來る日本の大文學です。日本中で一番美しいかぐや姫、自分のお嫁さんにしよつとして、大勢の皇子やおくげ様たちが競争をします。しかし、かぐや姫は月の世界の人間であつて、かりに此の世に生れたのですから、五色の雲に覆つて月の世界へと歸つてしまふのです。

金社の星編 世界少年少女著名大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第六十二編 第七十二編 第八十二編 第九十二編 第十三編

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編一第	系大傳人偉 編二第	系大傳人偉 編三第	系大傳人偉 編四第	系大傳人偉 編五第
ジヤンヌダルク	英雄 シーサー	ネルソン	リンコルン	太閤秀吉
大木雄三先生著。有名なオルレアンの少女ジヤンヌ、ダルクが奮ひ立つて母國を滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁とも血ひたたり、涙ながるゝ悲劇的物語である。	霜田史光先生著。シーサーは古代の大英雄である。世界歴史を遡じてシーサーの英雄は幾人と数へる程しかない。そのシーサーの變化多岐な運命を書いたのが本書である。	三井信衛先生著。トラファルガーの海戦に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一體すべき名著です。	久米銀一先生著。最も優れた立派傳として、この「リンコルン」をおすすめする。紙一枚、ペン先一ツ買へば、後しいりんころんが、如何にして大統領の榮位を勝ち得たか。本書を讀まねば一生の不幸である。	三島雅川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。
錢十九金 錢六金送料	錢十九金 錢六金送料	錢十九金 錢六金送料	錢十九金 錢六金送料	錢十九金 錢六金送料

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編六第	系大傳人偉 編七第	系大傳人偉 編八第	系大傳人偉 編九第	系大傳人偉 編十第
ナイチンゲール	ワシントン	大楠公	英雄 ヒーター大帝	お釋迦様
入交鐵一郎先生著。女神様のやうに氣高い心を持ったナイチンゲールの一生を書いた本です。この人の傳記を讀んだものは誰でも、本當に清い心の人になれます。少年少女の爲に書かれたはじめての本です。	三井信衛先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣を上げられます。	三島雅川先生著。楠正成の傳記を正しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感ぜるでせう。面白くてそして本當の正成のお話が見える本です。	大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたロシヤを盛んにする爲めに、帝王の身でありながら造船職工にまでなり、また自分の子や妻までも殺さなければならなくなつた變化多岐ないヒーター大帝の物語です。	斎藤佐次郎先生著。お釋迦様ほど立派な方は恐らくこの世の中に生れなかつたでせう。そのお釋迦様の一生をわかつやく、面白く、そして正しく傳へたのが此の本です。得がたい本です。
錢十九金 錢六金送料	錢十九金 錢六金送料	錢十九金 錢六金送料	錢十九金 錢六金送料	錢十九金 錢六金送料

金蘭社の新刊書

世界童話叢書第九編
永橋卓介編 高坂元三装幀
イギリス童話集

四六判箱入美本
本文三〇六頁
原色版四枚
凸版刷挿畫二十枚
定價金一圓五十錢
送料十二錢

一口にイギリスの童話といつても、その中には多岐な趣を持つスコットランドの童話、諸神と典雅な情趣のあふれてゐるイングランドの童話等と云ふやうに各々の環境に依つて生れた種々な童話を持てなります。

世界名篇物語叢書第十四編
小島政二郎著 高坂元三装幀
愛犬物語

四六判箱入美本
本文一七二頁
挿畫三色版外十葉
定價金九十錢
送料十二錢

曾つて一ヶ年を費して金の星話上に連載し、讀者から讀くやうな喝采を博したもので、順な飼犬バツクが犬買ひの爲にさらはれてから、深山の森に入つて、半狼半犬と化してゆくまでの性格の變化は、現代文壇の重鎮、小島先生の筆に依つて美事に描寫されてあります。

少年少女文藝講談叢書第四編
最上哲夫編 池上浩装幀
水戸黄門

四六判總クローズ
原色版カラダ附
挿畫三色版外十頁
本文一九七頁
定價金一圓
送料十二錢

身は、徳川御三家の一人として在りながらも、わざと平民を装つた水戸黄門、徳川光圀が助けた格さんの二人を連れ、日本國中を旅行し、悪大名悪代官をとつちめた話ばかり、皆さんも御承知でせう。本書は従来の水戸黄門記をより以上に痛快に面白く書き改めたものです。

少年少女科學大系第一編
松平道夫著 池上浩装幀
兒童天文學

四六判總クローズ
ドイツ式裝幀
本文一八〇頁
定價金一圓
送料十二錢

數萬年前の歴史を語るかのやうに、また、いてゐる無數の星、鬼が住んでゐると傳説に残る月の世界、無限の光をサン／＼と投げかけてゐるあの太陽は、はては風雪、雨にいたるまで宇宙の秘密は残す處なく説かれてあります。

少年少女科學大系第二編
松平道夫著 池上浩装幀
兒童地文學
(地球の歴史)

四六判總クローズ
ドイツ式裝幀
本文約一八〇頁
定價金一圓
送料十二錢

吾々が住んでゐる地球は、どんな風に出来たのか、又あの恐ろしい地震は如何して起るのか、噴火、海嘯等凡そ地球上に起るすべての現象の疑問は本書に依つてたちまち解れます。



(通巻第八拾九號)

トロイカ

作曲 藤井 濟水

作詩 野口 雨情

M.M. ♩=76

(緩く、のんびりと)

トロイカ

野口雨情
寺内萬治郎畫

ここは ござだろ

滿洲里^{マンヂウリ}か

滿洲里^{マンヂウリ}ならば

さうならば

支那^{シナ}と露西亞^{ロシヤ}の
國境^{クニサカイ}ひ

向ふ來^{むかひ}るのは

トロイカか

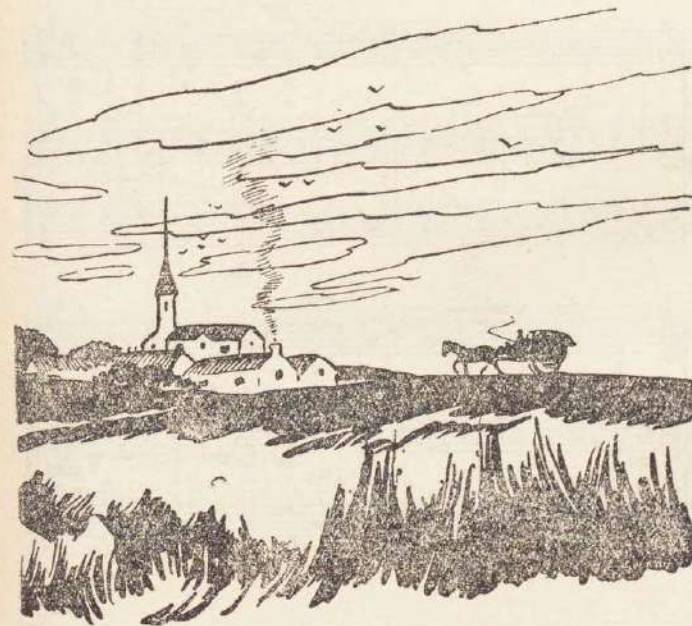
トロイカならば

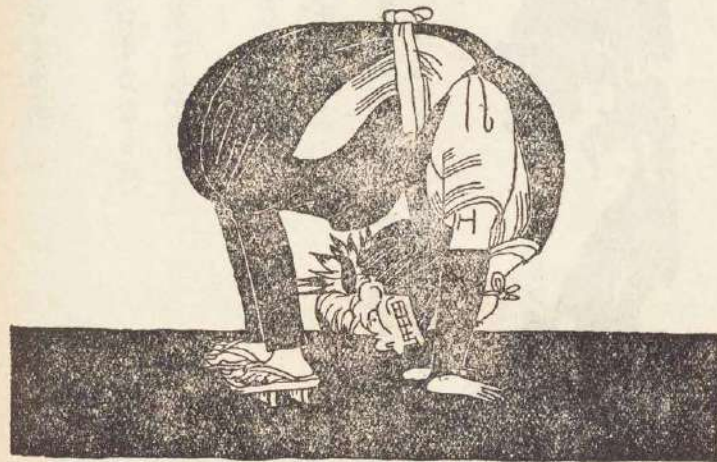
さうならば

早く歸^{かへ}れよ

西比利亞^{シベリヤ}へ

(註。滿洲里^{マンヂウリ}は露西亞^{ロシヤ}と支那^{シナ}の國境^{くにさかい}にある支那町^{しなまち}です。トロイカは露西亞人^{ロシヤじん}の乗る馬車^{ばしや}のことです)





白い手

水谷 まさる

川上四郎 畫

タケテンテン……タケテンテン……
源助爺のたたく太鼓の音につれて、安はぐるりぐ
ると、でんぐり返しをしました。
すると、その家のをばさんが、白い手をついと伸
ばして、ちやうど立ちなほつた安の目の前に、お錢
を出しました。

安はとつさの間に、それが五錢白銅であることを
知りました。一錢銅貨か、二錢銅貨をもらふのが、
おきまりみたいになつてゐるのに、五錢白銅をもら
ふのですから、安はうれしくつてなりません。
安はびよこんと、あはててお辭儀をして、その五

錢白銅を手を受けました。それと同時に、安はその
白い手が、きつといつかのをばさんのやうに、じぶ
んの頭を撫でてくれると思ひました。

けれど、をばさんは、安にお錢を渡すと、そのま
ま、びつしやり障子を閉めてしまひました。

安はふいに悲しくなりました。それで、走るやう
にして、庭木戸から出て來ましたが、もう目には涙
がにじみ出て、あたりの物がかすんで見えしました。

元氣よく源助爺は、太鼓をたいてゐます。安は
じぶんの涙を、源助爺に見られるのを氣まりわが
つてすばやく、源助爺の手に五錢白銅を渡すと、そ
のまゝ、隣の家のお關さきで、ぐるりぐると、で
んぐり返しをはじめました。

安はいつ頃から、角兵衛獅子になつたのか、よく
はおぼえてゐませんでした。ちやんとものの心がつい
た時には、しやちほこ立ちや、でんぐり返しを仕込

まれて、町から町へ、村から村へ、源助爺といつし
よに歩いてゐたのでした。

それからこつち、すゐぶん日も経ちましたが、た
いして變りのない日ばかりが過ぎました。けれど、
たつた一度、ある北の國の町で、白い手のやさしい
をばさんに、かはいがられたことだけは、忘れるこ
とのできない思ひ出でありました。

安はよくその時のことを、思ひ出すのでありまし
た。

その時、をばさんは、五錢白銅をくれて、その白
いやさしい手で、幾度も安の頭を撫でながら、
『いゝ子だねえ。』と云つてくれました。然も、をば
さんの目には、かすかに涙がたまつてゐました。安
は、なんとも云へないうれしい氣持がしました。

そんなことがあつたので、今日のをばさんが、五
錢白銅をくれた時も、やつぱり、やさしさうな白い
手だつたので、きつと頭を撫でてくれるにちがひな



八

いと思つたのでした。
けれど、かはいがつてもくれず、びつしやり障子を閉めてしまつたので、ほんとに、がっかりしましたし、情なく思つたのでした。

その夕方、安は源助爺といつしよに、町を出て行きました。思つたほど、町でお錢がとれなかつたので、町で泊ることはよしたのでした。次の村へ行けば、町で泊るよりも、もつと安いのです。

かなり道を急いだので、二人ともだいぶ疲れました。林のはづれへ來た時、

「すこし休まうや。」と云つて、源助爺はまつ腰をおろしました。

「うん。」

安も腰をおろしました。

三月になつたばかりなので、すこし休んでゐる

と、寒さが冷え冷えと身體に沁みて來ました。

「焚火をしようや。」

源助爺は、さう云つて、立ちあがりました。

安はさつそく、枯葉や枯枝を集めました。

源助爺がマツチをつけると、ぱつと、勢よく燃えあがりました。

二人は、しやがんだまゝ、火のうへに手をかざしました。

ふと安は、源助爺の手をしみじみ見つめました。

それは、大きくて、うすぎたなくて、おまけに節だつてゐました。安はすぐまた、晝間見た、よそのをばさんの、やさしい白い手を思ひ浮べました。そして、すみふんちがふなと思ひました。

源助爺だつて、べつに安を叱るやうなこともなく、かういふ親方にしては、心のやさしい人でした。けれど、その手でやさしく安の頭を撫でて、かはいがつてくれるやうなこともありませんでした。

安は源助爺の手を見てゐるうちに、その手がひどく憎らしくなつて來ました。この手が、太鼓さへうたなければ、なにもでんぐり返しをしたり、しやちほこ立ちをしたりしなくても、いゝわけなのだと、思つたからでありました。それにつけても、安はか

う思はずにはゐられませんでした。それにつけても、安はか「いつかのをばさんみたいに、白い手でかはいがつてほしいなあ！」

安の目には、涙がたまつてゆきました。

「安！」

その時、ふいに源助爺が呼びかけました。

「え？」

安は目をばちばちとしばたいて、あはて、返事

をしました。

「お前、今日、五銭くれたをばさんのこと、考へてゐるんか？」

安はどうして、源助爺がそれを知つてゐるのか、ふしぎに思つて、胸がどきつとしました。

「うん。」

「あのをばさん、お前の頭さすらなんだなあ！」

「うん。」

「お前、あんなをばさんに、かはいがつてもらひたいか？」

安は、「うん」と云ひたかつたのですが、なせか云ひふりました。



「なあ安、ほんと云ふてみい！」

源助爺は、返事をうながしました。安はやつと、「うん。」と云ひました。源助爺は、その時、

「そやろ、それがあたりまへよ。」と云つて、ちつと焚火の火を見つめました。そして、その目には、涙がにじんでゐました。安は、びつくりしました。源助爺が、涙ぐんだことなんか、これまでに一度だつて見たことがなかつたのですもの！

「なあ安。お前のおかあさんがゐたら、かはいがつてくれるんやがなあ！ おれもさうだよ。たうとうこの年まで、だれからまかはいがつてもらはずに、済んでしまふたんや。」

源助爺は、つぶやくやうに云ひました。

安の目にも、熱い涙がぐんぐんたまつて、頬へこぼれ落ちました。

「さびしいなあ！」

源助爺は、安の手をとつて、ふいに握り

しめました。安は、親方が病氣にでもなつて、死んでしまふんぢやないかと思ひました。

さう思ふと、このまうかうして、焚火にあたつて、ゐるのが、ひどくさびしくなつて來ました。

「親方、太鼓うつておくれんか？ さびしいよつてなあ！」
安は、寂しさを紛らしたかつたのでありました。

「よし、太鼓うつてやろ！」

源助爺は、そばの太鼓をと

りあげると、軽い調子でうちはじめました。

テケテンテン……テケテンテン……

安は、そばにあつた獅子のかぶりものをかぶつて、



ぐるりぐると、でんぐり返しをはじめました。
源助爺も、さびしさを紛らさうとするのか、やけに太鼓をうちつづけました。

安は、でんぐり返しをしながら、泣いてゐました。そして、ぼんやりかすんだ涙の幕を通して、白いやさしい手が、ちらちらと目にうつりました。けれど、それは掴むこともできない、まぼろしの手です。ふいに、源助爺は、太鼓をうつのをやめました。そして、『安！』と云ひながら、安を引き寄せて、ぎゅつと抱きしめました。

安はびつくりしましたが、源助爺のするまゝになつてゐました。

『さびしいなあ！』

源助爺は、しみじみとさう云ひました。それと同時に、安の顔へはたりと冷いものがかかりました。

それは、源助爺の頬を傳つて落ちた涙でした。

三月のうすら寒い夕暮の空に、輝きはじめた三日

月さんだけが、この二人を見てゐました。

いつになつたら、この二人の胸から、さびしさがなくなるのでせう。いつになつたら、安は白い手ではいられないのでせう。

あたたかい着物を着て、あたたかい御馳走を食べる町の子供たちは、晝間来た角兵衛獅子が、今かうして林のはづれの、焚火のそばにゐることなんぞ、夢にも知らないでせう。それどころか、やさしいおかあさんの、白い手ではいられないでゐるくせに、かへつてそれをうるさがつたり、いやがつたりしてゐるかも知れません。

さて、源助爺と安は、焚火を消して、またとぼとぼと歩きはじめました。さうするよりほかに、どうしやうもないからでした。野宿をするには、まだ寒すぎましたし、それに、お腹が空いて来たからでありました。三日月さんは、二人の歩いてゆく姿を、氣の毒さうに見てゐました。

(おしまひ)



大石主税

三島霜川

羽鳥古山畫

「前回の梗概」元禄十四年三月十四日、浅野内匠頭は、江戸の芝、受寄下、田村右京大夫の邸で切腹をさせられました。しかし、その領地、赤穂の方では夢にも、その事を知りませんでした。そして、十六日になっても、十七日になっても、赤穂へは、その「知らせ」が来ませんでした。赤穂の春は静かでした。すると、十八日の眞夜中頃、二挺の早駕籠が、大石内蔵助のところにやって来ました。早見藤左衛門と茅野三平とは、死んだやうになつて、江戸表の恐ろしい「知らせ」を持って来ました。つゞいて、十九日の晩方、原惣右衛門と大石瀧左衛門とが、やはり、早駕籠で、やって来て、内匠頭は切腹、家は断絶、城も取上げられさうな「知らせ」を持って来ました。しかし、内蔵助は、落ちついてゐました。そして、深夜、主税を其の居間に呼びよせて、主税が五歳の年に、内匠頭から特に「お馬」を頂戴した話などを致しました——内蔵助の腹の底は？

四、赤穂城

お話の筋が外れますが、こゝで、皆様にお断りをしておいて置くことがあります。いッたい、「赤穂義士」

一四
のお話には、間違つてゐることゝ、出鱈目とが、たくさんに傳へられて居ります。「忠臣蔵」だとか、「銘々傳」だとか、または「實録」だとか、「實傳」だとか云つて、どの位、真んところらしい「嘘」が傳へられてゐるか知れません。ひどいものになると、吉良上野介義央を、「義英」と、云つたり、大石内蔵助良雄を、「よしおう」と、云つたりして、名前まで間違へてゐます。そして、「銘々傳」と、云つたりやうなものは、殆ど全部、「作り話」だと云つても可いのです。

こゝに、二ツ三ツ、その例を引いて見ましょう。まづ、「南部坂雪の別れ」と、いふ、内蔵助が、「討入」の前に、内匠頭の奥方に逢つたといふお話——これが、まるで、あとかたもない「嘘」です。それから、「神崎與五郎東下り」のお話とか、「内蔵助の十八ヶ條申開き」のお話とか、原惣右衛門の老母と武林唯七の老母とが、いづれも我が子の「敵

討」の決心を固くさせるために、自害をして死んだといふお話だとか、或は、堀部妙海尼（安兵衛の妻）が、内匠頭の家を再興させるために、いくたびとなく「駕籠訴」をしたお話だとか——さういふ話も、皆な、後ちの人が作つた出鱈目話でございます。

その他、さういふやうな出鱈目話を数へたら、まづたく、際限がありません。それで、「赤穂義士」のお話は、どれが真とで、どれだけ嘘があるかといふことを、確に突止めることは、非常にむづかしい——義士の「手紙」だとか、「眞筆」だとか、或は「遺物」だとか云つてゐるものにも、うんと、「贋物」があるのですから……。

そこで、早見藤左衛門と茅野三平と、それから、原惣右衛門と大石瀧左衛門とが、江戸から百七十里の道を、「早駕籠」で、赤穂へ、内匠頭の「刃傷」と「切腹」とを知らせて來たのも、「早駕籠」ではなく、「早馬」だつたといふ話もあります。なるは

ど、東海道を、馬で、すつ飛ばして行けば、勇ましくいに違ありません。けれども、百七十里の道を、どうして、馬を飛ばし通して行かれますよう。とても、人間業には出来ない仕事です。これは、どうしても「早駕籠」でないと、お話が、真んところでない理屈になります。皆様のうちに、早見等四人の「早打」は「馬だ」と、思つておいでの方もあつても知れませんが、「赤穂義士」のお話には、とてもない「嘘」が多い——で、その御注意をして置くと共に、「早駕籠」のことも、ちよつと書き加へて置くことにしました。

赤穂の城は、縦が五十間、横が八十間、小さな城でしたが、天主閣があり、二の曲輪の周圍が八百五十間、三の曲輪が、百六十三間からあつて、山に據り、海と河とを控えて、なかくの名城でした。その築き方は、軍學者として名高い、小幡勘兵衛景憲

の門人（弟子）近藤三郎右衛門の設計によつて、櫓が十、門が十二、非常に要害よく築いてありました。この城を作つたのは、内匠頭長矩のお祖父さんに當る長直といふ人でした。それは、五十七年前のことでした。

内匠頭は切腹、家は斷絶——さうなると、城も取上げられて了ふことは、誰にも解つてゐました。さうして、三百何十人といふ赤穂の家中が、皆な「碌」と「扶持」とに離れて、浪人になることも。

赤穂は、ひつくり返るやうな騷になりました。三百何十人の家中は、毎日く、城に集まつて、いろいろに相談をしました。

「君、辱めらるれば臣、死すと云ひます。何んで、この城を、ムザ／＼明渡してなるのですか。いまにも、城、受取りの討手が向つたら、城を枕に深く討死をしましょう。」

大勢の人は、肘を張り、肩を怒らし、涙を流して

ふんがいました。

しかし、二番家老の大野九郎兵衛や、重役の岡林奎之助などの連中は、「こんな時に、うツかり、口をきいては損だ」と、いふやうな顔をして、俛いて黙りこくつてゐました。内蔵助も、何んとも云ひませんでした。その實、肚の底には、ハツキリと、考が、定つてゐたのです。

主税は、このお城の「評定（相替）」の席へは出ませんでした。何故と云へば、主税は、その頃まだ「松之丞」と、云つて、一人前の「士」の資格がありませんでしたから……。

「籠城だ」「討死だ」と、大勢が眼を血走らせて騒ぎたつてゐるうちに、要領を得ない日が、一日二日と過ぎて行きました。内蔵助は、大勢の「真んとの決心」を突止めて見ようといふ考もあつて、やはり、黙つて、大勢の様子を見てゐました。もつとも、たとへ、礮高を五千石、一萬石に減らされても

内匠頭の弟、大學に、赤穂淺野の家を立てさせて貰ふように、江戸幕府に哀願をすることに「考」を定めてゐたのですが……。

すると、二十二日に、その大學が、閉門——引籠りの科に處せられたといふ知らせが來ました。つゞいて、二十五日には、江戸の屋敷を取上げられたといふ知らせが來ました。さうして、二十八日には、「いよく、城、受取りの上使が、赤穂へ差向けられる」と、いふ知らせが來ました。

赤穂家中の人々は、がツかりして了ひました。しかし、内蔵助は、やはり、落ちついて、取りあへず多川九左衛門といふ者と、月岡治右衛門といふ者とを、「大學に、跡目だけをおつがせ下さい。」と、いふ「哀願書」を持たせて、江戸へ出發させました。さうして、その翌くる日、内蔵助は、また、大勢を城に集めて、いくらか、自分の眞んとの考を述べて見ました——この時、集まつた者は、もう僅に五

十五人しかありませんでした。後の「六分の五」と、いふ大多數は、「もう、何うだつて可い。相談したつて、格別好いこともないだらう」と、冷淡に、さう、見切をつけて了つてゐたのでした。

「この人たちだけは、眞んとに城を枕に討死する覺悟があるらしい。これだけは、確に頼みにならう。」と、内蔵助は、さう、思ひました。

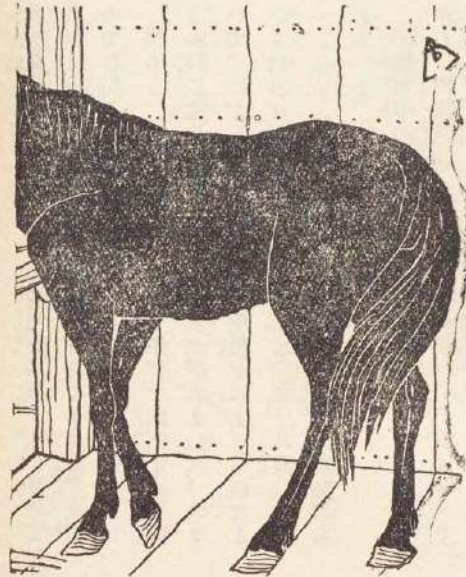
この五十四人の他に、江戸の方に、まだ、堀部彌兵衛、安兵衛父子を始め、村松喜兵衛父子、片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門、奥田孫太夫など、後ちに「義士」と、云はれるやうになつた人たちが、だ

いふ、居りましたが……。

「今の世の人情は、紙よりも薄いと云ひます。今日こゝにお集まりになつた方は、僅か、これだけしかありません。これだけでは、籠城をしても、三日とは支えられないでしょう。とすれば、たゞ、世間の物笑になつて了ふだけです。それで、わたくしの考

は、お城受取の上使のおいでを待って、われ／＼の眞心を訴へ、この御城内で、一同、腹を切って、御主人内匠頭様のお後を追ふはかないと思ひます。御めい／＼のお考は如何ですか。」

と、かう、内蔵助は、「どうも、仕方がない。」と



いふやうに云ひました。
「御城代(内蔵助のこと)の有仰の通りです。われ／＼も然うするより他はないと思ひます。」
と、五十四人の人々は、口を揃へて云ひました。
「それならば、お互に神水を飲むで、誓を立てましょう。」

内蔵助は、さう云って、懷ろから、一つの巻物を取り出しました。それは、その巻物に、めい／＼の名を書いて、血判をする「連判状」と、いふものでした。云って見ると、「同盟書」です。
一同は、神前に供へた水を飲むで、巻物に、めい／＼の名を書き、指を切って、その血で「血判」を捺しました。かうして、五十四人の人々は、一ツたん、江戸幕府の役人が、お城を受取りに来るのを待つて、城内で腹を切ることに相談を定めました。これは、つまり、恰ど、乃木將軍が、明治天皇の御後を慕ひ参らせて切腹したやうに、一同、揃って、

を打明けても可い。」

内匠頭に「殉死」しようといふのでした。
ところが、内蔵助の肚の底にある「眞」との考は、この「殉死」ではありませんでした。考の深い内蔵助は、まづ、さう云って、一同の「眞」との決心をためして見たのでした。
「まづ、大丈夫だ。この人々ならば、眞」との考



内蔵助は、さう思ひました。そして、「敵討をしなければならぬ。」と、いふ肚の底を打明けました。この五十四人の人々も、志をまげずに、「四十七士」の列に加つたのは、二十六人だけで、後の廿八人は、いつとはなく「同盟」から、脱けたり逃げたりして了つたのですが、しかし、この時は、一同、こゝろふんして、眞とに城内で、殉死する覺悟でした。それで、「敵討」と、聞くと、いづれも、膝をたゞき、眉をあげ、俄に、新しい光明に照らされたやうに、悦び、勇みしました。
「御主人内匠頭様は、上野介をお討取りあそばさうとして、お討損じになりました。われ／＼どもは、家來として、そのお志をついで、上野介を討取らなければなりません。それが、臣下たる者の道と存じます。切腹は、それから後ちでも、よろしいではありませんか。」

さういふ、内藏助の聲には、りんとして、金鐵の如き響がありました。

「仰せの通りです。われ／＼とても、それが望です。身を粉にくだいて、お指圖に従ひましょう。」

「上野介の白髪首を取って、御主人のお墓に供へましょう。」

「それでこそ、赤穂武士の面目が保たれます。」

と、めい／＼口々に、さう云って、すぐにも、敵討に出かけようといふ勢でした。

「敵討」の相談は、かうして、籠城から殉死に、殉死から敵討に變つて、きつかりと、定りました。

しかし、二三の老人などに、「敵討は、容易のことでない。そのうちに死んで了つては、志が水の泡になつて了ふ。今のうちに殉死した方が宜しい。」

と、云って、反對する者もありました。

すると、内藏助は「それは、お考違でございましょう。死ぬるとか生きるとかいふことは、天命で

す。内藏助とても、明日にも死ぬか知れません。もし、然うしたら、悴が、わたくしに代つて、敵討の人数に加はれば可いのです。つまり、親が死ねば子が代る……。また、この「誓」に加はつた者は、一心同體ですから、たとへ、先きに死んだとしまして、後に残つた者が、志をついでくれるではありませんか。」

と、云って、老人たちを説伏せて、一人も残らず「敵討」に賛成して了ひました。さうして、その事は他人は、もちろん、妻や子どもにも、秘密にして置くことに、お互に、堅く「誓」を立てました。

それで、主税なども、城内で、敵討の相談のきまつたことは、夢にも知りませんでした。さうして、「世間の噂の通り、いまに、お城受取りの討手がやつて来るだらう。すると、阿父だつて、ナニ、オメオメと、城を渡すものか。もちろん、籠城だらう。いや、さうに定つてゐる。働くぞ、おれは。うんと

働くぞ。」

と、一人で、さう考へて居りました。同時に、小具足に身を固めて、むらがる敵のなかへ、花々しく斬込むことも考へました。それから、力がつきて、血みどろになつて、城を枕に討死することも想像して見ました。さうして、一人で、胸を躍らせてゐました。

しかし、その様子は、相變らず、ノソリとして、落ちつきはらつてゐました。誰が見ても、そんなことなど、考へてゐようとは思はれませんでした。

「うちの若様と來たら、どうも、獨活の大木ちやないかと思はれるところがあるよ。」

若徒や仲間などは、どうかすると、そんな蔭口をきいてゐることもありました。それほどに、主税はノソ／＼して、物事に、頓着も、屈托もない様子がありませんでした。

内匠頭、切腹の「知らせ」があつてから、主税は

たいがい、部屋に閉籠つてばかりゐましたが、時々フラ／＼と、厩へだけ出かけて行きました。と、云つて、御主人の忌中のことですから、馬の稽古をするといふのではありませんでしたが……
厩にはまだ、五歳の年に、内匠頭から戴いた「青柳」が、ピン／＼してゐました。ピン／＼してゐると云つても「青柳」は、もうよほどの老馬でした。黒い毛も、もう、だいぶつやが無くなつてゐました。

主税は、この「青柳」と、お互に、古い馴染でした。主税の足音がすると「青柳」は、きつと、長い顔を、ひよいと、ませの外へ突出しました。すると主税は、きつとまた、その鼻頭を撫てやるのでした。さうして、ある時は、自分に、飼料やなどの世話もしてやりました。

「青よ、お前が、もう少し元氣が好いと、わしは、今度、お前に乗つて、花々しく働くのだが……残念

ながら、戦には出られないな。」

主税は、厩の前に来ては、そんなことを考へながら、ぼかんとして、たゞ「青柳」の様子を見つめたりしてゐました。そして、籠城となれば、どうしても、永く、青とも別れて了はなければならないことを、悲しく思つて居りました——それには、内匠頭のおかたみだからといふ、ある強い執着もあつたのです……

赤穂の城内も、町も、しんと、静まりかへつて、しかも、その底には、何事か起りさうな、ある恐ろしい氣配が、フツ／＼、煮えくりかへつてゐるやうな日が、三日、五日と過ぎて行きました。そのうちには、江戸の方から、片岡源五右衛門や磯貝十郎左衛門などもやつて來れば、つゞいて、堀部安兵衛や奥田孫太夫、村松喜兵衛父子などもやつて來ました。さうして、籠城の噂は、いつか、煙の如く消えて了

つて「お城、明渡し」の噂が、主税の耳にも入つて來ました。

「何アんだ、ばか／＼しい。そんなことがあつて、耐えるものか。」

と、主税は始めのうち、さう思つて居りました。そして、格別、氣に止めようともしませんでした。もちろん、一度、その事を、内藏助に、訊いて見ようともしませんでした。

ところが、それから間もなく、城内で、お城のお金、家中の一同に分配されました。その時は、三百何十人の家中が、一人も残らず、お城へ行つて、お金を貰ひました。

「オヤ／＼、變だぞ。」

主税には、籠城をするには、大切なお金を、何故一同に分けてやつて了ふのか、さッぱり、その譯が解りませんでした。

さうかうするうちに、

「お城を明渡すのが眞ンとだ。四月の中旬までには、お城を受取る上使が来る。」といふことが、ハツキリと、解つて來ました。

「何アんのこつた。」

と、主税は、がッかりして了ひました。セツかく、「うんと、働かう。」と、氣張つてゐたのが、それこそ、氣の抜けた風船玉のやうに、クシャ／＼になつて了ひました。

「どうも、おかしいぞ。お父上は、そんな腰拔ではない筈だが……」

主税は、それが、不思議に思はれてなりません。そして、内藏助に對して、だいぶ、ふくれかへつた心もちになつてゐました。どうかすると、わざと、父の前で、ツン／＼したり、障子や襖などを荒ツぱく、ガタビシ、やるやうなこともありました。とにかく、主税は、非常に不平でした。

(つゞく)



魔術義書

西條八十



きんちく

三

おもひがけなく頭の上で囀鳴られたので、ジョゼが驚いて仰向くと、それは毛並も鞍飾りも際立つて美しいアンダルジイ馬に跨つた年若な紳士でした。

だな？」

「さうです？」

「君はいつたいこの土地の値段がいくらだか知つてゐるのか？」

「それはこれから行つて訊かうと思つてゐるんです。」

「おほよその見つもりが四百萬圓と云ふんだぜ。」

若い紳士はジョゼの顔を意地悪さうな眼つきで見ながら言ひました。

「四百萬圓なら安いもんです。」

ジョゼが答へると、若い紳士はカラ／＼と笑ひだしました。

「これは驚いた。して見ると君はよほどの金持だと思えるね。それだけの身分の人が馬車にも乗らず、この暑いのにタタ／＼歩くのは一寸似合はないね。」

と、ひやかしました。

「でもこれが私の癖なんですから。」

二四

その衣裳の立派なのを見て、かなり身分の高い人であることが分りました。

ジョゼがデロ／＼相手の人柄を見てゐるうちに、紳士は返事が無いのを焦つたさうに、もう一ぺん、
「おまへはいつたい誰の許しを得てここへ入つて来たんだ？」

と、おなじことを囀鳴りました。

ジョゼは高慢ちきなその若い紳士の顔を冷かに見て微笑みながら、

「持主の無い邸へ入るのに、別に許しなんか要らないでせう。」

と、言ひました。

「持主が無い？ 誰からいつたい君はそんなことを聞いたんだ？」

「友だちからです。アルジュル村で今日この土地が競賣されると聞いて、私はやつて来たんです。」

「では君は、この土地を買ひに来たと云ふわけなん

ジョゼは金持ちらしく大様に言ひました。

「それにしてもすこし安直過ぎるよ。ほんたうなら私が歩いて君にこの馬をあげていいところなんだ。」

紳士の言葉に、ジョゼは偶と思ひついて、ふり仰ぐなり紳士の顔をちつと見つめて言ひました。

「あなたはほんたうにさう想ひますか？」

「想ふとも。——何なら直ぐにでも飛び下りて、代りに君を乗せてあげたいと思つてゐるんだ。」

紳士はジョゼを弄ふのがますます面白くなつたやうでした。

「よろしい。それなら望み通り直ぐにあなたをその馬から下してあげませう。」

ジョゼはかう言ふなり、心の中で「この男が馬から下りるやうに。」と念じました。

と、念じ終るか終らぬうちに、いままで温順しかつた馬が急に一蹴ねして、若い紳士の身體は美事草の上に投げ出されました。

二五

「コラ！ 君は僕の馬に悪戯をしたな！」

若い紳士はやつと起上つて、服の埃を拂ひながら真蒼になつて怒つてどなりました。

「私はただあなたの望みを適へてあげるお手傳ひをしただけです。」

ジョゼは冷かに答へながら、アングルジイ馬の轡をとつて、今度は自分が代つてその背に跨がらうとしました。

怒りに狂つた若い紳士は手の鞭を投げ棄てると、



腰の長剣の柄に手を掛けました。さうしてツカ／＼とジョゼに詰め寄り、

「さ、あやまれ！ 大地に手を突いてあやまれ！

さもないとその儘にしては置かんぞ！」と、もの凄いい權幕です。

ジョゼもあまり亂暴な紳士のふるまひに思はずカツと血が頭にのぼりました。けれども、なるべく穩かにと思つて、二言三言下手に出て、紳士の怒りを解かうとしましたが、紳士はぬき放した白刃を無手のジョゼの頭の上にふりかざし、どうしても「あやまれ」と言ひつづけますので、ジョゼは絶對絶命になりました。かれは偶と想ひついて、心の中で、相手の紳士が自分のぬいた剣で怪我をするやう、——しかしその傷は重いものでなく、わづかに紳士をこらすことが出来るほどのものであるやうに念じました。

と、その途端に、勢よく剣をふり上げてゐた紳士

決して私のせいぢやありません。私があなたにもう悪い氣持を持つてゐないといふその證據には、最前御親切に仰有つて下さつたこの馬を遠慮なくお借りして行きます。ではいづれ又、ご機嫌よう！」

かう言ひながら、馬の尻に一鞭あてると、ジョゼは紳士をあとへ残したなり、砂煙をたててアルジェルの村へと走り去りました。

四

剣を持つて脅しにかかつた紳士をもの美事にやり込めてしまつたジョゼは、多少自分の勇氣と頭の下さに己惚が出て來ました。

「もうどんな者が出て、どんな事を言ひかけても決して怖いことは無いぞ」おれには世界の王様にも負けないえらい力が備つてゐるのだ。さういふ氣持がだん／＼とジョゼの心を高ぶらせてきました。だから、馬に跨つてアルジェルの村へ行く途中でも、路



が、急に、

「あ痛つ！」

と叫んで、草の上に尻餅をつきました。彼は剣をとり落すはづみにそれで背中を刺したのでした。

ジョゼは草の上の紳士をデロリと見て、

「ご覽なさい。あんまり空威張りをする者には、ろくな報は來ませんよ。けれど、今のあなたの怪我は

にゐる荷車挽きがすこしでもわきへ避けるのに手間どると、かれは直ちに鞭をビシリと鳴らせたりするのでした。威張りたいたい悪い心が、ジョゼの胸の中に満潮のやうに高まつてきました。

アルジェル村へ来ると、ジョゼはさつそくアロンゾ伯爵の土地の差配をやつてゐるペレといふ男に逢ひました。さうして自分は今日の競賣であの土地を買ひに来たものだが、いくら出せば自分に賣つてくれるかと云ふことを掛け合ひました。ところがペレの言つた最初の言葉が、ひどくジョゼをがっかりさせてしまひました。それはもうあの土地は賣らないことになつたと云ふ返事でした。

『どうして急にそんなことになつたんです?』

ジョゼは興奮で頼める聲で訊きました。自分があれほどまでに欲しがつてゐる土地、——あそこをかう直して、ここをああ變へてと、あれほどにいろいろ作りなほす工夫まで凝らしたあの土地がもう買へ

なくなつたとは。——しかも今、どんな澤山のお金でも安々と生み出す力を授けられた時に、そんな悪い都合になるとは、——ジョゼはがっかりして、癪で氣が焦々してきました。

そんなことも知らない差配人のペレは靜かにその理由を説明しました。それによると、死んだアロンゾ伯爵の甥にあたる人で伯父さんの財産を相続したドン、アンリケといふ人が急に都合上邸も土地も賣らないと云ふことに定めたのだといふ話でした。

『だつてお金をうんと出せばいいでせう? 先方の望みだけ。』

ジョゼが未練らしく言ひました。

『それでも駄目らしいのです。』

と、氣の毒さうにペレが答へました。

『それは確なことです。』

『でも、今朝、ドン、アンリケさんが見えて、重ね

てさういふお話でしたから。』

『ぢやあ、そのドン、アンリケさんは今日この土地に居るんですね。』

『ええ。今しがた馬でお城へ行かれたばかりです。』

ジョゼはハツと胸を打たれたやうに覺りました。

それでは今しがたお城の中で自分と争つたあの若い紳士がそのドン、アンリケに違ひない。だからあんなに威張りくさつてゐたのだと思ひました。

差配人のペレは、更に言葉を添へて、新しい主人が土地を賣らなくなつた原因の一つは、そこで秋に狩をしたい爲めだと説明しました。

『いまいましい。そんなことならもつと重い怪我をさせてやればよかつた。狩などする勇氣がまるで無くなつてしまふやうな。』

ジョゼは心の中でこんな風に想ひました。

差配人のペレはそれから、邸の中には古い名畫を數知れぬほど集めた立派な書室のあること、珍らし

い書物を山のやうに積んだ書物庫の在ることなどをジョゼに話して聴かせました。聴けば聴くほどジョゼには邸の欲しさが身に沁みました。

『そんな立派な書や書物が在つたつて今度の若い主人には實の持ち腐れだらうて。』

ジョゼは呟きました。

『それはまつたくさうです。』

ペレは聲をひそめて、

『自分の主人にあたる人のことを悪く云つちや何でも、今度のドン、アンリケさんは、さうした本を讀むとか書を見るとかいふ靜かなことが大嫌ひで、何でも狩とか劍術とか云つた武張つたことばかりがお好きなんです。殊に困るのは決闘がお好きなこと、これまでにそれでは何人といふ人を害めてゐるといふ話ですよ。』

『チヨッ!』

と、ジョゼは舌打ちをして、

「ますく、忌々しいなあ。そんな男にこの邸を持たせて置くなんて。——そんな人殺し好きな亂暴な男は、もう二度と劍を持つことが出来ないやうな身體になつてしまへばいいんだ。」
と、呟きました。

「いや、實は悪いことを言へばそればかりぢや無いんで。」

と、ペレは多少ドン、アンリケに怨みでも有るの



か、更に聲を低くして、

「あの方のいちばん悪いところは、こんなにお金持でゐながら、性分がひどく吝嗇なことですよ。現に今度もこの土地を相續なさると同時に、小作の百姓たちに、今までの地代の溜り分はのこらず一時に持つて出る、さもなければ一週間内に追出すといふきびしい命令をお出しになつたんです。」

「で、みんなは温順しく拂つたのかね？」

「いいえ。なにしろ去年の收穫がごく悪くつて皆大苦しみのところへ持つて来てそんな命令が出たもんですから、地所の中の百姓で泣いてゐない者は一人だつて在りませんよ。」

差配人ペレの話をここまで聴いたジョゼは、欲しい土地は買へない、その土地の今度の持主の性質は氣に入らないと云ふので、くさくした癪癪玉が一時に破裂してしまひました。かれは椅子から立ち上つて、右手を大きく振りく、もうもう我慢が出来



ないと云ふ風で叫びました。

「こんな立派な土地や邸を持つてゐて、遊んで喰べて行かれる身分でありながら、そんな亂暴で、分らずやで、情知らずの男は、直ぐにもこの世の中から居無くなつてしまふがいい！」

ジョゼがこの言葉を云ひ切らぬうち、階段を慌しく駆け上つてくる人の足音が聞えました。一人の僕が眞蒼な顔をして飛込んで來ました。

「大變です！ 大變です！」

「どうしたんだ？」

ペレが訊きました。

「ドン、アンリケさんがまた決闘をなさいました！」

僕は叫びました。

「またやつたのか？」

「そしてお怪我なさいました！」

「よほど重いのか？」

「いいえ、傷は大したことは無いのですが、なんでもその決闘の相手が、御自分の馬を盗つて逃げたと云ふので、あとを追駈ける途中、傷の痛みで往來に付れたなり氣絶されてしまつたのです。」

「そこを誰かが見つけて知らせて來たのか？」

「いいえ、まだ悪いことが有るのです。そこへやつ

て来た荷馬車の御者が、つい気がつかずに、仆れてゐるドン、アンリケさんの右の手を轢いてしまつたのです。」

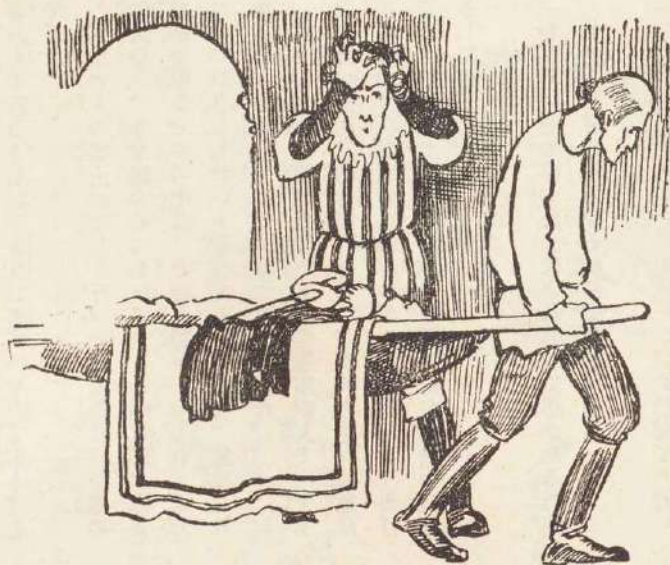
「それは大變だ。」

「でもやつと扶け起して、家の前までお伴れしたのです。」

「で、生命には別狀無いんだな？」

「ところが今、お庭へ入らうとする時、どうしたわけか大工の掛けた足場の縄が急に切れて、太い材木がドン、アンリケさんの上へ落ちかかり、重ねくの災難に、たうとうアンリケさんは亡つてしまつたのです。」

ジョゼはこのベレと僕との對話を聴いてゐるうち夜が明るい朝になるやうに、冬の氷が朝の日に解けるやうに、ドン、アンリケの身上に起つた次々の悲しい災難の原因がわかりました。それはみんな自分のやつた仕事なのでした。



ジョゼは最前差配人のベレと話しながら、ドン、アンリケの怪我が重くなつて、狩などに出かけることが出来なくなるやうにと心の中で念じました。その次に、ドン、アンリケの手が二度と剣を持つことが出来なくなるやうにと復た念じました。さうして三度目にはドン、アンリケのやうな男は直にもこの世から居無くなるやうにと念じたのでした。魔法藥の効能は靦面、ジョゼの心の中の願ひは、三つとも次々に間違ひなく適へられたのでした。

「して見ると、おれはドン、アンリケといふ一人の人間を、怪我をさせ、苦しめ、そしてあげくの果に殺してしまつたのだ。おれは人殺しだ！」

かうした考へが矢のやうにジョゼの胸の奥底まで貫きました。ジョゼがあまりの恐ろしさにわれを忘れて叫ばうとした時、室の入口の扉が音なく左右に開き、四人の僕が血にまみれた若い主人の死體を擔架にのせて静々と運び込んで來ました。

ジョゼは、このむごたらしい狀景を二目と見る勇氣なく、思はず、手足を硬ばらせて

「ウーン」と呻きながら後方へ倒れかかりました。

……と、その瞬間、眼の前の光景は何もかも、霧が晴れてゆくやうに、だん／＼遠く、淡く、おぼろおぼろに消えて行きました。さうして……。

x x x x x

吾に返つたジョゼは、自分がボザダの汚ない屋根裏の室の、蓐床のうへに横になつてゐたことに氣がつかしました。正面の窓からはすでに朝の明るい光線が射し込みかけてゐました。

ジョゼが最初に感じたことは

「やれやれ、今の人殺しは夢だつたのか、有難い有難い」

と云ふ喜びでした。

それからかれは昨夜ここで起つたことを次々に想

ひ出して行きました。さうしてすべてを了解しました。

ムーア人の博士が残して行つた薬は、一種の睡眠薬で、人を眠らせておいて、その間に脳の或る機關を働かせ夢の中に、その人間がいつもあつたたい、かうもしたいと考へてゐたことを、實現させるといふ效力を持った薬だつたのでした。

ジョゼは永い間、身動きもせず薬床の上で、今までの夢の意味を考へ続けました。やがてかれは想ひ出したやうに、枕頭に轉がつてゐる薬罐をとりあげて、そこに貼つてあつた例の格言めいた文字を讀みました。

『われらにその權力なきは、われらに愚かなる行を爲さしめざらんとする神の御恩召なり。』

さうして、いかにもこのムーア人の老博士が教へ

残して行つたやうに、人間にどんな慾でも遂げられるといふ權力が授けられてゐないことは、その力を用ゐて愚かな行ひをするといけなからで、人間にその權力が在つたら最後、その慾望はかぎりなく大きくなつて行つて、好奇心から高慢へ、高慢から壓制へ、壓制から殘忍へとびて行つて、つひにはその權力の持主の人間を亡ぼしてしまふものであると云ふことを悟りました。

この雨の日の宿屋の一夜の夢は、ドン、ジョゼに生れて初めての身に泌みた教へを與へて、かれの性質をどん底から變へてしまひました。かれは足りるといふことを知る人間になつて、その後暫くして、自分が夢の中で一度はその持主とならうとした昔のアロンゾ伯爵の邸の第二番の家扶となることによつて、満足と平和のうちに一生を送りました。

(をばり)



くらやみの聲

西川 喜平

寺内萬治郎 畫

クリ死んでしまひました。

身寄りもない獨り者なので、家主の指圖で長屋の者が集まり葬式をすませました。

葬式がすむと、家主は六兵衛の家へ長屋中の者を集め、六兵衛のかたみ分をしました。

元々貧乏の六兵衛のことって、目ばしい物はありません。

六兵衛と一番親しくしてゐた、下駄の齒入れ屋のお爺さんは、六兵衛の着てゐた古布子と帯を貰ひ病氣中に、よく世話をした糊賣りのお婆さんは、鍋釜と飯櫃をもらひ、隣に住んでゐる按摩さんは、襦袢に股引をもらつて喜びました。そのほか、土瓶に茶碗を貰ふ者、手桶を下げる者、膳や皿を持つて

江戸の場末の町の裏長屋に、紙屑屋の六兵衛と云ふ獨り者がゐました。正直者の上に、花見遊山にも行かず、セジセと稼いでゐるので、近所でも評判の好い男でありました。

ある日フト風を引いたと云つて寝たのが元で、五六日病つてボツ

ニコ／＼する者、下駄一足でブツ／＼云ふ者のある中に、六兵衛の棺桶を寺へ擔ひで行つた、權六に甚八と云ふ二人の者は、葬式の世話をよくしたと云ふので、商賣道具の秤と籠、それから籠を貰ひました。

家主は長屋中の者に向つて、

「イヤ、御苦勞／＼、皆んなよく世話をしてやつたから、六兵衛さんも喜んでゐるだらう、そこで六兵衛さんは、あゝいふ稼ぎ人だから、平常は貧乏のやうだつたが、いくらか貯めた金があるかも知れない、初七日でも過ぎたら、皆んなに手傳つてもらつて、家中の掃除をして見やうと思ふが、この長屋の中で、一人でも抜け駆けをし

て、探がすと承知しないよ……アアこういふ話がある、金をウソト貯めて死んだ者の念が残つて、夜その男の幽霊が、金が惜しい惜しいと云つて、出たと云ふ事だ、この長屋の者に不量見の者はあるまいが、もしあると、六兵衛さんの祟りが怖いよ。」と云つて、權六と甚八の方をジロリと見ました。この權六と甚八の二人は、古くからこの長屋に住んでゐますが、怠惰者でこれと云ふ商賣もなく、ブラ／＼遊んでゐる、評判のよくない男でした。

ドツチを取ると云つても面倒だから、イツソ二人の物として、道具屋へ賣つて金にして分けやうではないか。」と權六が云ふと、甚八は「ム、いゝ考へだそれがいゝ／＼しかし大屋さんがイヤナ事を云つたな。」

「ナニ、あれは己達への當コスリよ。」

「ナニ當コスリの話じやあない、ソレ六兵衛の念が残ると云つたぢやあないか、もう日が暮れるせ、この家にグズ／＼してゐるのも氣味がわるい。」

「ナンダ柄にない弱いことを云ふ男だ、そんな事を思つてゐると、六兵衛が出るぜ。」

「おどかすな／＼、ナンダカ、ゾ

ク／＼して来た、早く貰つた物を持つて歸らう。」

「マテ／＼二人で擔いで行かう。」と、籠と秤に籠を細からげにして棒を通して二人は「ヨイショヨラショ」と掛け聲で、擔いで歸りました。

やがて家へ入らうとした途端に入口の柱へ籠を打つ付けたので、「アブナイ／＼、シツカリ／＼。」と二人はヨロ／＼しながら、家へ擔ぎ込みました。

「あゝガツカリした、馬鹿に重かつたせ。」と云ひながら權六は籠を見て、

「やッ、シマッタ、ヘツツイの角を壊してしまつた、賣物にキズをつけちゃあ大變だ。オヤッ、崩れ

た角からヘンナ物が見えるぜ。」と云へば、甚八も、

「ナルホド妙な物だな。」

「ドレ／＼、出して見やう。」と權六は、土を崩して引き出したのは、反古紙に包んだ、ズッシリと目方のある物でした。

「オイ甚八、ナンダラウ、開けて見ないか。」

「己はイヤだ氣味がわるい。」

「弱い奴だな。」と權六は紙包の二重にも、三重にも封のしてあるのを破りますと、甚八も何が出るかと、怖は／＼覗いてゐましたが

やがて出た物を見て、二人はアッ



理です。紙包の中から出たのは、ビカ／＼光つた小判が十枚。

二人は顔を見合せたまゝ、暫くも出ませんでした。が、權六は小聲になつて、

「オイ甚八、靜にしろ、大屋さんの云つた通り、六兵衛が内々貯めてゐたのだ、しかしヘツツイヘ塗りかくすとは巧く考へたな。」

「大屋さんと呼んで來やうか。」

「馬鹿ッ、ヘツツイを貰へば、中にある物は己達の物だ、二人でコツツリ取つてしまへば誰も知りやあしない。」

「それに違ひないが、この金を取つたら、六兵衛が怨むだらうな。」

「ナニソナ事があるものか、それ共お前がイヤなら、己獨りで貰つておかう。」と權六は、金を持つて懐へ入れやうとしました。

甚八は慌てゝ、

「マ、待つてくれ、氣の早い男だ。誰もイヤとは云はないよ、ナンデモお前にまかせから。」

「それあ當り前だ、マアこの事は明日にして、前祝に一杯やらう。」

と、二人は酒肴を買つて來て、飲みはじめましたが、甚八はチツトモ酔ひません。

「オイ權六、酔つばらつて大事な物を落してはいけないぜ。」

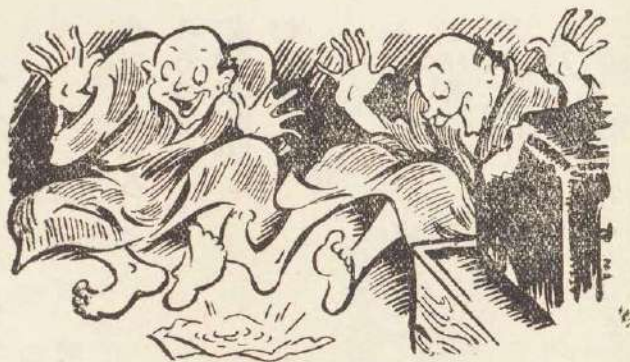
「大丈夫だよ、しかし心配ならお前預つてくれ。」と、權六は金包を甚八に渡し、ゴロリとそこへ、高所で寝てしまひました。

「あの話の通り、この金には六兵衛の念が残つてゐるに違ひない、イツン權六に皆んなヤツテしまはうか、イヤそれは惜いな、權六一人に儲けさせるのはイマ／＼しいと云つて六兵衛に出られては大變だ。」と思ふと、天井で鼠のゴトゴトするの、雨戸の風でガタ／＼するの、氣味がわるく、だん／＼夜が更けて、近所はシンとして、遠い寺の鐘が幽に聞え、もの凄くなつてくるので、甚八は蒲團をスツボリ頭からかむつて、ブル／＼慄へてゐました。

やがて傍に寝てゐた權六が、

「ムーム。」と唸つて起き上るやうすに、

「アッ六兵衛が出て來たのか。」



と、甚八は蒲團の下から、怖は

「御免なさい、おつれになる

怖は覗くと、いつ行燈が消えたのか、眞暗闇になつてゐました。

權六の眼にはこの暗闇に何か見えるのか、

「六兵衛さん御免なさい、金を取らうと云つたのは、ホンの戯談だ、どうぞ命ばかりは助けて下さい、あの金は甚八が持つてゐます。」と云ふのに、甚八はビツクリして、金包を放り出してまた蒲團をかむつて、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」と慄え聲で、念佛を唱へてゐました。

スルト權六の聲で、

なら甚八、一緒に。」

これを聞いた甚八は、

「アッ」と云つて、頭の上で手を合せ、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

やがて雨戸が、ガタ／＼音がすると、權六の聲も聞えなくなり、ヒソソリとしてしまひました。

甚八は蒲團の中で、小さくなつて慄えてゐましたが、夜明鳥の聲に、起き上つて雨戸を開けて見ると、金包も、權六の姿も見えず、おまけに秤も籠もなくなつて、角の崩れた、竈が一つ残つてゐるばかりでした。

(をばり)

みそつちよ (推薦)

茨城石崎青花

うぐひす (推薦)

埼玉逸見子鳩

夜霜 寒かろ

みそつちよ、よ

夜明の戸口に

来て啼いた。

うぐひす
ないたな
ごの木だな
花が

あるから

あの木かな

ホーホ

ホケキヨ

またないたな

あの木だ

みそつちよ、ちやつちや

こげ茶いろ

戸口が開てる

お入りな。



あの木だ
すぐそばだ

樺太の鳥 (推薦)

樺太高橋十成

樺太の鳥が

落葉松橋渡つた
黒い下駄 穿いて
黒いマント 着て
黒い傘 さして
雪の日に
一本足で
一本橋渡つた

さいかち (推薦)

山形村山俊太郎

河邊の さいかち

ちやらり ちやらり

さむい

残り さいかち

北風 寒い

雀 寒雀

ちやらり ちやらり

すゝめ

さいかちつゝいて

ちやらりこ雀

四月八日のお釋迦さま(推薦)

群馬 青柳花明

四月八日の

お釋迦さま

生れたばかりで

赤ん坊さん

花を飾つた

花御堂

中で甘茶の

ぶぶ浴びた

里子(推薦)

大阪 名方和郎

里子に來ました

街の子は

夕焼お空を

見えました

田舎は淋しい

夕暮れに

啼き啼き渡る

親子鳥

里子は

ひこりぼつち

裏山で

歌をうたつて

居りました

春(推薦)

茨城 廣瀬 正

たんぼぼ

小坊主

なに見てる

小鳥アつついて

飛んでつた

たんぼぼ

小坊主

なに見てる

牧場の丘の

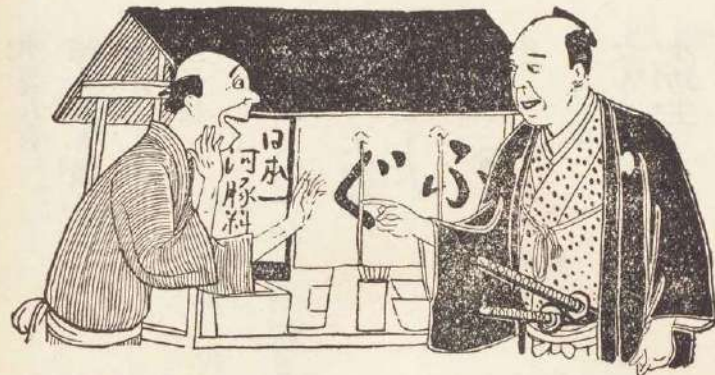
日はぬくい

なにも知らずに

親牛は

けふもお乳を

こられてる



河豚と貴殿か

北村壽夫

水島爾保布畫

四四

むかし、ある藩に、鈍左衛門といふ武士がゐりました。たいそう、真面目な人で、おとなしく、毎日毎日、お城へ出てはお役目だいじと務めてゐました。それに、この人は、剣術もよく出来ます。ですから殿さま始め友だちたちにも、たいそう可愛がられてゐました。

ある春の寒い晩です。鈍左衛門はお城でご用をしてゐて、家へ歸るときは、もう、とつぷりと日が暮れてゐました。

「寒い、寒い……」

鈍左衛門は、道のあるきながら、ぶる／＼と、身戦ひばかりしてゐました。

「ほんとに寒いなあ。まるで、冬のまつ最中のやうだわい。」

かう、ひとり言をいつてゐると、ふと、むかうの

方から、車をひいて来る者があります。何だらうと思つて見ると、車には、あかりが點いてゐて、小さな旗がたつてゐます。旗には

日本一——暖かくてうまい河豚料理
さあさ、いらはい。いらはい——

と、書いてあります。

「はて、河豚とは何だらう……」

それを見ると、鈍左衛門は考へこみました。が、分りません。何しろ、この藩には、まだ、どこの海を探しても、昔から河豚といふものがないのです。まして、河豚のお料理などといふものは、一度だつて聞いたこともありません。

「おかしい奴だ……」

と、鈍左衛門は、ふしぎに思つて、づか／＼と車のそばへ近づきました。そして、

「おい。」

と、聲をかけました。

すると、車をひいてゐる男は、車をとめて、

「はい、はい。差上げますか……?」

と、喜んで言ひました。

「いや、喰ふのではないぞ。まづ、河豚といふのはどんな物だ。鳥か、獸か、それとも、何か野菜でもあるのか……」

鈍左衛門がかう聞くと、男は、びつくりして、鈍左衛門を見つめました。やがて、笑ひ出して、
「お冗談ばかり仰言ひます。旦那様、河豚は魚でございますよ。」

と、言ひました。

「なに、魚だと……」

鈍左衛門はうなりました。が、すぐ、かう聞きました。

「その魚は、うまいか。」

「うまいのなんのつて、頬べたが落ちさうですよ。」

四五

それに、こんな寒い晩、これを喰べると、あんなには入つてゐるより、よほど暖まります。一つ、ためしてごらんさい。」

「なに、暖まる。」

鈍左衛門は、さう聞くと、急に、その魚が喰べたくなりました。寒くて寒くて立つてもゐられない時です。

「よし、然らば、一晩所望せう。」

と、鈍左衛門は言ひました。

「はい。はい。少々、お待ち下さい。」

男は、よろこんで、火を起し、鍋をかけて、河豚の料理にかゝりました。

が、やがて、鍋は、うまさうに、ぶつぶつと音を立てて煮立ちました。

「旦那さま。召上りませ。」

男にさう言はれて、鈍左衛門、

「うむ。酒をくれぬか。」

と、一聲、鈍左衛門は、空をつかんで打ち倒れました。驚いたのは、家の者です。

「父上。」

「旦那さま。」

と、大聲でとなりましたが、鈍左衛門は返事もありません。おゝ！ きつと、父上は間打にあはれたのだ。さう思つて、悴の鈍太郎は、

「お父上、して、相手は誰でございます？」

さう、聲をかざりに聞くと、鈍左衛門は、

「河豚ちや……」

と、呟いて、とうたう死んでしまひました。

二

相手は河豚……さあ、それを聞くと、鈍太郎は、ちつとしてはゐられません。が、鈍太郎も、まだ、生れて河豚といふものを知りませんから、きつと、これは、河豚某といふ、どこかの武士だと思ひこみ

と、河豚を肴に、ちびちびと酒のみ出しました。が、まあ、そのおいしいこと、まだ、生れて、これほどの、珍らしい料理も、これほどの甘い料理も喰べたことはありません。

「うむ。これは甘い。これは珍味ちや。」

と、鈍左衛門、喰ふわ、喰ふわ、それこそ、胃袋からはみ出して、のどまで塞くるくらゐ、たらふく喰べました。

なるほど、暖かくなつたことと言つたら、火鉢をお腹の中へ入れてゐるやうです。

「や、これは有難い。おかげで、寒さが感じられなくなつたぞ……」

鈍左衛門は、よろこんで、お金をはらつて家へ歸りました。が、家へつくと、さあ、たいへん、河豚の毒が、鈍左衛門のからだ中にまはつたのでせう。

自分の家の園をまたぐと、

「うゝむ、残念ちや……」

ました。

が、河豚某といふ武士は、きつと、油斷の出来ない腕達者な奴にちがひない。何しろ、父上ほどの剣道の達人を、刀きづ一つつけないで殺してしまつたのだ。ことによると、當世第一の噂のある、竹内加賀之助以上の、柔術の名人かも知れないのだ。

「これは、氣をつけないけなしいぞ。」

鈍太郎、その日から、一生懸命、父の仇を討つてご無念をはらしたいばかりに、雨の日も雪の晩も、命がけて剣術と柔術の修業です。それを三年やつて、やつと、これで大丈夫といふところで、いよいよ、仇討の免狀を願ひ出しました。何しろ、父の鈍左衛門は、殿さまのお氣に入りの家來でしたから、この仇討が許されないことはありません。

わざわざ、鈍太郎にお目通りを許され、その上、お盆さへ下さいました。

「鈍太郎、しつかりやつて參れ。河豚といふ武士は



四八
よほど、手剛い奴らしい。心して、返り討などにはなるなよ。」
と、まだ、河豚を見たことのない殿さまも仰言ひます。

「はい。鈍太郎、草を分けても必らず、河豚某といふ仇の武士を尋ね出し、父の恨を晴らす所存でございます。」

と、鈍太郎、かたく、お受けをいたしました。そして、殿さまの下さつた多分の路銀をもつて、いよいよ、仇を探しに、鈍太郎は、なつかしい故郷を立ち出でました。

が、河豚某は、どこの藩か、どこの家中の侍か見當がつきません。まづ、人の集まるのは、大阪の町そこへ行つてみよう、と、鈍太郎、足をいそがせてやつてまいります。その道々も、仇に氣を配つてをりますが、どういふものか、そやつらしい者にも行き合ひません。鈍太郎、つくづく、考へるには、河豚



某といふ奴、恐らく、身の丈六尺もある、立派な男にちがひない。胸には長い毛が生え、顔は鬼の如く、二つの眼は、らんらんと星のやうに輝いて、手

には、六十貫ぐらゐもある太い鐵の棒をたづさへてゐる。

きつと、そんな奴に違ひないと考へてゐます。

で、道々、大きなからだをした浪人者に逢ふと、かたつばしから聞いていきます。

「貴殿は、河豚氏とは申されぬか。」

すると、ある者は、笑ひながら、

「はつはつ、某は河豚ではないぞ。鯨ちや。鯨吹左衛門と申す。」

と、言ひます。また、次に聞いた侍は、

「某も、河豚ではない。某は、鯛野跳右衛門源助と申す。」

と、さう言つた工合で、鯨や鯛ばかりで、河豚といふ武士は、ひとりも逢ひません。

「これは困つた。南無弓矢大八幡大菩薩、何卒、ご加護をもちまして、父の仇に行き逢はせ給へ。」

さう念じつつ、大阪へはいつて來ました。そして、

心齋橋筋のある宿屋にとまつて、毎日毎日、仇を尋ねてゐましたが、どうしたものか、さがす仇には逢はないのです。

その中に、殿さまの許した三年の月日は夢のやうに過ぎました。いくら仇が討ちたくても、殿さまの言ひつけに背くわけにはいかないので、鈍太郎、残念ながら、とぼとぼと、再び故郷めざして歸つてきます。

あと、半日で、なつかしい故郷の町へつくといふところで、日がとつぷりと、暮れてしまひました。

鈍太郎、心はせきながら、だいふ疲れもしたので、その晩は、その小さい宿屋へとまりました。

そして、朝になると、その宿屋を立ちいでましたが、出がけに、宿屋で途中で喰べる辨當を作らせました。それをもつて、ぶらぶらやつて來ると、ちやうど、もう、お晝です。

「さあ、辨當にしよう。」

にもなりません。が、歩いてゐる中に、お腹がすいて、たまらなくなつてきました。

「え、もう我慢ができません。喰べよう。」

と、鈍太郎、とうたう、その辨當をたべて、さてなつかしい我が家へ着くと、

「うん……」

と、一聲、毒にあたつて倒れました。

「あ！ 兄上が……」

出迎へた弟たちは、びつくりして、

「兄上、ど、どうなさいました……？」

と、おろおろ聲できくと、鈍太郎、

「残念ぢや、相手は河豚……」

さう言ふなり、これも息は絶えたのです。」

三

さあ、鈍太郎の家ではもちろん、殿さまも、家中の人々も大騒ぎです。

鈍太郎、松の根に腰かけて辨當をあけると、これは不思議、今まで、見たこともない妙な魚が入つてゐます。どう考へてみても解りません。と、そこを、一人の魚賣りが通りかかりました。鈍太郎は、さつそく、魚賣りを呼んで、辨當を見せてきゝました。

「これこれ、この魚の煮つけは何といふか？」

魚賣りは、つくづく見てゐましたが、

「旦那、こりや、河豚ですよ。」

「なに、河豚……」

鈍太郎、河豚ときいて、びつくりしましたが、相手は武士どころか、一片の魚です。まさか、仇は、れとは思はないので、よくも、同じ名前をつけたものだ、とおかしくなりました。

鈍太郎は、魚屋と別れて歩き出しました。が、辨當は喰べません。たとへ、それが魚であつても、憎い仇と同名の魚であつては、胸糞が悪くて喰べる氣

「また、鈍太郎がやられた。闇打の相手は、やはり、鈍左衛門を殺した河豚某といふ奴ださうだ。」

この噂で、藩中は、ごつた返す騒ぎです。鈍太郎の弟の鈍次郎は、これを見ると、そのまゝ黙つてはゐられません。自分は、どうかして、父上と兄上の重なる仇を討たねばならない。さう思つて、それから、火の出るやうに武術の稽古にはげみました。

が、鈍太郎が三年の修業でも討たれたのですから今度は、よほど、修業してかゝらないといけません。

鈍次郎は、とうたう、六年といふ修業をつんで、いよいよ、二度目の仇討に出かけました。殿さまも一生懸命です。出かける前に、やはり鈍次郎を招いて、澤山の路銀と、今度は立派な、一貫子近江守といふ刀をひと振り下さいました。

鈍次郎は、これをもつて、意氣揚々、兄の鈍太郎とは反対の方へ足をすゝめて行きました。

が、鈍次郎、運がいいのか、次の町へは入ると、ふと、目の先に、一つの看板が目につきました。見ると、大きな字で、



ふぐ……

「やあ！」

鈍次郎は、これを見ると、雀躍して、

「おう、天の助けか。こゝに仇、河豚某なる武士は隠れてゐるのだ。ありがたし。ありがたし……」

天を拜んで、とつとつと、いきなりその店へ飛びこみました。

「尋ね申す。河豚氏は御在宅か……」

店の者は、きよろきよろしてゐます。

「え、何でございますつて……」

「河豚氏は、ご在宅かと申すのだ。ご在宅ならば、取次いでもらひたい。折入つて用件の筋がござるのぢや……」

店の者は、あつけに取られてゐましたが、きつとこいつ、少し氣違ひなのだらう。河豚料理をたべに來たに違ひない、と、ともかく座敷へ通しました。そ

「いかにも。火急ぢや。早く、そやつに逢はして貰ひたい。」

「はい、只今……」

店の者は可笑しさを堪えて引退ります。鈍次郎、そのあとで、手早く、襷をかけ、袴の股立をとつて大刀の鯉口をきつて待つてゐると、持つてきたのは銅……

「何だ。これは……おれの用のあるのは、河豚氏なのだ。」

鈍次郎、目をばちつかせてどなりました。

「ですから、河豚はこれでござります。」

店の者がいくら言つてもきゝません。その中に、店の者が、氣がついて、鈍次郎に、委細をきくと、どうも、父と兄とは河豚の毒に命をとられたらしい。それを鈍次郎は、武士だ武士だと思ひこんでゐるらしいのです。

「旦那さま。きつと、さうで御座いませう。」



して、
「旦那さまは河豚を召しますので……」
と、きくと、鈍次郎、

店の者に言はれて、鈍次郎も初めて、さうか知らと氣がつきました。で、念の爲に、

『この魚は、人の命をとるか……』

『お、兄上……』
弟たちは、驚いて呼びました。

『ど、どいつが兄上を殺したのです……？』

『河豚ちや……』

と、聞いてみると、

鈍次郎は徹かに言ひました。そして、息を引きとつてしまひました。

『とりまずとも。時々、毒にあたつて、倒れる方がございます。』

『お、また、河豚といふ武士にやられた。』

その答をきいて、鈍次郎、では、仇はこいつか。魚たりとも容赦しがたい奴、身共が、仇をとつてやると、口惜しさうに、がりがりと、河豚の料理をたべ出しました。

『思ひ知つたか。』と言つては喰べます。

この話をきいて、藩の中は、先にも増した大騒ぎです。親子三人を、一つの傷もつけずに倒すとは、その河豚某といふ武士、まあ、どれほど強い奴であらう。めつたに仇討ちは出来ない。次の弟の鈍三郎は、せめて、九年の修行をつまねば、仇討ちは難かしいに違ひない。

『思ひ知れ。』と言つては喰べます。さうして、澤山澤山、がりがりと喰べてしまふと、鈍次郎は、仇を取つた嬉しさで、我家へ飛んで歸りました。

殿さまは、さう言ひました。そして、次の弟、鈍三郎の仇討をなかなかお許しになりませんでした。河豚某……その武士は、日本一の武藝の達人だと思ひこんでおいでなのです。

『喜べ。喜べ。仇はとつたぞ。』

三郎の仇討をなかなかお許しになりませんでした。河豚某……その武士は、日本一の武藝の達人だと思ひこんでおいでなのです。

が、さう、となつて、鈍次郎も、ばつたりそこへ倒れました。河豚の毒にあたつたのです。

（をばり）

童 心 句 野 口 雨 情 選

○節分や福は舞込め鬼は外 東京 福島 正夫

（評）まひこんだ、まひこんだ、まひ込んだ。

村祭晴着引出す子供たち 東京 藤澤 一郎

笹の葉がお日様うけて光つて 千葉 貴田 幸子

餌をやると元氣な鶏が跳び上つた 栃木 高橋 章

雪だるまお日さん出たのでさようなら 東京 金子 虹詩

○雪だるま油断してるな日が照るよ 茨城 安 勝比古

（評）雪だるま曰く『困つちまふな』

ねぎ坊主しよぼく雨にうたれてる 豊橋 澤田 利男

春が来て枯れた木草に芽が出てる 東京 小池 秀詩朗

夢にみるゴンドラ舟かお月さん 一軒家この夕焼はばくのもの

おばあさんこたつの中で針仕事 東京 後藤 賢三

富士山は雪のかんむり雲の帯 東京 大蔵 利雄

冬枯に一つのこつた柿のへた 静岡 山崎 孝

一羽来て一羽はかへる寒雀 東京 小林 一路

○あの原で狐が蝶々に化したとき 東京 小 林 一路

（評）二羽来れば二羽かへる。

○毬抱いた子猫の夢は毬の夢 東京 澁谷 正治

長い柳向ふの岸に橋かけた 東京 澁谷 正治

（評）ちよつびりと。

○をんどりが隊長になつて歩いてゐる 東京 澁谷 正治

（評）威張り腐つて。

節分や鬼も驚く豆の音 豊橋 澤田 美津緒

惟然坊さん

杜 仙之介

川上四郎 畫

美濃にゐたころ

惟然坊さんは

お味噌がないこきや

お味噌がないこ

稚の葉つばへ

ちひさく書いて

誰も起きない



夜のあけごろに

家を出て行つちや

お寂しさうに

他家のお門へ

葉つばをおいて

ごつご〜ご

歸つてみえた



(註) 佛人惟然坊は美濃國關町で貧乏な生活をして居ました。手紙を書にも、その紙さへも無いため、稚の葉をよぎつて紙の代りに使用たと傳られて居ます。



魔女の鳥

山本 二郎

岩岡とも枝 監

一、歸つて来た達麻

涼しい風に羽を吹かれて、ふと達麻が眼を醒まし、大きな鳥の背に乗って、「不思議の森」の空を高く、東春の村の方へと飛んでゐるのを見た。見ると、みずほらしいお家の、壊れかけた窓からは、まだお母さんが起きてゐるのか、淋しい燈火の光が漏れてゐるのを見た。間もなく、鳥は、すうつと、音もなく、その家の戸口に降りました。

達麻は急いで、大鳥の背中から降りました。すると、大鳥は、再び空高く舞ひ上つて雲のやうに早く、空の一方に消えて行きました。達麻は、大急ぎで、窓に登つて、中の様子を見てみました。ところが、小屋の中にはお母さんが只つた獨りで、レモンボリと、赤いさうな顔をしたながら、淋しげに頭をうな垂れて、坐つて居ました。卓子の上には、地獄の時にこぼれた、幾つかのコップがまだ乗つ

かつてゐました。お母さんは、どつと頭をおさえて、時々、喉り泣きの聲をへ、もらしてゐるのを見た。達麻は、もう堪らなく胸が一杯になつて、「お母さん、僕です、お母さん！」と、呼びかけました。お母さんは、行方の知れなくなつた達麻が不意に窓の外で呼んでゐるので、狂気のやうに跳ね起きて、急いで小屋の戸を開けて見ました。お母さんは、

「まあ、お前は……」

と飛びつくやうに、しつかりと達麻を腕の中に抱き締め、

「達麻は、何んなに心配したかしたなかつたまあ、よかつた……けれど、お前は一體、今まで、何處に、何をしてゐたの？」

と、息をせいて、訊きました。そこで達麻は「不思議の森」や「真珠の洞」での出来ごとを、詳しく、すつかり話しました。

お母さんは、達麻の意外な話に、すつかり驚きました。中でも、黒い大鳥の話や、桃色真珠の首飾りの話は、お母さん何んなに吃驚させたかしたなかつたのでした。

達麻は、お母さんから、王様の宮殿が、あれから又二度ばかりあつた、大きい地震のために、又新しいひと割に、方々に出来たと話されました。それが爲めに神統王は、心をなやまして、宮殿の破損を直して呉れた者には、銀鬚王女ばかりか、國王の位までも與へると云ふ、法外な御恩を召した、光那全士の隔々にまでお傳へになつたと云ふ話

を、またお母さんから聞かれました。

お母さんは、この話をした後で、又言葉を変えて、言ひました。

「けれど、達麻や、その代り宮殿へ行つて、もし結ひが出来なかつたら、その人は皆殺されるといふ約束なのです。だからお前も、うかつかり宮殿の修繕などを申し出ると、それこそ、大變な目に會ひますよ。」

お母さんはさう云つて、達麻の決心を疑さうとしましたが、達麻は、何の恐れもなく、

「お母さん。大丈夫ですよ」と答へるのです。「僕は決して、失敗などしつこはないんですよ。王様の宮殿も、きつと立派になほして見えますよ。」

達麻が、さう云ひ張つてきかないので、お母さんもうとうとう、我を折つて、

「そんなら、兎に角一度行つて見るがよい。」と、やつと許しを出しました。

その次の日です。達麻は「真珠の洞」の小人が指へた、あの不思議な真珠の練り物を、そつと懐中に入れて、真珠の首飾りを首にか

け、いそ／＼と小屋を出ました。

お母さんは、小屋の窓から、心配する顔で見送つてゐましたが、達麻は後を、振りがへつては、お母さんの方へ手を振つて、愉快さうに出て行きました。

二、銀鬚姫

達麻は、やがて、遙かに聳え立つ宮殿の姿を眺めて、全身の血が、湧き立つやうに思ひました。

宮殿の門の前まで来ますと、これは又、何と云ふ物凄い光景でせう。たくさん人間が生首が、宮殿の外の前の上に、並べてゐるのです。さすがに、達麻も、それを見ると、ぞつとしました。

「こんなに澤山の人間が、宮殿の修繕を申し出て、失敗したんだなあ！ それにしても、可哀さうなものだ。」

と、心のうちで、聲にお甲の言葉を云ひながら、達麻は、神統王の宮殿へと進入して行きました。

「私は、宮殿の破損を、お修繕に申すために上りました者でございます。何うぞ、王様に御取次ぎをお願いします。」

と、門番に申し入りますと、門番は、呆れかへつたやうな顔をして、

「お前は、あの、門の前の、多勢の首を見て来たのかな」と、云ひました。

「はい、見て来ました。」

「お前は、あれを見ても、まだ何とも思はないで、大膽にもそんなことを申し出て来たのか。」

「はい、私は、充分、あの宮殿を修繕することが、出来るかと存じます。どうか王様に、お取次ぎ下さい。」

「よし、それ程、命の要らない奴なら、今王様に取り次いでやるから待つてゐるが、い。」

さう云つて、門番は、奥へ遁入りました。暫く待つてゐますと、連麻は、やがて、王様の前へ通されました。そして、

「陛下、私は、宮殿のあの恐ろしい亀裂を、お修繕いたしますために、特に参上しい方法

を考へて居ります。どうか、私にお役目を仰せ付け下さりますやうに、お願申し上げま

す。」

連麻は、ていれいに云ひました。すると王様は、

「よし、それでは、直ぐに、お前のその珍らしい法とやらを、行ふがいい。だが萬一、それが不首尾に終つたら、お前の首は、たちどころに飛んでしまふが、それでもいいか。」

さう言つて、連麻の頬を、じろ／＼と眺めるのでした。

「はい、それはもう、充分覺悟をいたして存じます。」

「よし、では、早く修繕にかゝれ。」

そこで、連麻は、宮殿の四側の、一番最初の亀裂で出来た、大きな亀裂のところへ登つて行きました。連麻は、藤くもをさへて、小人の登えた、眞珠の練り物を大きな裂け目へ詰め込み、その次に、首にかけてゐた首飾りを外して、壁の上へ置きました。――あの「眞珠の酒」で毎日、柱の傷をなほした通り

に、さうして今にも、この壁の亀裂が、跡形もなく消えてしまふと、息を凝して見つめてゐました。

ところが、これは、何といふ意外！いつまで待つても、その大きな壁の亀裂が少しもなほらず、眞珠の練り物は亀裂の間に詰められたまゝ、桃色の固りになつてしまひました。

そのとき王様は、

「あの子供は何んなことをするのだらうか。」と、四十人の護衛の勇士を連れ、眞善徳姫を伴なつて、宮殿の前の廣庭から、御覽になつて居りました。だが、いつまで御覽になつてゐても、少しも亀裂はなほらず、大きな裂け目は、ボツカリ開いたまゝになつてゐますので、すつかり痛癢を起してしまひました。

「首斬り役人共を早く呼べ。そして、あの子供の首を、叩き斬つてしまへ。」

王様は、恐ろしい命令を下しました。思はず連麻は、ぢいつと目をとぢしまひました。いつの間にか、さすが連麻の如にも



言ひやうのない哀しみが現れ、そして唇は、だん／＼と蒼ざめてゆくのでした。

……と、其時です。お傍について、ちつとこの有様を見て居た、あの王女の眞善徳姫が急に聲をあげて、

「お父様。」と叫びました。お父様、も少し待つておやりなさいまし。今にきつと、立派に仕上げるに違ひございませんから。」

「いや、修繕が出来なければ、直ぐに首を斬ると云ふ約束だ。臨ふな、直ぐに首を斬れ。」

王様は、急ぎ込んで又もかう命令をお出し

になりました。

「お父様、どうぞお願です。あの子の命は、もう少し延ばしてやつて下さいまし。」

眞善徳姫は、又もやかう言つて、王様へお頼みなしました。王様も、もと／＼大變悲しい方です。たゞ御自分の命よりも大事にしてゐた宮殿が散々に壊れてしまつたので、近頃は直ぐ御立腹なさるやうになつてゐたのです。今、眞善徳姫が、かうしてお頼みになりますと、少しは、以前の悲しい王様に返られたのか。

「よし、それでは、明日の今頃まで、首を斬るのを待つてやる。それまで、あの若者を牢屋の一番奥へ押込めて、充分な見張をしる。」と、仰せになりました。

そこで、連麻は、王様の特別なお情けで、一時首を斬り落すことを許されて、宮殿の下にある牢屋の一番奥深い一室へ、投り込まれました。そして兵士たちが、厳重に見守ることになりました。

連麻は牢屋の中でも、土間の間には、まだ

しつかりと、小人の指した真珠の練り物をしまひ込んで、おばあさんが、首にかけて呉れた、真珠の首飾りを、ちやんと巻きつけてゐたのでした。けれどもそれが今、何の役にも立たないと思ふと、くやしいとも不思議とも言ひやうがありません。

「宮殿の龜裂は、何うすれば一體なほせるのだらう。僕は死んでも仕方がないとしても、お母さんは、何んなにお嘆きになるだらう。そして、お母さんはこの先き、何うして暮してお行きになるのだらうか。」

達麻の心は、それから、それへと、色々な思ひに、翻れて来るのでした。

そうして、ほつれんと、その半屋の冷い部屋の中に、たゞ獨り座つて考へ込んでゐますと、後の方で、ガタリと、半屋の門を引くと、響きました。達麻が、ひよいと振り向きまると、そこへ、靜かに這入つて來たのは、王女の銀齒微姫でした。

銀齒微姫は、淡い蒼藍色に、銀の刺繍のある美しい着物を着て、その足には銀の靴を穿

き、頭には、優し銀の蝶々の簪をさして、うんと、立つて居ましたが、銀のやうな朗らかな聲で、

「達麻！」

さう聲をかけました。達麻は、餘りに思ひがけない、王女様のお出でに、ちよつとまごまごしてゐますと、それと察した銀齒微姫は「いゝえ、安心なさい。私は、あなたを助けに來たのですから。」

と、ニコリ笑ふのでした。

「私には魔法使ひのお母さんがあるのです。お母さんは、時々、夢の中へ出て來て、私に色々なことを話すのです。昨夜も私は夢の中で、そのお母さんが、達麻と云ふ少年の手をとつて、私の處へ連れて來たのを見たのです。それは、紛れもなく、あなただつたのです。夢の中へあなたは、大變、淋しうて、悲しい顔をしてゐましたが、お母さんは、其の時にお前は、桃色、真珠の練り物で、宮殿の破損を修繕するのだよ、と云ひました。そこで、夢は醒めてしまつたのです。私は、其の時は、

その夢が何のことやら判らなかつたのですが、あとになつて、すつかり、其の夢が判りました。」

銀齒微姫はさう語り終つて、もう一度しげと、達麻の顔を見つめてゐた。恐ろしい魔陣の中で、只つた一人の味方に會つたやうに、達麻の心には、だん／＼と強い力が湧いて來るやうです。

「銀齒微姫さま。達麻は云ひました。『あなたが王様に、私の命乞ひをして下さつたときから本當に私は有り難く思つてゐます。』」

達麻がさう云ひますと、王女は又、手にはめてゐた銀の指環を抜き取つて、

「これは私のお母さんが下さつた、魔法の指環なのです。この指環のお蔭で、今私は、番兵達の見張りを通り抜けて來たのです。此の指環を、はめてゐる手で、假に觸れたものは、暫くの間は、石像の様に固くなつてしまふのです。これを上げますから、早く此處を逃げ出して、もう一度、あの破損を修繕するために、この宮殿へ來て、お働きなさいま

し。」

と云ひました。さうして、その銀の指環を達麻に、差し出しました。

その銀齒微姫の差し出した、銀の指環を見た時、達麻の胸には、ふと一つの考へが浮んだのでした。

「王様の御前が直らないのは、真珠がまだ足りないのかも知れない。よし、そんなら、この不思議な指環を、只一つ身の守りとして、これから、あの魔の洞を征伐しよう。そして真珠をすつかり、奪つてやらう。」

かう考へると達麻は、もう一刻もちつとしてゐられませんでした。

「銀齒微姫さま。達麻は叫びました。『それで御遠慮なく、指環を頂いておきます。何か何まで、色々、御親切にして下さいまして本當に有り難う存じます。』」

「いゝえ、それよりも、一刻も早くお逃げなさい。ぐす／＼してゐては駄目ですから。さあ早く、私についてゐろしやい。」

云はれるまゝに達麻は、冷めたい半屋の中

を抜け出して、くれ／＼と曲つた段々、幾つも登つて行きました。すると壁と壁との間の、小さい窓の前へ出ました。

その窓の前には、一人の番兵が、見張りをしてゐましたが、よく／＼見ますと、それはさつき王女に、指環の魔法をかけられた、あの番兵と見えて、生きたまゝの石像と化した、動きもしなければ、又口もきかないのでした。

「では、早く、此の窓からお逃げなさい。私は、あなたが、きつと成功なさるやうに、祈つてゐますわ。」

王女は、さう云つて達麻を急がせました。

「有り難うございました。」

達麻は、小窓の上に進ひ上がつて、

「真珠の洞の黒鳥、僕のところへ來い！」

と、云ひました。直ぐに、大きな鳥の羽音が聞えて、大鳥は飛び下りて來ました。達麻は、ひらりと其の鳥に乗りました。そして、

「真珠の洞へ！」

と、叫びました。

「銀齒微姫さま、左様なら！」

云つたかと思ふと、達麻は、もう、高く高く空へ舞ひ上りました。銀齒微姫は、あつげに取られて、不思議さうに、いつまでも鳥の飛んで行く方を、眺めてゐるのでした。

三、魔國へ侵入

間もなく達麻は「真珠の洞」へ通じる地の底の暗闇を、非常な速力で駆けてゐました。真珠の洞へ來ると、達麻は、鳥の背から飛び下りて、洞の中の、大きな部屋へと、駆けつけ、中を覗いて見ました。すると、一向、誰も居ない様子です。なほ／＼と奥へ這入つて行きますと、あの二人の大男が、床の上へ倒れて、ぐ／＼と寝てゐました。そして、その傍には、おばあさんと小人とが、何か、ひそ／＼話しながら、柱の根元のな、いつもの通りになほしてゐました。

達麻は、少しも恐れずに、立ち込んでゐる柱の間を、悠々と歩き乍ら、部屋の奥へ進みました。すると、越えおばあさんは、それを見つけて、



おばあさんは、それを見ると、地面を踏んで、「待て、待て！」と叫びました。もう何にもありません。

「眞珠の洞の大鳥、早く、早く、俺の處へ飛んで来い！」

おばあさんは、聲を枯して叫びました。だが、さつき、連麻が、おばあさんの首から、眞珠の首飾りを外して取って置きましたので、今は、いくらお婆さんが呼んだところで、

眞珠の洞の黒鳥が、驚いて来る筈はなかったのです。

その間にも、連麻の乗った大鳥は、だんだんと不思議な地下のトンネルをたどって、一瞥に北京の宮殿めざし、羽根高く急ぐのでした。

眞珠の洞では、實なすつかり奪ひ取られたのを知って、おばあさんはもう狂気のやうになつて、駆け廻つておましたが、何と思つたか、不思議な呪文を唱へながら、三度床の上を、トン、トン、トンと足で強く踏みました。

その時、連麻は「不思議の森」の上を飛んでゐたのです。すると、遙か目の下に見えるその「不思議の森」が急にぐら／＼と揺れ動いて、大鳴動を起したと思ふと、森の眞中にあつた、あの不気味な一つ家が、する／＼と地面の下に崩れ落ちました。と見るまに、その家が崩れ落ちた地の裂け目から、恐ろしい音響と一緒に、めら／＼と眞赤な焔が立ち上り、それがあたり一面包んでしまひました。それは「眞珠の洞」が、おばあさんの呪文

「おや、この音生め。よくもア、圓々しく、こゝへ来たものだ！」

と、割れるやうな大声で怒鳴りながら、飛びかゝつて来ました。小人も、驚いて、お婆さんに加勢しました。

「こちらは、連麻です。少しも聲がす、あの眞珠の洞から貰つた、眞珠の魔法の指環はめだ、右の手を差し延ばして、向つて来るお婆あさんの顔な、どんと突きますと、お婆あさんは、

「あッ！」

と云ふ間に、恐ろしい顔をして、杖を高く頭の上へ差し上げたまゝ、石の像のやうに生きながらに固まつてしまひました。

續いて向つて来た小人の顔な、これも同じやうに、コツリと突きますと、小人は、微々むき出して怒りながら、兩手を擡げて駆け出した形そのまゝに、すつかり生き人形のやうになつてしまひました。

連麻は、そこで、お婆さんと、小人が首に巻いてゐた、眞珠の首飾りを、取つてしまつたのです。

今度は、眞珠の魔法の指環を忍ばせてよく侵入つてゐた大男の傍へ近寄つて、その顔へ、そつと指環の手を觸れますと、大男達もまた、そのまゝ、石像のやうになつてしまつたのです。

併し、あの王女の語では、この指環の魔法にかゝつて、固くなつた者も、暫くすると、又もとの通り人間に還ると云ふことです。だから、眞珠の魔法の指環は居られませんか。何時その人たちが起き上がつて、飛び出して来るか知れないので、連麻は大急ぎで、眞珠の洞の方へと降りて行きました。眞珠の洞では、相も變らず、黒い小さな小人が、一心不亂に籠の籠へ立つて働いてゐました。連麻はそつと忍び足に、小人の後ろへ廻つて、その顔へ手を當てました。小人は、直ぐ、大きな杓子を持つて、釜の中を掻き混ぜたまゝの形で、小さな石の像になつてしまひました。

「これでもう、邪魔する者は、一人も居なくなつた。」

連麻はさう呟くなり、大急ぎで仕事に取り

か、りました。先づ、壁の上の下がつてゐた数限りない眞珠を、手當り次第に引き下ろして、一つにまとめた。それから今度は、眞珠の詰まつてゐる管を、出来るだけ縦山よせ集めました。

すつかりとそれが終ると、連麻は大急ぎで、あの黒鳥を呼びました。やがて、鳥が降りて来ると、一とまどめにし、眞珠や、眞珠の詰まつてゐる管をすつかり鳥の背の中へ積み込み、さうして、ひらりとその背に飛び乗りました。

ところが、恰度その時です。指環の魔法が解けたものと見え、お婆さんと小人は、あるだけの聲でわめき立て、連麻を引つ捕えやうと、眞珠の洞の戸口に向つて、駆け出して来ました。

もう少しで連麻は、二人に追ひつかれやうとしましたが、その時連麻は、大きな聲で、「北京の宮殿へ！」と叫びましたので大鳥は、ばた／＼と羽ばたきも高く、ひらりと飛び上つたのでした。

に依つて、大爆発をしたのです。其れ以来、其の通りに、毎日の様に起つた地震も、パツタリ止んでしまひました。眞珠の洞に住んでゐた者達も、その時、それと同時に、消え失せたものに違ひありません。話變つて、達麻を乗せた大鳥は、間もなく王様の宮殿のお庭へ降りました。大きな黒い鳥が、何處からともなく飛び降りたのを見たと御衛の番兵たちは、すつかりと體を震して、『大變でございます。唯今、お庭の上へ、眞黒な不思議なものが、飛び降りて参りました』と王様に告げました。王様もお驚きになつて、『何が飛び降りて来たのだらう。』

と、走り出て御覽になりました。と、その時達麻は鳥の背からしづかに降りて、王様の前へ進み出たのです。『陛下、私でございます。きつと私は、この宮殿の破損を直すことが出来ると存じます。どうぞ私の命をもう一晩私にお

預け下さいまし。さうすれば、必ず今夜のうちにすつかり、なほして御覧に入れます。』『何うして、あの嚴重な牢屋を、脱け出したのか知ら。』と、王様が不思議にお思ひになつてゐたその矢先でしたので、この達麻のきつぱりとした言葉にも、つくづくと驚いてしまひました。

『ふうむ、さうか。いや、宮殿の繕ひが、間違ひなく出来ると云ふのなら、では今夜も一晩、お前の命を延ばしてやらう。』さう答へたのでした。そこで達麻は、大鳥の背に横んで来た眞珠をすつかりと下ろして、大鳥を歸さうとしました。ところが、鳥は、今度は何うしたものか、ごつと其處から、動かうとはしないのです。

『變だな、どうして行かないのかしら。』と達麻は、よくよく考へて見ますと、『成程、さうか。』と云ふのは、『眞珠の洞』は、すつかり破壊されてしまつたので、鳥はもう、歸る場所も無くなつたのでした。

神統王は、鳥の背に積み込んだ寶を見ても見取つて驚きました。達麻は、その桃色眞珠の紐を、端から端からとほいて、大きな眞珠の網をくりよしました。さうして、小人の拵へた眞珠の網り物の詰まつた簪を抱えて、宮殿の上へ登つて行きました。それから達麻は、寶の中から眞珠の練り物を出して、それを丹念に装れた宮殿の壁の一つ一つにすつかりと詰めました。何しろ、幾度もの地震で、大きな破裂が至るところに出来てゐるので、骨が折れまゐつた。達麻は、一心になつて仕事なつてけしめた。そして、恰度、その夜も明けそめて、東の空に、キラ／＼と太陽が登り始めた頃、やつと全部を終つたのでした。達麻は、ハツ／＼と思つきました。さて、その大は、さつき桃色眞珠を繋ぎ合せて拵へた、あの大きな網で、宮殿の周圍をすつかり取り巻いてしまひました。『前の時には、練り物が少なかつたし、眞珠がちつぽけな首飾りだつたが、からすれば、

今度こそは、大丈夫だらう。』

さうして達麻は、一心に眺めて居りますと、さしもに大きかつた宮殿の破裂も、果して下の方からだん／＼と拭ふやうに、消えて行きました。見る／＼内に、その破裂はすつかりと跡方さへもなくなつてしまつたのでした。かうしてこの陶器づくりの宮殿は、以前にもまして、もつと立派に、もつと美しくびかびかと光り輝いたのです。その朝早く、王様が目醒して、この有様を御覽になると、踊り上つてお喜びになりました。

王様は、直ぐに達麻をお呼び寄せになると、『全く立派に出来たな、あゝこんな悦ばしいことはない。さあ、約束通り、お前はこれから、此の國の王だ！』

と云つて、その頭にかぶつてゐた美しい王冠を脱ぎ、達麻の頭へそつと冠せたのでした。けれど達麻は、急いで其の王冠を脱いで、王様のお手に返しました。『いいえ陛下、私は決して、そのお冠を戴かないつもりです。何うかこの國は、陛下の

お手でお治め下さいまし。』

『あゝ、お前は正直な子だ。それでは今日から、お前は私の王子になつておくれ。』

王様は云ひました。達麻も喜んで、そのお言葉をお受けしたのでした。

四、象牙の宮殿

達麻は直ぐに、東春の村へ行きました。そこで淋しく只一人で、わが子の歸りを待つて居るお母さんを、迎へに行つたのです。母の喜びは云ふまでもありませんでした。

達麻は母と一緒に、北京の宮殿へゆくと、今度はおの大鳥を呼んで、生れ故郷のビルマへ飛んで行きました。ビルマの王様の宮殿へ行つて、様子を聞いて見ますと、あの意地の悪るいおばあさんは、もうとつくの昔に亡くなつて、王様は唯一人、淋しく暮してゐたのでした。達麻は、それを聞くと、王様のお居間へ急いで行つて、面會を求めました。王様は、達麻が、只つた一人の王子であつたと知ると、思はず涙を流して、お喜び

になりました。そればかりか、達麻はまだ生きてゐてゐること、達麻から聞かされた、と、しばらくは夢を見るやうに、嬉しさの餘り、答へる言葉さへなかつたのでした。

達麻は王様に向つて、これまでの一任一任をすつかりと語りました。『さあ、一刻も早く、お母様にお會ひ下さい。私と一緒に來て頂ければ、今日のうちに北京へ行けるのですから。』

さう云つて達麻は、王様の手を取つて促しました。王様はそこで、國の政治をしばらく大任達に任せて置いて、達麻の云ふまゝに、大鳥の背に股がり、北京の宮殿までまつしづかに飛んでゆきました。ビルマの王様と王妃は、そこで、何年振りで、なつかしい再會をして、再びビルマの國の象牙の宮殿へとお歸りになりました。達麻は、北京の宮殿に留まつて、幸福な月日を送りました。さうして眞珠の洞から、達麻が持つて來た深山の桃色眞珠と、そしてあの不思議な大鳥とは支那の國の寶として永く傳へられたのでした。(なはり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

しづかな夜(賞)

熊本

宮本のり美
(尊五)

半かけ

お月

青い月

ないてた

仔馬も

なきやんだ。

一つ星様(賞)

新潟

小林

秀雄
(高二)

一つ星様

小さいな

どつか

野郎が

ないてゐる

大風小風

千葉

大川

政雄
(尊六)

大風小風ふいてゐる

よその子さむさうに

通つてく

お父ちゃんは

うでぐみして

むぎふみだ

ねむり草

福岡

中川

弘
(尊五)

ねむり草

ねむり草

山の中

ちぎつて ふところに

入れました。

ねむり草

ふとこで

ねてました。

心配な日暮

千葉

大川

光春
(尊四)

病院のまどが

赤いので

家の事を

六八
思出した

小ねこ

東京

岩本セツ子
(尊三)

ほか／＼あた／＼かい

ゑんがはで

にはのひよこを見ながら

小ねこが一びき

ひるねしてゐる

静かな夜

青森

戸館
(尊五)

コンコンコンと

雪がふる

静かな／＼

ばんでした

どこからか犬の聲

静かな夜をやぶつてた

コンコンコンと

雪がふる

星

埼玉

齊藤

安雄
(尊三)

かあさんと

おゆからかへりみち

お星さまがたぐさん

そろつてます

みんな一しよに

私の顔を見てゐます

ヒンヒン小馬

奈良

中川スガ子

(尊五)

ヒンヒン小馬は

てんきがすきだ

畑の小道を
走つてゆくよ。

ヒンヒン小馬は

お日さますきだ

お日さまながめて

ヒンヒンないでゐる。

日ぐれ

愛知

竹内

健二
(十三才)

わたしの影が

すんぐり長い

ひよろ／＼のつば

お星様ちろり

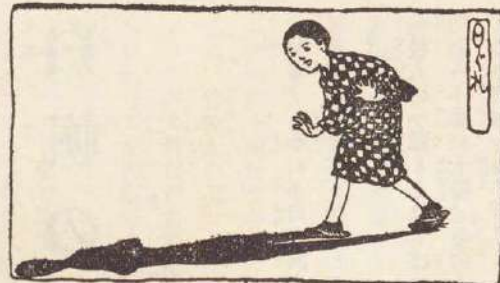
げた

東京

鈴木

美江
(尊三)

いいげたかつて来た



いいげたかつて来た
げた屋でいいげた

はいたらば

きつといい音

でるでせう

からつころんいい

音でるでせう

一番星

東京 横瀬いさ子
(十六才)

一番星見つけた

廣いお空にボツツと

お寺の屋根も

日が暮れた

夕やけ小やけの

きえたあと

一番星が顔出せば

お寺のはとも

みんなねた



白帆の唄

小城庄一

寺内萬治郎畫

〔前號までの梗概〕
海賊を匿つた爲に國を逐はれた父を尋ねて、感傷を出てはるかな旅路に上つた春之介と峰枝と母の三人は、種々の苦しみをなめました。母は病で死に、峰枝は悪者に擧はれ、春之介は暴風に會つて海を漂ふ中、陀摩尼仙人に助けられて武藝を教はりました。そして再び仙人の許を辭して姉と父を探しに出かける途で、海賊がこらして役人を助け、役人の船に乗つた時、俄かに海賊が攻撃せて來ました。

見る／＼中に小舟を漕ぎつけて來た海賊の群は、手ん手に刃をふりかざして何かしきりにわめてゐます。
役人の一隊もそれとばかり戰の用意をしました。が何しろ小勢に大勢、その上海の上の戰にはなれきつてゐる海賊を相手ではこんな不意打をくつて勝て様筈がありません。
水澤文之丞はぎり／＼と齒を喰ひしばつて口惜し

がりましたが、やがて自分で刀を投げ捨てて、皆に向ひ、

『おい皆刀を捨てろ。無駄な戰をして大死しても仕方はないから、此處はまづ降参するより外に道はない。』

と、叫びました。

皆も覺悟はしてゐるものの流石に恐ろしい氣持はあるものですから、直ぐ言はれる儘に刀を置いて坐つて了ひます。文之丞は舟の舳に立上つて海賊共に向ひ、

『俺達は決して手向ひしないから、持つてゆきたいものがあれば持つてゆけ。又若しどうでも俺達に怨みがあるなら、俺だけ捕へるなり殺すなりして、外の者は助けしてくれないか。』

と言ひますと、

『愚圖／＼言ふな。片端から斬殺してしまへ。』
ととなつて、大勢の男が小舟をいよ／＼進ませて

來るので、今はこれまでと舟の中の一同も再び刀を握りしめ、敵はぬまでも戰はうと用意しました。すると後ろの方から、
『待て／＼』といふ聲がして、一艘の舟が矢の様に漕ぎぬけて來ました。中には大將らしい丈の高い眼の鋭い、立派な着物を着た男が乗つてゐます。まさに今戰が始まらうとする所に其舟は漕寄せられました。

『向ふが手向ひせぬといふのに亂暴な事をしてはならぬ。皆控えろ。』

さすが大將だけあつて、あはてすせかすさう言ひつけ乾分共を押鎮めると、さて役人の舟に向ひ、かけ合ひを始めました。

『今言つた言葉は本當か。本當ならば男の情けで言ふ通りしてやつてもいい。』

『武士に二言はない。』
文之丞はきつぱり答へます。

「よし。それではお前一人を捕へて、他の者は助け
てやる。それ！」

と言へば十数人の乾分は役人の舟に飛上つて、文
之丞を捕へ、縄をかけました。海賊を退治に來た役
人達が、海賊の爲に襲はれて、あべこべに縄をかけ
られるといふのは何たるおかしい事です。

今しも文之丞に縄をかけた乾分が、勝誇つて引立
て様とした時、下の小舟の中から叫びをあげた一人
の男がありました。

「あッ親分。熊野神社でさんざん邪魔をした生意氣
な小僧があすこに坐つてゐますよ。」

その聲を聞いた時、春之介はぎよつとして隠れ様
となりましたが、もう遅かつたのです。

「うむ、あの小僧か。憎い奴ぢや。あ奴も一緒に捕
へて来い。」

親分の命令に、三人の荒くれ男が走り寄つて來て
むづと春之介の両手をとりました。

「なめに關ひません。私にも考がありますから。」

春之介は落着いて文之丞をなだめ、

「さあ連れてゆけ。何處まででも行つてやる。」

と海賊より先に立つて舟に乗り移りました。

「引上ろ！」

頭目の男はさつと手に持った刀を上げて命令しま
す。

「應！」手下の者共は一齊に聲を合はせ、二人の虜
を乗せた小舟を中に、本船に漕ぎ戻るのでした。

二

本船に連れこまれた文之丞と春之介は、別々に暗
い舟底の部屋に投げこまれました。

春之介の打ちこまれた部屋は物置室と見えて、色
色な武器や、普通の舟から奪取つて來た品物などが
置いてあります。高い所に小さな窓があつて其處か
らはかな光りがさして來るだけ、陰氣でじめ／＼

「さあ手前も来い。」

春之介は余程手向ひしてやらうかと思ひましたが
自分一人で斯様に多くの敵を相手した所仕方はなし
まうよとばかり言はれる儘に従つてゆきます。文之
丞は驚いて、

「それは約束が違ふ。自分は此船の頭だ。だから自
分一人を殺して他の者を助けてくれと願つたのでは
ないか。殊にこんないじらしい子供を捕へるとは餘
り酷たらしい。」

と責めましたが、海賊の頭目は冷笑つて、

「如何に子供とて差出た眞似をした報ひはまぬかれ
ぬ。その小僧を渡したくなければ戦をやらうか。」

文之丞はぐつと詰りました。

春之介一人の生命を助ける爲に、大勢の手下の者
を殺さねばならなくなれば、折角の苦心も水の泡で
す。かと言つて恩人を見す見す見殺しにする事も武
士として心苦しい次第です。

とした床板からは何だか得體の知れない臭氣がぶん
と鼻をついて來ました。

春之介は暫く凝と眼をもちて坐つてゐましたが、
段々に闇に慣れて來て四邊を見廻し、珍らしい品物
などを眺めてゐると、ふと妙な呻き聲が耳について
來ました。はつと思つて聲のする方に眼を注ぐと、
大きな机の蔭に一人の人間が倒れてゐるのです。

「誰方です。」

春之介は呼びかけました。併し相手は答へません
何うやら頻りに嘔り泣いてゐる様子です。

春之介はそろ／＼と近づいてゆきました。すると

相手はおびえた様に、

「助けて下さい。お願いですから。」

と手を合はせて泣伏します。

「私は海賊ではないから安心して下さい。海賊の爲
に捕まつた者です。」

春之介は相手が少女で、どうやら自分を海賊と聞

違へ恐れてゐるらしいのに氣がついて、優しく言ひました。その言葉を聞くと、

「あッ、若しやお前は？」

と、少女はびつくりした様な聲をあげました。春之介にも何だか聞覚えのある聲です。

「お、その聲は、若しや姉さんでは？」

「矢張り春之介だったのか。」



女は飛びついて来ました。

あッそれは長い間つひぞ忘れた暇もない懐しい姉の峯枝だったのです。二人は暗い闇の中に抱き合つて暫らくは言葉もなく泣き續けました。やがて春之介は姉の手を取つて、

「何うしてこんな所に來たのです。」

と尋ねると、峯枝はかいつまんで話を聞かせました。

大阪の湊で悪者に攫はれた峯枝は、間もなく此海賊船に連れられて來て、炊事や裁縫などに追使はれなければなりません。他にも峯枝と同じ様に攫はれて來た可哀さうな女達が澤山ゐましたが、何れも恐ろしい荒くれ男に睨みつけられ乍ら、小さくなつて働いてゐました。

併し、海賊の大將で、赤格子九郎衛門といふ男は非常に情深く、まじめな男で決して女をいじめたりなどはせず、又固く乾分達にもいましてあります

てゐました。

併しそれは却つて恐ろしい結果を生んで了ひました。何故なれば、丁度陸へ上らうとしてゐる所を海賊の見張りの男に見つかつたからです。直ぐに三人は捕まりました。そして此船底にぶち込まれたのですが、他の二人の女は餘りの恐ろしさにすきを見て刀で咽喉をついて死んでしまひました。

「もうそれは一月程前の事だけれど、今でもこの床板に血の匂ひがするでせう。これは其時の血です。妾も一緒に死なうとしてゐたのですが、運悪く番人が這入つて來て、刀を抜き取られてしまつたので、死に損ひ、それから何うしても死ぬ氣にはなれず、かと言つて海賊の女中で働いてゐるのはいやだし、毎日泣いてばかり居たのです。それにしても又お前まで何うして此船へ捕つて來たのですか。」

峯枝は自分の事よりも、弟の身上が心配になる様顔で問ひました。

ので、滅多に酷い目に會はされる事はありませんでした。それでも、明けても暮れても海の上で、親兄弟にはなれた身上は、陸地が戀しく故郷が慕はしく泣きの涙で暮らしてゐましたが、到々二人の女と語らつて船を逃出す決心をし、船が陸につくの待つ



「いや私はとんだ事で海賊の怨みを受けたのです。」
と、あの時以来の事を具さに話して聞かせて、
「併し決して御心配は要りません。陀羅尼仙人様か
ら、習ひ覺えた術がありますから、其中どうにかし
て逃げ出させよう。」

春之介は自信ありげに言ひましたが、
「駄目です。第一この船底から上に出る事が難
しいのだから。」

と峯枝は力無く頭を振りました。

「なあに、そんなに、らくたんしたものでありま
せんよ。」

大人びた口調で姉を勵ました春之介は、ニコ／＼
してゐました。

三

海賊船が阿波の國の淋しい海岸近く走つてゐたの
は、それから間もなくでした。

その時は、何を思つたか峯枝は海賊に詫びて船底
の部屋から出してもらひ、まめ／＼しく立働いてゐ
ました。

「どうした風の吹き廻しかな。この間まで我儘ばか
り言つて泣いてゐたあの娘つ子が、近頃はまるで生
れ代つた様にいそ／＼と働いて居ますぜ。」

橋の下で峯枝の働くさまを眺めてゐた一人の男が
親分の九郎衛門に向つて、さう言ひながら笑ひまし
た。

九郎衛門はむつくりした顔に一寸微笑を浮べ乍ら
「さうだな。可哀さうにもう故郷へ歸るのをあきら
めたのだらう。歸してやりたいのは山々だが、こん
な稼業をしてゐれば、さう／＼情けをかけてばかり
は居られぬし……」

と言つて、ふと淋しげな調子で、
「俺の故郷に残した子供も、達者で育つてゐれば、
丁度あの娘の年頃だな。」

と呟きました。

「えッ、親分には故郷に妻
子があるんですかい。」

乾分は眼を見張りました。

「うん。併しもう長く歸ら
ぬ。わしの胸に泛んで来る

のは十四年前の、幼い子供
の愛くるしい顔だけだ。道
で會つても、今はもう判ら
ないだらう。」

と眼をとちて凝と腕をく
みました。

「いや／＼、こんな事を
へ出してはどうもいかん。
さあ船を岸へつけろ。今日
はあの役人と子僧を磔にし
てやらねばならぬのだ。」



と強く頭をふつて、命令を下します。

「合點だ。」

乾分は起上つて、側らの鐘を叩きました。

「デヤン~~~~」。晴れた海面を渡つてゆつ

り鐘が響きます。船をつけるといふ合圖です。その

音と共に、船は向きを變へて陸地へ〜と急ぎまし

た。そして一町程手前で大きな錨が下ろされます。

「先づ二人を此處へ引出して來い。そして小舟の用

意をしる。向ふに見える森の中で處刑をするから。」

九郎衛門の言葉によつて、文之丞と春之介は其處

に引出されて來ました。二人共顔色が蒼ざめ眼が窪

み、大變やつれて見えます。

「繩をかける。死物狂ひでじたばたすると面倒だ。」

九郎衛門にはちつともぬかりがありません。直ぐ

二人は繩で縛られました。

「今日はお前達二人を約束通り磔にして殺してやる

が、その前に一言いつて聞かせるから聞いて居れ。」

九郎衛門の靜かな音聲に烈しい氣がまじつて來ま

した。

「俺はそも〜の海賊ではない。だからお前達をこ

んな目に會はせる事が、少し慘過ぎる位の事は俺も

知つてゐるのだ。併し俺が此の事をするのは、お前

達だけに對する怨みからではない。世の中の皆の人

間、わけて役人共に對する呪ひからだ。

俺は昔は立派な人間だった。何一つ悪い事はせぬ

ばかりか、随分人に情けをかけたものだ。それ

だのに世の中の奴は俺を酷い目に會はせたのだ。家

があり乍ら家に戻れず、故郷があり乍ら故郷にゆけ

ず、妻や子の事を考へて夜も寝られぬ苦しい淋しい

旅を続けねばならぬ。生き乍らの地獄へ俺を追ひ落

したのは、役人共を始め世の中の奴等だ。

俺は一生世の中の奴を苦しめ、役人共と戦つてや

る。お前達の生命を取るのもその爲だ。俺の呪を受

けて死ぬのが口惜しければあの世で仇を取る工夫を

するがよい。アハハハ。」

冷たく笑つて二人の顔を睨んだ九郎衛門の様子を

春之介はじつと見つめてゐました。何故か少年には

九郎衛門を憎む心が湧いて來ないばかりか、今の話

でこの惡魔の様な海賊の親分が、不幸な淋しい人の

様にすら思へるのです。

文之丞は諦めて黙つてゐました。

「さあ、愚圖〜すると日が暮れる。早く連れてゆ

け。」

九郎衛門の嚴やかな聲。

向ふで見てゐた峯枝はハツと顔色變へて危く打倒

れ様とするのを、やつと柱につかまつて支へ乍ら、

どうなる事かと氣も狂ひ出さんばかりの心配です。

「又キルシタンが二人出來るぞ、面白い、面白い。」

乾分共は陽氣に囃立て乍ら、十文字に組合せた大

きな木を二本擔いで小舟に移りました。二人も引立

てられました。

向ふの陸地につけば、もう二人の生命はないので

す。せめて一目姉の顔を見様と春之介が振返つて佇

んだ時、橋の頂天に上つてゐる物見役の男が大きな

聲で叫ぶのが聞えました。

「親分、大變だ。臈ろの舟が向ふの島影から走つて

來ますぜ。」

「何ッ、臈ろの舟が!」

九郎衛門始め一同はその言葉に何故か眞蒼になつ

て了ひました。

春之介と文之丞は何の事か判らず、のび上つて海

を見ると、之は又何といふ不思議な光景でせう。三

角形の帆を張つた小さな舟が五隻續いて矢の様に早

く走つて來るではありませんか。舟の色も帆の色も

青く塗られて、波間に浮沈するさま、丁度話にきく

幽靈舟の様です。

赤屋根と林檎

(推薦)

戸木三千尾

岩岡とも枝畫



八〇

「赤屋根の家」——村の人達は、ニールさんの家をさう呼んで居ました。ニールさんは其の赤屋根の家から、毎日汽車で或る學校へ英語を教へに通つて居るのです。もと／＼ニールさんは英國の人ですから英語の巧いのは分り切つて居ます。併し其の代りに今自分の住まつてゐる日本の國の言葉は、まるきり駄目でした。

或る日ニールさんは、學校もひけたので、ふらふら汽車の停車場の方へ歸つて参りました。すると、道傍の果物屋の店頭に、眞赤な林檎が並んで居るのに目が止りました。ニールさんは暫く林檎を見つめたまゝためらつて居ましたが、やがてつか／＼と店頭へやつて來たかと思ふと、いきなり林檎を取り上げて、

「幾何、幾何」と赤坊の様に覺つかない日本語で尋ねました。

「へえ／＼それですか。へえ、えーとそれは、一つ十五錢で、へえ。」かう言ひ乍ら薄暗い奥の間から出て來たのは、眼のざろ／＼光る爺さんです。

「十五錢！ 高い／＼、負け／＼」ニールさんは餘り高いので、びつくりして申しました。

「へえ、之はもう極上等のやつで、ええ、ちつとも高いことはごはへん。餘程お安く願ひしてるんで、へえ」爺さんはべら／＼喋つて了ふと、ニールさんの顔をざろりと睨み付けました。

（爺さん、何を云つてるのかちつとも分らないが、こんな貧弱な店に置いてある林檎だもの、高が知れて居る。それに、一つが十五錢だつて、こりや俺が何も分らない外國人だと見て、こんな無茶苦茶な値をつけるんだなあ）

かう考へてみると、ニールさんは買ふのが馬鹿ら

しく成つて來ました。

（こりやもう買ふのを止さう）一度はニールさんも思つたのですが、

（待て／＼、可愛い、息子（こゝろ）のトーマスは、俺の歸りを知つてわざ／＼停車場まで迎へに來て居るからなあ）と思ひ返して、

「負け／＼、五錢負け」と、もう一度値切つてみました。

「五錢！ なか／＼十五錢からびた一文も負かりません」爺さんは意地悪く言ひ張ります。ニールさんは先に言つた様に日本語が出來ないので、爺さんの云つてる事はよく分りませんでした。しかしどうやら爺さんの口振りでは「負けよう」と云つてゐるらしくありません。ニールさんも爺さんの憎らしい態度に、少々腹が立つたので、其の儘黙つて店を出て、づん／＼停車場の方へ行つてしまひました。

さあ怒つたのは爺さんです。

「オイ、異人さん、異人さん」と大きな聲で喚きながら、慌て、ニールさんの後を追ひ掛けました。「あんた、人の店を冷やかashiといて、何も買はんと去ぬ方がおまつか。買ひなはれ、買ひなはれ、何でもえいさかい買ひなはれ！」やつとの事で、ニールさんに追ひ付くと、えらいけん幕で怒鳴りました。ニールさんも之には、すつかり面喰つて了ひました。さうして（何うした事か）と許りに、茹蛸の様に真赤になつて怒つて居る爺さんの顔を、ぼかんと見て居ました。

丁度そこへ、ニールさんの教へて居る學校の生徒が通り掛かつて、此の不思議な光景を見たもんですから、變な顔をして走つて來ました。

「先生先生、一體これはどうしたんです？」

「いや、なに、かう云ふ譯なんだよ」とニールさんは自分の知合の生徒が來てくれたので、一寸安心し



て今迄の事を悉く話して聞かせました。其のなかで、爺さんは「なに、毛唐奴が、厚かましい、人の店を冷やかashiときやがつて……」と獨り口汚く喚いて居ます。

やがて其の生徒は（いかにもよく分つた）と、云ふかの様に、合點合點とうなづくと、ニールさんに申しました。

「此の爺は評判の意地悪なんですよ。だから損をしたと思つて、一つだけ買つてやりなさい」

勿論ニールさんと生徒との話は、みな英語です。勿論ニールさんは、とうとう素敵に高い林檎を買はされました。

「こんな物を十五錢だなんて、ひどいなあ」ニールさんは今更の様に口惜しがりました。それにしてもなんだつて日本にはたくさん悪い人間が居るんだらう。ニールさんは、修繕にやつた靴を其の儘盗つて

了つた靴屋のこと、效きもしない薬や、直ぐ折れて了ふ鉛筆を賣り付けた行商人のこと、一時間とたぬ中に毀れて了ふ玩具や、直ぐに色のあせたり、綻びたりするシャツや猿又を賣る店のことを思ひ出しました。

（やつぱり親切なのは學校の生徒位かな。いや、學校の生徒だつて、中には授業中居眠りしたり、勝手に喋つたり、側見をしたり惡戯ばかりしてゐる者も有るし……）

かう考へて來ると、自分の周圍の人が皆不親切な人の様に思はれて、ニールさんは何だか情なくなつて來ました。それ許りでなく、ニールさんが外國人だと云ふので、朝出合つても『お早よう』とも云はない不親切な——自分だけを仲間外れにする——村の人達の仕方を思ふと、つくづく獨りぼちの淋しさや身にしむ様に思はれました。考へて見ればみる程、日本は不快な國でした。

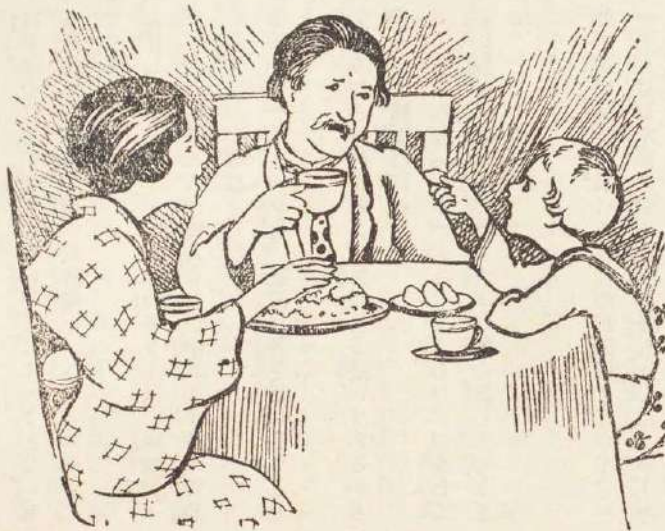
(ならうことなら、生れ故郷の英國へ歸りたい)と何度思つたか知れませんが、併しそんな事は仲々急に出来さうにもない話でした。

ガタン／＼と氣味の悪い音を立てたかと思ふと、汽車は停車場に着きました。

(トーマスが迎へに来て居るぞ)ニールさんは、かう思ふと流石に嬉しくて、いそ／＼改札口を出ました。息子のトーマスは、毎日お父さんを停車場へ迎へに行くのが日課の一つでした。

處がどうした事か、其の日に限つてトーマスの顔が見えませんが、ニールさんは何だか氣に掛かりました。「何か不意に用事でも出来たんだらう」と思ひ直して、そのまゝ足を早めて停車場を出て行きました。

ところがどうでせう。ニールさんが停車場を出て一二丁も行くと、突然、ワツと大きな叫び聲をあげ



八四
て、多勢の村の惡たれ坊主が、傍の樹の影から蜘蛛の子の様に逃げて行きます。さうして半町許りも逃げ延びると、聲を揃えて「混血兒の親爺が歸つて来よつた。混血兒の親爺が歸つて来よつた」と喧しく囃したてます。

(さてはトーマスが又いちめられたのか)とニールさんが思ふ間もなく、甚の様な勢で走つて来たトーマスが、いきなりニールさんにしがみ付きました。それを見た惡たれ坊主は「甘えたの生薑板」と又もや騒ぎたてます。

トーマスの眼には、今迄こらえて居た涙が、はたと頬を傳ひました。實際トーマスは之迄何度村の子供等にいちめられたか知れませんが、混血兒混血兒と温なしいトーマスを仲間外れにしていちめるのです。そして之が又ニールさんの苦の種でした。ニールさんは泣いて居るトーマスを抱き乍ら、前よりもつと不快な氣持で歸つて参りました。今更の様に

日本へ来たことを後悔しながら……。

親子三人の晩餐が済んだ時、ニールさんは不圖林檎のことを思ひ出しました。林檎はニールさんのポケットに入れた切りです。

「これ一つ十五銭なんだよ」ニールさんは林檎を取り出すと、態と妻の時子さんに「ニールさんのお嫁さんは日本人です——見せびらかす様にしました。」

「十五銭! へえ……」と餘りのことに時子さんは呆れて了ひました。ニールさんはそれから長々と晝間の出来事を話しました。其の間時子さんは、怒つたり、笑つたりして聞いて居ましたが、そんなに高いんだから若しや頬べたの落ちる程、お甘いのかも知れないと思つて、試しにくる／＼刺いてみました。併し之は又何としたことでせう。お甘い處か表面が少しする／＼して居る様です。多分賣れ残つ

て古くなつたんでせう。それでもニールさんは『食べて御覽』と小さく切つた林檎を、トーマスの手に持たせました。

『お甘い？』ニールさんと時子さんは、林檎がトーマスの口に這入るか這入らない中にトーマスの顔をのぞき込んで尋ねました。

『まずいよ』トーマスは、正直に首を横に振りました。

『矢張りだまされたのよ。外はよく磨いてあるからつや／＼と綺麗だけれど』

ニールさんは『ウー』とうなりました。さうして『悪い奴だ、悪い奴だ』と大きな聲を出して怒りました。

此の高い林檎を買はされたのが動機となつて、ニールさんは日本語を習ふ決心を致しました。ニールさんは考へたのです。『自分がこんな風に商人に馬鹿

にされて、高い物を買はされたり、日本人達と一緒に仲よく楽しく暮して行けないで、獨りぼつちにされるのは、自分が日本語を知らないからだ』

かう思つたニールさんは、その日から妻の時子さんを先生にして、熱心に日本語の勉強を致しました。ニールさんの上達はそれは素晴らしいものです。もと／＼ニールさんは語學の先生で、教はるニールさんも教へる時子さんも、それこそ一生懸命なんです。此の上達は當り前です。

一年と半分もたつた頃には、普通の會話には大した困難もなくなりました。

學校へ行つても、英語の授業の外は努めて日本語を使ふ様にしました。さうなると不思議なもので、外國人の先生と云へば、何だか悪い仁王様の様に考へて居た生徒でも、だんだんニールさんに親しんで參りました。もと／＼ニールさんの方から、生徒等と一緒に遠足をしたり、フットボールをしたりする

もんですから、生徒の方もニール先生が外國人だと云ふ考を失つて、一番深切な愉快な先生だと信じてしまつたのです。

之は學校計りでありません。村の人達とでも『お早よう』とか『今晚は』とか云ふ挨拶は勿論、一緒に世間話の仲間には入つたり、村の子供を集めて、鬼ごつこやかくれんぼうをしたりするので、村の人達も、もう以前の様にニールさんだけを仲間外れにしなくなりました。

トーマスも今では、いぢめられることもなく、毎日仲よく遊ぶことが出来ます。お彼岸だと云つては重箱に餅をつめて持つて来る人もあります。かう云ふ風にして、ニールさんは段々と幸福になつて來ました。

もう以前の様な獨りぼつちの淋しさは何處かへ行つて了つて、日本の國が段々好きになつて來るので、勿論、物を買ふ時言葉が分らないで困ることも、

又何時かの様に高い林檎を買はされることもなくなりました。

村の人は矢張りニールさんの家を「赤屋根の家」と言つて居ます。併し赤屋根は以前の赤屋根ではありません。

村の人達の黒い瓦の家と色を違へ、人間の間に、黒も赤も何の差別も有りません。丁度顔の色が白くても黄色くても、人間に變りが無い様に。

或る日ニールさんは、さも喜ばしうに、申しました。

『こんな皆が幸福になれたのは、あの腐つた高い林檎のお蔭だよ。あのすうい爺さんのお蔭なんだよ。さうしてあの林檎はちつとも高くなかつたんだよ。』

(をばり)

(作者住所 大阪府北河内郡守口町
字守口四七、山添市之助方)



童謡

野口雨情選

たんぼ

根岸 啓 (茨城)

あさね星

大塚 一仁 (大分)

初冬

原 まさる (長崎)

竹やぶ雀

石川 英一 (大分)

たんぼ

田の中

河原の竹藪

小竹藪

たんぼ

はたけに

菱踏むひとり

雀が飛んで

たんぼ

親なし雀も

細道

たがやが一人

たんぼ

一本松

もすが啼く。

大塚 一仁 (大分)

夜明にや

小鳥も

チロと啼く

七兵衛山の

あさね星

さめて

またつきや

お日さまが

赤い顔して

もう出るぞ

初冬

原 まさる (長崎)

仔猫は

日向

おえんがは

けいとう

あかく

咲きました

カラ／＼

落葉

桐の葉に

さみしい

冬と

なりました

雀と桐の花

伊藤 益平 (岐阜)

ボロリコ

日ぐれ

茶木 七郎 (横須賀)

柳がゆれます

ゆれてます

ちよつびり／＼

藻のかげで

目高が見えます

見て居ます

兄さんもうちき

日がくれる

お堀の柳が

ゆれてます。

ボロリコ

雀が

遊んでた

夜更け

やなぎひさ (岩手)



静かな晩です

夜更けです

炬燵で御本を

見てゐます

時計がカチカチ

ねむそうに

寒い晩です

夜更けです

遠くで小犬は

啼いてます

おんもは雪でしよ

しとしと

春

菱田 稔 (紀伊)

ちよんぼり草家は

簾のかげ

ほろりと椿が

散りました

春の日永を
糸車
廻はして居るのは
お婆さん

土とすれすれ
飛んでゐる
燕よ つばめ
赤い唇
見せよ

夢から さめない
うつとりこ
もう日が暮れた
森 はたる (愛知)

ふきのとう
お日さん 日車で
お通りだ

目白の聲が
した時に
も一つ椿が
散りました

ぼんやり
お月さん

もう日が暮れた
だまつて暮れた
おもての路で

小雪にお窓を
ちよつと あけて

つばめ

松本 秀穂 (東京)

風吹く路で

林 潮花 (山形)

ぼんやり お月さん
おねばさん おねばさん

子供が二人
唄つたばかり

つんつん 芽を出せ
ふきのとう

朝

千葉 仔朗 (東京)

土とすれすれ
飛んでゐる
燕よ つばめ
白い腹
見せよ

お眼々 さめない
うつとりこ

ぼんやり お月さん
晝の月 晝の月

ふきのとう
山岡 静子 (岡山)
つんつん 芽を出せ

チエンチエン
雀の
なく朝は

ぼかばか

あつたかい

いい天気

いい天気

こんこん様

お祭り

雀の

なく朝

いい天気

いい天気

銀鈴金鈴

藤山於菟路 (京都)

此の村通つて

彼の街へ
お客を乗せた
銀鈴金鈴



あの馬車の
鈴がなります

銀の鈴

ふれてゆられて

しやんくと

車をひいてく

あの馬の

お鈴は金鈴

しやんくと

春

西浦 孝一 (京都)

ギイツコ

ギットン

水車は廻る

畑のかげらふ

ユラユラ

もえる。

サラリ

サラサラ

小川は流る

岸のたんぼ

うつつて

ゆれる。

もづの使

河野 牧草 (朝鮮)

もづのお使

山からやつてきた

山には雪が

ふつたとさ

一軒屋の軒まで

つもつたとさ

もづのお使

なき／＼やつて來た



《少年少女自作童話》
狐と狸（入選）

秋田縣雄勝郡湯澤
小學校 第六
高橋 正藏

ある山の中に、一匹の狐と狸が住んでゐました。二匹は犬の仲よしで、いつでも香気に朝から晩まで、青いもうせんを敷きつめたやうな若草の上を飛びまわつて遊び、夕方になると、自分達の寢床である穴に入つて休みました。或日の事、二匹は遊びつかれてごろりと横になり、色々な話を始めました。その時、狸は狐に云ひました。

『あれ狐君、僕の先祖で有名な文ぶく茶釜を知つてゐるだらう。あの男はうまい事をやつたものだ。一つ僕等にだつて出来ない事はあるまい。僕が茶釜に化けるから、君は茶釜賣になつて、僕をどこかへ賣りつけ、其のお金で何かおいしい物でも買つて食べやうぢかないか』と話しかけました。すると狐は

『それともやうが、賣られた君はどうするんだい』と尋ねました。『君が僕を賣つてお金を受け取つたのを見たら、よい折を見て、僕が逃げ出すのさ。君はおいしいお菓子でも買つて、早く此所へ来て待つてゐてくれ給へ。そして僕が来た時、二匹で食べるのさ。れ、よいだらう』と、云ひました。

二匹は相談がまとまつたので、早速狸が茶釜に化け、狐はそれを賣つて歩く人に化けました。さて狐の茶釜賣は『茶釜あり、茶釜あり、茶釜はいりませんか』と町中を呼んで歩きまわりました。所が中々賣れませんでした。狐とも話して来たので、山へ歸らうかと思ひましたが、せつかく来たのだから、もう少し歩いて見やうと、一層聲を高くして、『茶釜あり、茶釜あり、茶釜はいりませんか』と云つて歩いてゐますと、或店の主人が、

『茶釜屋さん、ちよつとお待ち。一體いくらなの』と尋ねました。狐の茶釜賣りは、

『あ、狐君はさぞ待つてゐるだらう、早く山へ歸りたいなあ』と思ひながら、逃げ出すすきを見てゐました。

所が、お釜になつたものですから、番頭さん達も御飯を食べる爲に釜所の方へ行きました。そして店には、一人のお小僧さんだけになりました。此の時と云ふので狸はいきなり正體をあらはして逃げ出しました。所が、例のお小僧さん、きまつたものでんぐり返る程驚き、奥へかけこんで行つて、此の事を話しました。

さあ大變です。番頭さん達が血まなになつて追つかけて來ました。狸は一しやうけんめいになつて逃げます。往來の人々は恐しい勢で何かこころがつて行つたかと思へば、其のあとを大勢の番頭さんが一しやうけんめいに走つて行

くので、不思議に思ひながら、ゾロ／＼あとをういて行きました。

狸はもう一しやうけんめいです。つかまつたら命がない。何所かよい隠場所がないかと、逃げながら考へて行きますと『此の所無用の者入るべからず』と立派なした農園があり、百姓らしい人が畑を掘つて居るのが目に付きました。此れ幸ひと云ふので飛びこみ畑をたがやしてゐる百姓さんの目の先をぶつ／＼かゝるやうにして遁つて行きました。



『うわつ、助けて呉れッ！』お百姓さんは、何か何やら、ち

驚いたのはお百姓さん。何やら圓い物が飛んで來て通つて行くひやうしに、どしんと大きな尻餅をつきました。

はわけ、草履は緒が切れて、遠くの方へ飛んで行つてしまひました。

『もうあんなことは二度とはしない』と狸は菓子を食べながらも、恐ろしそに、つぶやいてゐました。

二匹の坐つてゐる所からは、陽炎が／＼と立ち上つてゐました。（なはり）

漂流二百三十日

久米 舩 一

岩 岡 と も 枝 畫



(前號までの梗概)

カザロンと云ふ人が帆船に乗つて、大西洋の真中へ出ました。すると突然、船底から火事起つて、危く沈没しそうになりました。併し、幸ひと船長カーチスの奮付した働きによつて、火事は消しとめられ、あいて、そこが今度は、船底に大きな穴があつたのです。カーチスは多勢の水夫達を雇はして、ポンプで水を抜いだせました。が、その内五人の悪い水夫は「俺達にもう餓ゑのは御免だ」と云つて、サッサと甲板へ引上げてしまひました。カーチスは五人の水夫に向つて、或ひは脅し、或は宥め

て、なんとかしてポンプへ就かせやうとしましたが、五人はどうしても聴き入れませんでした。

一、殺すなら殺せ

「ちやア君達はポンプを止めて、どうしようと思ふのだ。」

カーチスは穏やかな聲で、かう訊ねました。

「きまつてるぢやないか。あすこのボートが見えないのか。」

水夫頭のジंकストロップはかう云つて、顎でいや／＼つて見せま

した。そこにはたつた一つ残つた捕鯨用の小さいボートが吊り下げられてありました。

「なに、あのボートだつて？ お前、よく考へて言を云ふがよい。あれでは、五人も乗れないぢやないか。」

「五人乗れりやア澤山だよ。なアおい……」

と、ジंकストロップは仲間の方を振りかへつて、ニヤリと笑つて見せました。

みました。

「さうだ。五人乗れりやア澤山だよ。水夫長。もうこんなくだらない談判は止さうぢやないか。この船に残つてゐたい者は勝手に残つてゐるが、いゝさ。俺達はそろ／＼出かけようぜ。」

と、仲間の一人が云ひました。此奴等は多勢の船客達を見棄てて、自分達だけこの船を立去らうと云ふのです。併し、私は淺ましい事に、この時少しも水夫達を責めると云ふ氣にはなりませんでした。出来る事なら私も一緒に、そのボートへ乗せて行つて貰ひたいと思ひました。ジंकストロップは普段私と仲がよかつたのだから頼んだらきつと私一人ぐらゐは乗せて行つてくれるだらうと考へて

この時、カーチスはつか／＼とボートの傍へ進んで行きました。そして、ボートを後ろにして、仁王立ちにつつ立つて、

「さア貴様だち、指一本でもこのボートに觸れてみる。その儘には置かないぞ！」

と、叫びました。カーチスの廣い額には、黄褐色の髪の毛が垂れかゝり、その下には鷹のやうに鋭い眼が、強い決心を示して光つてゐました。

ジंकストロップは、カーチスの手前五六歩の所へ立止つて、これも負けぬ氣になつて、カーチスの顔を睨みかへしました。ジंकストロップの右の手は、ズボンの

隠しに突つ込まれた儘です。私はこのズボンの隠しに、何が這入つてゐるか、よく知つてゐました。そこにはジंकストロップが何時も肌身離さず持つてゐる拳銃が這入つてゐたのです。

「よう、ジंकストロップ。いゝ物を持つてるな。さア、撃ちたけりや撃てッ！ さア撃てッ！」

カーチスは腕を組んだまゝ、詰めて來ました。

「何をッ。」

ジंकストロップの右の手に、キラリと光る物が握られました。その途端、カーチスは猛然と相手に飛びかゝつて行きました。その動作の素速さ！ ジंकストロップの帽子は忽ちクシ飛んで、二



人は重なりあつて甲板の上へ倒れました。カーチスは、左の手で確かかと相手の喉を握つて、右手で何んとかして拳銃を抜き取らうとしました。シンクストロップは抜き取られまいと争ひ、二人は次第に傾いて来る甲板の上で、上になり下になり、死物狂ひの格闘を始めました。他の四人の水夫は手を出す事も出来ず、ボカンとしてこの有様を見詰めてゐました。シンクストロップはカーチスよりも背が高く、力も優れてゐたのですが、たゞカーチスのやうに機敏に動く事が出来ませんでした。その爲に、自分の力で却つて自分を疲らすやうな結果になつて、到ち甲板の上へ組み伏せられて、拳銃を抜きとられてしまひました。

カーチスは拳銃を手にして立上りました。その眼は血走つて、顔色は眞青に變つてゐました。シンクストロップは、甲板の上に大の字なりに寝ころがつて、『さア、殺すなら殺せ！ カーチス、射つなり、斬るなり勝手にしろ！』と、嗷鳴つてゐます。私はその甲板の上に寝ころがつてゐるシンクストロップの身體を見て、『何んと云ふ大きな身體だらう！』と思ひました。筋肉のハチ切れるやうになつた腕、高く盛りあがつた厚い胸！ その胸は今の闘ひに荒い息を吐いて、高くなつたり低くなつたりしてゐます。

てゐます。

私は、カーチスが此の男をどう處分するだらうと思つて、ちいッとし見守つてゐました。併しカーチスは、もうシンクストロップなどには一言も物を云はず、手にした拳銃を遙か彼方の海中へ抛り投げて、そのまゝサツサと船底の方へ降りて行つてしまひました。不思議な事に、後に残つた四人の水夫は、もう二度とボートに手を觸れようとはしませんでした。四人は、啞のように黙りこんで、甲板の上に倒れたシンクストロップの身體を昇きあげて、水夫部屋の方へ運んで行きました。

二、月夜の海

私は、カーチスの後を追つて、船底へ降りて行つて見ました。今の騒ぎで、ボンブの方は見棄てられてしまつたので、船底の水量は増す一方です。もう足を踏み入れる事も出来ません。カーチスは、階段の中途に立つて、何かにちいッとし耳を澄ませてゐました。私は何故かそのカーチスの後姿を、何かしらかう非常に慕はしいやうな、甘えて見たいやうな、頼りすがつて見たいやうな氣持ちで眺めました。これは今の闘ひで、カーチスが示した男らしさと、勇ましさを慕ふ心持ちでありましたらう。

かう訊ねた私の聲は、キツと女みたいに嬌々としてゐたに違ひありません。カーチスは返事もしませんでした。尙も何かちいッとし考へ込んでゐるやうすでしたが、やがて私の方を振り向いて、『カザロンさん。貴方濟みませんが、上へ行つて、船客の中の男連中と、水夫達を呼んで来て下さいませんか。大急ぎで相談したい事がありますから……』と、云ひました。私は云はれる通り、直ぐに船中を駆け廻つて、皆んなを呼んで來ました。カーチスはその處で一同に向つてもうチャンセラー號は到底沈没を

免れ得ない事、この上は最後の手段として、筏を作つてそれに乗り移るより他に途は無いと語りました。

そして、カーチスは、一同を二手に分けて、一方をポンプが、り一方を筏製造掛りとしました。ポンプ掛りは、筏の出来る間、船の沈没を少しでも遅らす爲めに、這入つて来る水を掻き出す役目でありました。

忽ち船中は、目まぐるしい活動が始まりました。私は、船大工のドーラスに指圖されて、筏の製造を手傳ふ事になりました。船大工のドーラスは、優れた腕を持つてゐました。ドーラスは先づ、一番小さい橋を切り倒して、

それに太い丸太を結びつけ、筏の骨子を作りしました。私達は船の中を駆け廻つて、色んな木片を集めて來ました。大きな卓もあれば、食堂に備へつけてあつた長い椅子もありました。ドーラスは其等の木片を手際よく丸太へ打ち附けて暫くの間、一つの立派な筏を拵へあげました。それは、長さ十間、幅三間もある大きなもので、これなら全員二十九人の者が乗つても決して沈むやうな事はあるまいと思はれました。

九八
ない物を選んで筏へ積み込ませました。又、カーチスは、帆布綿だとか、大工道具だとか、釣針だとか云ふ物をも、忘れずに積み込ませました。

すつかりの用意の出來たのは、丁度夜中頃でありました。

幸せと夜になつてからすつかり風が強いので、雲間から明るい月が顔を出して來ました。

波は細かく月の光りに碎け、遠い水平線の彼方は、ぼーつと霞んだやうになつてゐました。

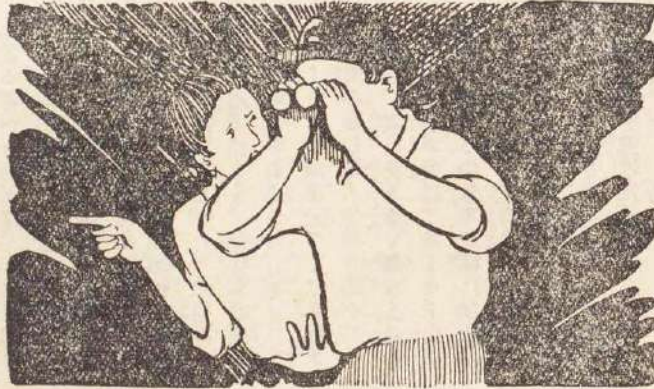
痛手を受けたチャンセラー號はこの月夜の海を恰も幽霊船のやうに、南へ南へと流されて行きました。

三、黒いものが浮いてゐる

この間、船底では、二臺のポンプが火事場のやうに働いてゐました。併し、汲み出しても、船底の水は増す一方でありました。カーチスは、筏に乗り移る時機は朝が一番いゝと考へましたので、それまではどうにかしてチャンセラー號を保たせたいと思ひましたそれで我々筏が、りの者も、皆んな船底へ降りて、ポンプを手傳ふ事になりました。

ところが、このやうにして一同が船底へ降りてゐる間に、甲板の上では容易ならぬ出來事が起つてゐたのです。

それは、丁度夜中の二時頃であ



九九
りました。

私がフト甲板へ上つて、四方の海を見渡してゐますと、突然このチャンセラー號から南の方二哩ほどの海上に、何かしら黒いものがボツチリと浮んでゐるのを見出しました。

月の光りに透してみると、その黒いものは波にゆられて、上つたり下つたりしてゐます。

『はてな、なんだらう？』

かう思つた私は、大急ぎでカーチスを呼んで來ました。

カーチスは雙眼鏡を手にとつて暫くの間、ちいッとその黒い物を見てゐましたが、やがて、

『カザロンさん。あれはボートです。よ。チャンセラー號のボートで

す。……人が六人乗つてゐます。」と、云ひました。

「えッ、ボート？」

私は驚いて叫ぶと同時に、思はず例の捕鯨用のボートの吊つてある所へ眼をやりました。併し、其處にはボートの影もありませんでした。

「ジंकストロップですよ。彼奴が仲間と一緒に逃げたんです。なアに、逃げたい者は逃がして置くさ……」

と、カーチスは事もなげに云ひました。

「だが船長。六人あるッてぢやありませんか。五人は仕方がないとしても、あとの一人は誰です？」私は息込んで訊ねました。

その怒り方と云ふものは大へんなものでした。あの温順しいドーラスさへも大きな聲を振り廻して、「畜生！ 今度彼奴等が歸つて来たら、一人残らず突き殺してやるから——」と、唸鳴つたほどでありました。

さうかうしてゐる間に、次第に夜が明け放れて來ました。

四、筏に乗り移る

この時に、チャンセラ一號はもう全く水浸りになつて、筏の置いてある甲板のあたりまで、波が押しよせて來るやうになりました。カーチスは、愈々最後の時が來たと思ひました。そこで乗組員一同は残らず甲板へ集まるやうにと

「私の考へとしては、それはあのキーヤ一氏でせう。私は昨晚、キーヤ一氏が澤山な紙幣をジंकストロップに手渡してゐるのを見ました。キーヤ一氏はお金を出してボートに乗せて貰つたのに違ひありません。はゝゝ、金持ちのやりさうな事です。」

カーチスはかう云つて、面白さうに笑ひました。併し、私は笑ふ事が出来ませんでした。心の中は、キーヤ一氏に對する憎しみの念で一杯になりました。その實、私自身も先刻はそのボートに乗せて貰ひたいなどと思つたくせに……今かうして他人が旨いこと逃げだしたのを見るとその男が憎くて堪らないのでした

命じました。

我々は先づ、病氣のキーヤ一夫を寢臺に載せたまゝ、運んで來て筏の一番いゝ所へ置きました。夫は肺を患らつてゐるらしく、頬はゲツソリと肉が落ちて、始終乾いた軽い咳嗽をしてゐました。夫の傍には、ハーベ一嬢と云ふ若い英國生れの婦人が附き添つて、甲斐なく世話をしておりました。この二人の婦人を筏に乗せた後で、我々もいゝ筏に乗り移りました。カーチスは、自分の命よりも大切にしてゐる羅針盤と海圖を持込む事を忘れませんでした。船は次第に沈んで行きました。始めは艦の方から、波は刻一刻と傾いて行く甲板の上を洗ひはじ

キーヤ一氏は、この船に乗る時に、奥さんと一緒に乗りました。奥さんは、三十あまりの美しい人でしたが、航海の途中で病氣になつて、今では明日をも知れぬ重態でした。キーヤ一氏は、この奥さんを破れ草履のやうに棄てゝ、ただ一人ボートに乗つて逃げだしてしまつたのです。併し、此處に容易ならぬ出來事と云ふのは、この六人の者が逃げる時に、筏の上に積んであつた食糧や飲料水を、持てるだけ持つて行つてしまつた事です。あとにはたゞ六樽の鹽肉と、ビスケットが三四罐と、僅かばかりの飲み水が残つてゐるだけでありました。

この事を乗組員達が知つた時、

めました。それと同時に、我々の乗つた筏は、自然と波の上に浮んで來ました。

あと三十分もすれば、チャンセラ一號は、跡かたもなく海の底へ沈んでしまふでせう。

五十餘日の永い間、我々二十九人の生命を預かつて呉れたチャンセラ一號——丁度、親鶏がその雛を羽がひの下に庇ふやうに、チャンセラ一號は私達の命を守つてくれしました。

この親とも頼むチャンセラ一號に別れて、私達二十三人の者は、ほんの一枚の木の葉のやうな筏に身を托して、大西洋の真中へ抛り出されたのでした。

暗闇城

小島政二郎
寺内萬治郎畫

（前號までの梗概）軍馬を輸送するためにジェラル中尉は、たゞ一騎進んで行くと、途中でデユロツクといふ若い士官に出遇つた。この士官は父の敵であるストローペンタル男爵の行方を尋ねてゐたが、遂に探してた事を喜んでゐた。しかし、彼はたゞ一人で敵を討ちに行くのは危険なので、ジェラル中尉と一緒に、行つてくれと切りに頼んだ。中尉は例の俠氣から一しよに行き事になり、敵の男爵の住んでゐる暗闇城へと向つた。ところが二人は、男爵をやつつけるところか、あべこべに男爵の計略にかゝつて、薄暗い穴蔵の中へ押しこめられてしまつた。



六
僕等は透かさず、ドアへ駆け寄るが否や、兩の拳を堅め、重い鞭に力を籠めて、いやと云ふほど叩いたり蹴つたりした。口々に、あの卑怯な奴の名前を出來るだけ惡様に、石のやうな彼奴の胸にも應へるやうに罵り立てながら――。
我々の立てる音響は、城中一杯に響きわたつた。

しかし、ドアは頑丈だつた。よく中世紀のお城に見るやうに、大きな材木が鐵で打ち合せてあるのである。それを打ち破るのには、近衛兵の方陣を撃破するよりも六ヶ敷しいくらゐだつた。叩いても喚いても、何の甲斐もなく、唯高い天井に反響するばかりだつた。こんな何の役にも立たないことをいつまでも續けてゐるのは馬鹿げてゐる。さう僕が先にやつと冷静を取り返して、デユロツクを制した。

『もうかうなつちや仕方がない。それよりもこの牢獄同様の部屋から逃げ出せさうな所がどこかにないかよく調べて見よう。』

部屋にはたつた一つの窓があつて、硝子も何も嵌つてゐなかつた。その代り、小さくて、頭がやつと出るか出ないかぐらゐの大きさだつた。その上、随分高いところにあつた。で、デユロツクは櫓の上にあがつて外を覗いて見た。

『何が見える？』

下から僕が聞くと、デユロツクは、
『樅の森があつて、その間を雪の道が通つてゐる。』と云つたが、次の瞬間
『あッ。』と驚きの聲を立てた。

僕はいきなり同じ櫓の上に飛び上つて、彼と並んだ。目の前には、デユロツクが云つた通りに、長い雪に埋もれた路が續いてゐた。見ると、一人の男が馬に乗つて、まるで氣ちがひのやうに鞭を揮つて疾驅してゐた。次第／＼に姿は小さくなつて行く。さうしてやがて、黒い林の蔭へ消えてしまつた。

『あれは、どうする氣でせう？』と、デユロツクが聞いた。

『どうせ碌なことぢやないよ。彼奴はきつと僕等を叩く斬るために誰かを呼びに行つたんだらう。さあ猫の來ない間に、この鼠の目見たいなところから逃げ出す工夫をしなければならんぞ。』

僕等にとつて、唯一の慰めは隅の棚の上に點つて

あるランプだつた。美しい出来で、その油壺には、まだ石油が殆んど一杯残つてゐた。あれだけあれば明日の朝までは大丈夫だらう。若しこれが眞暗だつたら、僕等はずと氣落ちを感じたであらう。ランプの光をたよりに、二人で壁添ひに並べてある包みや箱を一つ一つ調べて見た。或場所には、一重ねぐらゐしか置いてないかと思ふと、或一隅なんかには天井に届くほど高く箱が積み上げられてゐた。察するに、この部屋はこの城の納屋か何かに使つてゐるらしい。その證據には、どの箱にも澤山のチーズやいろ／＼な野菜や、乾した果物などが詰まつてゐた。その他はすべて酒樽で、中には栓の口の附いたのさへあつた。

實を云ふと、僕は一日中さう澤山は食物を口にしてみなかつたので、これ幸ひと、そこらのものを手當り次第に頬張つた。葡萄酒も一杯御馳走になつた。しかしデユロツクは、口惜しさと腹立たしさに身

を顛はしながら、たゞ部屋の中をあつちこつちと歩き廻つてゐるばかりだつた。さうして時々思ひ出したやうに、

「今に見ろ、奴逃げようつたつて逃すものか。」と、繰り返して呟いてゐた。

デユロツクは自分の父の仇を討つことにはかり夢中になつてゐて、少しの罪もない僕をまでかうして危難に陥らせてしまつたことには全く氣が附いてゐないらしい。なんと云つても、彼の父親はもう十四年も以前に死んでしまつたのだ。今更生き返らすこともどうすることも出来やしない。ところが、僕は違ふ。全軍中でも最も有望と目されてゐるエチエンデエラル中尉である。その僕がいざこれから功名手柄を立てようとする手初めに、こんな今にも首を斬られてしまひさうな危険に晒されてゐるのだ。こんな、フランスのためにも皇帝ナポレオンのためにもならない下らない仕事に生命を捨てることを考へ



て見てくれ給へ。前途有望の身として、こんな勿體ない話はない。現に、僕の眼前には、華々しい戦争が待つてゐる。そこでは、男子の望むあらゆるものが得られるのだ。それなのに、五百萬人からのロシア軍を相手にするのはまだ足りないと言はんばかりに、僕はかうした下らない冒險に手を出してしまつたのだ。慎しんで、今まで決して個人同志の喧嘩には携はつたことはなかつたのに——考へて見ればこんな愚かしい話はない。

デユロツクは相變らず「今に見ろ」を繰り返してゐる。それを聞いた僕は、とう／＼

「それもよからう。しかしそりや、君が彼奴を遣ッつけることの出来る立場になつた時の話ぢやないか今はそれどころぢやないよ。彼奴が吾々をどうしようとしてゐるのか、それを知る方が大事な場合だ。」

「なんとでもしたい通りにしたが、僕はとうしたつて、父の仇を報せずに置くものか。」

「今そんなことを云つてゐたつて仕様がなないぢやないか。君がお父さんのためにしなければならぬことがあつたと云ふなら、僕だつて、僕の歸りを待つてゐる母のために、こんなところでオメノと命を捨てちやゐられない。」

僕のこの言葉が、デユロツクをはつと正氣に返らした。

「デエラル君、許してくれ給へ。僕は身勝手に、自分のことはかり考へ過ぎてゐた。どうしたらいいか、それを指圖してくれ給へ。」

「いゝよ。ねえ君、こんなチーズ藏見たいなところへ吾々を閉ぢ込めたからと云つて、何もこれを食べつてゐると云ふ意味ぢやあるまい。出来るなら、吾々を殺してしまはうと思つてゐるのだ。だから、彼奴等は、僕等がここに閉ぢ込められてゐることを誰にも知られないやうに願つてゐるに違ひない。また誰も僕達を探しにここへ來ないことを望んでゐる

に違ひない。ところで、君の部下は君のここへ來たことを知つてゐるのかね。」

「いや、僕は何も云はずに出て來てしまつた。」

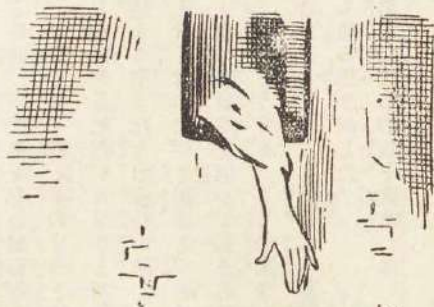
「フーンさうか。しかし、僕達はここに閉ぢ込められてゐる限り、飢ゑ死する心配はまづない。だから彼奴等が僕達を殺さうと思つたら、向うから出向いて來るより外に仕方があるまい。さうすりや、この樽を楯にして防げば、さつきの五人ぐらゐ僕と君とで十分だ。それやこれやを考へると、さつき早馬をうたせて行つた使ひは、どこへか加勢を頼みに行つたんだと思ふが、どうだらう。」

「成程。だとすると、我々はいいつが歸つて來るまでに、どうしてもここを出なければならぬ。」

「さうだ。若し出られるものならね。」

「このドアを焼くことは出來ますまいか。」

「そいつは容易ぢやあるまい。幸ひ、あの隅々に、石油の樽が二つ三つあるにはある。が、焼けるのは



ドアではなくて、我々

の方が先きだらう。牡蠣煎餅よろしくと

云つた形に、コンガリ焼け死んでしまふだらう。」

「ね、君に何かいゝ智慧はありませんか。この時になつて、急にデユロツクは絶望の調子で云つたが、ふと何を聞き附けたのか。何でせう、あれ？」

云はれて見る

と、例の小さな窓のあたりで、

さつきから微かな音が聞えてゐた。見ると、チラ／＼光る星と僕達との間に、一つの影がふと現れ

た。續いて白い小さな手が、ランプの光の中へすつと伸びて來た。指の間で何かキラリと光つた。

『早く、早く。』さう云ふ聲は例の優しい娘の聲だつた。我々は樟の上へ飛び上つた。

『あの人はコサツク兵を呼びにやつたのですよ。あなたの方のお命は危険に瀕してゐます。嗚呼私も駄目です、私も駄目です。』

その時、外で荒々しい足音がしたと思ふと、罵る聲、なぐる音、白い手のすつと消えたあとの窓にはまた前のやうに星がキラ／＼瞬いてゐた。やがて、息詰まるやうな女の悲鳴が聞えた。間もなくそれも聞えなくなつた。と思ふと、どこかで重い戸がバタンと夜の静けさを破つて締まる音が聞えた。——僕達二人はどうすることも出来ずに、樟の上に唯立ち竦むばかりだつた。娘の成行を思ふと、恐ろしさに血も凍る思ひがした。

『惡黨共はあの娘を監禁してしまつたな。きつと殺

すに違ひない。』と僕が云つた。

デユロツクは譯の分らない叫び聲をあげたと思ふと、樟から飛び降りた。さうして氣ちがひのやうになつて、拳を堅めてドアを亂打した。一打ち毎に、血が點々とあとを附けた。

『ここに鍵が落ちてゐる。あの娘がさつき引き立てられて行く時放り込んで行つたのに違ひない。』僕は床の上からそれを拾ひ上げながら、思はず叫んだ。すると、デユロツクは矢庭に、喜びの叫び聲を擧げながら僕の手からそれを引つた。しかし次の瞬間、彼はそれを床の上に叩き附けた。折角の鍵も大きな錠前の中にスッポリ嵌り込んでしまふ程小さかつたのだ。デユロツクは頭を抱へたまま箱の上に沈み込んでしまつた。彼は絶望のあまりシク／＼泣き出したのである。あの娘の身の上を思ひ、救出することの全く望みないことを考へると、僕だつて泣き出したかつた。

(つゞく)

童心句募集

(選者は野口雨情先生)

野口先生が、童心句を創唱されて、愛國心の涵養は空虚なる心を充實するにあり、童心句は少年少女の空虚心を充實する唯一の詩であると説かれてから、教育者間にも、一般文藝の愛好者間にも、童心句が驚異的歡迎を受けてをります。童心句とは、童謡を俳句の形式(五七五調の十七文字)で表現した短い詩で、童心より發した俳句と云ふことにもなります。

牡丹餅をくはへて烏霞みけり

この俳句は俳人一茶翁の作ですが、これが今言ふ童心句であります。童心句は見たまま感じたままを童謡を作ると同じ心持で十七文字の俳句の形式で言ひあらはせばよいのです。

金の星は本月號より『童心句欄』を設けて、讀者諸君の童心句を掲載することにいたしました。この企てを發表以來、全国各地より熱烈な歡迎を受けまして、編輯室の机に推積する投書が日々山を爲す有様であります。童謡に親む諸君、俳句に親む諸君、その他文藝に親む諸君はこの新しき企てに奮つて御投稿を願ひます。投稿規定は、巻末の規則をごらん下さい。

金の星編輯部



軍旗の由來

沖野岩三郎

寺内萬治郎監

110

「このへんに、若い男の子を多勢もつてゐる人はないか。」

馬に乗つた立派な武士は、町の辻の所で馬を停めてききました。

「あの鍛冶屋さんへお出でなさい。あすこには男の子ばかり十七人もございますよ。」

酒屋のちいさんは、突當りの家を指さしながら申しました。

「十七人？ それはみんな兄弟か。」

武士は驚いたやうに、きく直しました。

「ええ、兄弟です。ガオさんは、本當に子澤山ですよ。」

子無しの酒屋のちいさんは、うらやましうに申しました。

「さうか。」と云つたまゝ武士は鍛冶屋のガオの家の表に馬を乗りつけました。

家の中で、トツテン、カッテン、トツテン、カッ

テンと真赤に灼いた鐵をたいてゐましたガオは、仕事の手をやめて、戸の外を見ますと、そこには立派な武士が二疋の馬の轡を控えながら立つてゐます

「そちはガオと申すか。」

「はい、さやうでございます。」

「子供は何人ある？」

「男の子ばかり十七人ございます。」

「一番兄の子は、どこにゐる？」

「こゝに槌を提げて立つてゐるのが、長男でございます。」

「ガオ、そちは此の長男をゾハク王の御用に立てる氣はないか。」

「御用に立てると申しますのは？」

「王様の家來になるのだ。功を立てたなら、どんな高位高官にでも出世できるぞ！」

「ありがたうございます。では王様の御用にお立て申しませう。」

『ガオ、そちらは忠義者だ。では今から直ぐ長男をつれてまゐるぞ！』

『ありがたうございます。作が武士になりましたなら、どうか成るべく王様のおそば近くに置いてやつて下さいまし。お願いいたします。』

『よろしい、王様の近衛騎兵に取立てつかはす。』

武士はひらりと馬に乗りました。そして、ひいてゐた一疋の馬にガオの長男を乗せて、王城の方へ駆け出しました。

『お父さま、お母あさま、行つてまゐります……』と云つた長男の聲は、もう遙か二三十間の向ふから聞えました。

『さやうなら、出世して歸つていらつしやい。』とガオが言つた時、裏の納屋の入口に寝てゐた飼犬のブチが、矢のやうに若い主人のあとを追うてかけ出しました。ガオは頻りに口笛を吹いてブチを呼びましたが、ブチは馬と一緒に王城の方へ行つてしまひま

した。

夕方、ガオは息子たちと一緒に御飯をたべながら王城や近衛騎兵の話をしてゐる所へブチは歸つて來ましたが、何だか悲しさに尻尾を垂れて、ガオの膝の上に這ひ上つてクンクン鳴いてゐました。

それから一ヶ月たちますと、以前の武士がまた訪ねて來ました。

『ガオ、喜べ！ そちの長男は立派な武士になつたぞ。王様は大へんお喜びになつて、次男をも武士にお取立下さるとの、ありがたい仰せだ。早速用意をさせろ。』

武士の言葉をきいたガオは、踊り上つて喜びました。そして間もなく次男は、武士のひいて來た馬に乗つて王城へまゐりました。ブチはまた次男と一緒に王城の方へ駆け行つて、夕飯頃に元氣なく歸つて來ました。

長男が家を出てから三ヶ月目に、以前の武士がま

た鞍を置いた馬を引いてガオを尋ねて來ました。

『ガオ、喜べ！ そちの長男も次男も、大へんに王様の氣に入らだ。今日は三男をつれにまゐつた。早速用意をさせろ！』

武士の言葉をきいたガオは、前にもましてうれしかつたので、早速三男を馬に乗せて王城へ送り出した。相變らずブチはワン／＼吠えながら若い主人を送つて行きましたが、夕方になると、水でもぶつかけられたやうに、すぐ／＼と歸つて來ました。

四ヶ月目に、また以前の武士が一頭の馬をひいて訪ねて來ました。五ヶ月目にも、六ヶ月目にも、毎月毎月、きまつたやうに、月の朔日には必ず訪ねて來ては、四男五男六男と順々に王城へつれて行きました。

無學で正直一方のガオは、自分の息子たちが、今に立派な武士になつて、伴れ立つて歸つて來る日を待ち待ち、たうとう十五ヶ月目に十五人目の息子を

王城へ送りしました。

ところが、こゝに一つの不思議は、飼犬のブチでした。長男から十五男まで、武士につれられて王城へ行つたたびに、そのあとを追つかけて行きましたが歸つて來ては、きつと悲しさに鳴きます。のみならずだん／＼瘠せ衰へて、あまり食物も食はず、ガオが仕事の手を休めると、すぐ其の膝に這ひ上つてクンクン鼻を鳴らしながら、何だか訴へたいやうな容子を見せるのでした。

『ねえ、可愛さうに、みんな王様の家來になつてしまつたので、淋しいんだらう。だけどな、待つてゐろよ。今にみんな揃つて、お馬に乗つて歸つて來るぞ。十五人が馬に乗つて一度に歸つて來たなら、町の人たちは、何と云つて驚くだらう。きつと、みんなは聲を合せて、ガオさんは仕合せ者だ。あの立派な十五人のお武士さんは、みんなガオさんの息子さんたちだよ。何と立派ぢやないかッて……その時、

ブチよ、お前は元氣よく吠えてやれ。見ろよ、おうちの立派な若様たちをッて……」

ガオはさう云つて、ブチを慰めてゐましたが、十六ヶ月目に十六人目の息子を伴れて行かれた時、ブチは、やつぱり其の馬について走つて行きましたが歸つて来た翌日から、何にも食べないで、一週間程病み苦しんで死んでしまひました。

いつも、自分の膝に這ひ上つて寝てゐたブチが死んだので、ガオはブチの皮を剥いで、それを前掛にして膝にかけながら、毎日トツテンカン、トツテンカンと鐵をたゝいてゐました。家にはもう一番末の十七人目の息子一人しか残つてゐません。

十七ヶ月目の朔日に、例の武士がまた訪ねて来て其の十七人目の息子を、王様の家來にしろと申しました。その時ガオは頭を下げ、

「この子を王様に差上げましたなら、私の相手になつて槌をふるつてくれる者がありませんから、此の

子だけはどうぞ鍛冶屋のまゝで置いて下さい。」と云つて頼みましたが、武士は承知しませんでした。

いくら頼んでも聞入れてくれませんから、仕方なしに、十七人目の息子も馬に乗せて王城へ送りました。けれども、今度は其の息子を見送つて行くブチが死んでしまつて、ガオの前掛になつてゐます。そこでガオは、そのブチの皮の前掛を當てたまゝ息子のあとを追うて王城へ行つてみますと、門の所に立つてゐた老人の兵卒は、ガオの顔を見て、

「ガオさん、お氣の毒なことでございます。」

と云つて、ほろりと涙を落しました。十六人の息子が、みんな立派な武士になつて、今また十七人目の息子が出世しようといふのに、お氣の毒なことだと云つて泣いてくれたので、ガオは其の兵卒に、何でお氣の毒だと云つたのか、そのわけを尋ねました。すると老兵卒は申しました。

「あなたは知らないでせうが、王様は近ごろ不思議

な病氣にかゝつてゐます。それにつけて込んで、隣の國から名高い醫者だと云ふのが来て、王様に二つの眞黒い蛇を差上げたのです。その蛇は毎日一人づゝの年若い人間を呑むのです。隣の國の醫者は、かうして人間をのむ蛇を三年も王様が御覺になれば、きつと御病氣が全快すると申すのです。」

そこまで話を聞いたガオは、もう自分の子供たちが、どんなになつたかといふことを知りました。で、いきなり王城の中へ駆け込んで、せめて末の子供だけでも取返さうとしたが、多勢の



兵卒は、ガオを王城の奥深く入る事を許しませんでした。しかしガオは、狂人のやうになつて、末の子を返してくれと囀鳴りましたので、一人の役人が出て来て、

『その子供十七人は、たしかに生きてゐる。安心するがよい。』と申しました。すると、ガオは大聲をあげて、

『生きてゐるなら、今すぐこゝへつれて来て面會させてくれ。』と叫びました。

ゾハク王が毎日、若者一人づつを蛇に吞ませたのは本當でした。それは隣の國の王様が、ゾハク王と戦争しては勝てないから、先づ其の國の一番強さうな青年達をみんな殺してしまつて、あとから軍をかけようといふ計略から、一人の大將を醫者に化けさせて、ゾハク王を欺したのです。

其頃ゾハク王は、戦争にかけては世界一の強い王様でしたが、智慧が足りないのと、殘酷な事を好き

な質だつたのとで、うまく隣の國の大將に欺されてもう千人近い青年を黒い蛇に吞ませてしまつたのです。けれども、こんな事が人民に知れては大變だから、内證にしてゐたのです。そのうちに戦争でも起つたなら、みんな討死したとでも言つて、うまくまかさうとしてゐる所へ、不意にガオが入つて来て子供たちに會はせろと囀鳴つたので、さすがのゾハク王も一寸弱りました。

そこでガオが無學なのを幸に、役人に言ひつけて『私の子供たちは、王様に差上げましたのだから、生さうと殺さうと御自由にして下さい。』といふ證文を書いて、それに判を捺せと云はせました。けれどもガオは、十七人の男の子を、みんな王様に殺されたのだといふことを知りましたから、其の證文を引破つて、泥靴でふみにじつたまゝ王城の外に駆け出して來ました。

そんな事のあらうとは知らない町の人たちは、多

勢市場に集つて、野菜や果物のせり賣をしてゐました。その人たちの中には、大事の息子が王様のお傍へ行つて、立派な近衛騎兵になつてゐるのだと思つてゐる人が何百人もありました。そこへ顔色を變へて駆けつけたのは鍛冶屋のガオです。

『まあ、ガオさん、どうしたんです？』と云つて、多勢が彼を取ましますと、ガオは果物を入れてある箱を演壇にして、その上に登つて、涙ながらに自分の可愛い可愛い子供十七人を、ゾハク王に殺された事を話しました。そして、最後に、血を吐くやうな聲で、

『吾々はあんまり正直すぎた。もう私は此上一刻の猶豫も出來ません。私は唯今から、ゾハク王を討取つて、此のベルシャの國を安全にしなければなりません！』と叫びました。それをきいた群集は、みんな悲みました。そして怒りました。

『よく言つてくれたガオ！ そんな悪い男を生かし

て置くな。おれたちも君の味方になつてやる！』

そんな聲が群集の中から湧起りました。で、ガオは大變な元氣で、自分の家へ駆け込んで、毎日眞赤に灼いた鐵をたゞく大きな槌をかたげて來ました。そして、

『吾子の仇を取りたい者、ベルシャの國を安全にしたい者、正義を愛して不義を憎む者、この三種の人たちは、今から自分について來い！』と叫びました。『やれ／＼！』『しつかりやれ！』『おれも子供を取られたんだ！』『そんな不義な奴は一日も生かして置くな！』

群集は口々に叫びながら、手々に得物をもつて、ガオの後について來ました。しかし、みんな百姓や町人である上に、大將のガオが鍛冶屋の親爺さんです。何千人といふ人を指揮する事が出來ないので、ガオは腰に巻きつけてゐたブチの皮の前掛をはづして、傍にあつた棒ちぎれに縛りつけました。そして

それをさしあげて、

『みんな此の毛皮の前掛について来い。この前掛はおれの子供たち十六人の殺されたのを見て、悲しみのあまり病氣になつて死んでしまつたブチの皮だ。』と叫びながら走りまゐりました。で、群集はガオの前掛を眼じるしに、どん／＼と王城の方へ駆けて行きました。

町の市場に大騒ぎが起つたときいた王城では、城の櫓に斥候兵をやつてみさせますと、毛皮の軍旗を翻した一團が、まづしぐらに王城の方へ攻寄せて来ます。

『それ、謀叛人だ。用意しろ！』

號令と共に城門は堅く閉ざされました。そこへ駆つけて来たガオは、手にもつた鐵の槌で、どすん／＼と鐵の扉をたいてゐましたが、なか／＼容易に碎けません。そのうちに兵隊はみんな甲冑をつけて、弓や槍をもつて、城門をさつと開いて討つて出まし

た。

ガオを始め群集は必死に戦ひましたが、なにさま軍の稽古は一回もしたことの無い連中ですから、見る／＼みんな追ひ散らされてしまひました。ガオも數ヶ所に手傷を負うて、山の中に逃げ込みました。

ガオは残念でたまひませんでした。何とかして此の悪い王様を懲してやりたいと思ひましたが、前掛の旗一本と槌一つだけで、兵隊もなんにも無い彼はどうする事も出来ませんので、鐵の槌を前掛に包んで、とば／＼と森の中を歩いてゐますと、向ふの方にちらちらと火の光が見えます。で、そこへ行つてみますと、そこには一人の老人がゐりました。

ガオは老人にすつかり事情を言つて、一夜の宿を求めますと、老人は親切に彼をとめてやつたばかりか、翌る朝、

『ガオさん、あなたはこれから眞直ぐに、東の方へ十里ばかりお逃げなさい。そして、ヘリドンといふ

人の所へ行つて、軍を起したわけをお話しなさい。』と云つてくれました。

ガオは、ヘリドンといふ人が、どんな人だらうかし



『よろしい。では其のゾハクを懲してやらう。何を隠さう、吾こそはベルシャの建國者で、世界の王と呼ばれたケイオムルス六代の孫である。わが祖父デ

りませんが、親切な老人の言葉を信じて、其日一日東へ東へと逃げました。そして、ヘリドンといふ人の家を尋ねあて、老人に救へられた通りに言ひますと、ヘリドンは非常に喜んで、

ムシエードは、にくきゾハクに殺されたのであるから、機あらば軍を起してゾハクを討亡はさうと考へてゐたのだから、明朝ただちに出陣しよう。』と申しました。

ベルシャ大王の孫ときいて、ガオも始めて安心しました。ヘリドンも早速家来たちを四方に走らせて軍の用意をさせますと、翌朝は何千人といふ兵卒が四方八方から集つて來ました。そこでヘリドンは先祖から代々傳はつた立派な甲冑を着て、牛の頭の飾のついた矛を手にして陣頭に立ち、兵士と共に萬歳を唱へました。

萬歳を唱へる時、兵士はみんな刀や槍や矛を高く差上げましたが、ガオは前垂のやうな變なものを差上げましたので、ヘリドンはガオに對つて、

『そちの持つてゐる、その妙なものは何だ?』とききました。すると、ガオは眼に涙を一杯ためながら此のブチが十六人の子供の殺されるのを見て來たことと、歸つて來ては悲しさにガオの膝の上でクン／＼言つたこと、それから病氣になつて死んだこと死んだあとで、ブチを抱いてやるつもりで、前掛にして毎日膝にあてゝゐたことを話しますと、ヘリド

ンも大變感心して、

『では、それを軍旗にしよう!』と言つて、ガオのもつてゐた毛皮の前掛に錦の縁を縫ひつけて、ガオに渡しました。

ガオは踊り上つて喜びました。そして大聲で、『ゾハク王の惡事は、此の軍旗が見てゐるぞ。この軍旗が知つてゐるぞ。』と叫びながら、眞先に立つて進みました。

そんな惡い王様でしたから、國民はみんなヘリドンの味方になつたので、まもなくゾハク王は軍に負けて捕へられ、デマグエンド山の洞穴の中に閉ぢこめられてしまひました。そこで、ヘリドンはベルシャ國の天子様の位について、ガオを高位高官にしてやらうと云ひましたがガオは頭をふつて、

『私が軍を起したのは、自分がえらい役人になりた

い爲ではありません。惡い者が滅びて、ベルシャの國が太平になれば、それより結構なことはございま

せん。私は家へ歸つて元の鍛冶屋になります。』と申しました。それをきいたヘリドン王は、何でもいゝから、自分の望を云つてみると仰しやいましたのでガオはすぐ、

『どうぞ、あのブチの皮を大事にしてやつて下さい。』と涙ぐんでお返事いたしました。するとヘリドン王は、深くおうなづきになつて、

『よろしい。あの軍旗はベルシャ大帝國の續く限り、長く國寶として大切にすることから安心するがよい。』と申されました。

ガオはそれで、すつかり安心しましたので、ブチの皮の軍旗にキスをして、王城を出て來ました。

それから一年の後、ヘリドン大王は、多勢の家來をおつれになつて、ベルシャの都を一通り御覽になりました時、軒の低いみすばらしい家の表で、お乗物をおとめになつて、家の中で一生懸命に槌を揮つてゐる男の働きぶりを、うれしさに御覽になりま

したが、やがてお乗物の簾垂をはねて、

『おい、ガオ。もう其の鐵の槌で、王城の扉をたゝきに來る必要はないだらうネ。』と申しました。すると、ガオはにつこり笑つて、

『王様、あなたが善い事をなさるか、惡い事をなさるか、そのおつむりの上の軍旗が、毎日眼を見張つてみてゐますよ。』と云つて、また槌を振りあげて、鐵をたゝきはじめました。

『ガオ、よく言つてくれた。さやうなら。』

と云つて、ヘリドン大王はお乗物の中にお引込みになりました。そして行列は靜に動き出しました。

町の人たちは、なつかしさに、王様のお乗物の後について行く金や銀や寶珠で飾られた毛皮の軍旗を見送りました。そして、あの軍旗のある限り、ベルシャの國は決して滅びないと、さゝやき合つて、軍旗に親しい敬禮をしました。これが軍旗に對する敬禮の起りでございます。

(をばり)



陽炎の春

達崎 龍

ゆらら ゆららの
かげらうは
たんぼぼ村の
晝の夢
晝の夢より
まだ白い
蝶々は夢の



細道を
ゆらら ゆららこ
かげらうの
げんげの村も
晝の夢
晝の夢より
まだ遠い
雲雀は空の
お使ひに

寺内萬治郎畫



綴

方

齋藤佐次郎選

星の思ひ出(賞)

仙臺市土樋二四五

阿部 和子

(十四才)

今夜も、私の部屋のガラス窓をとほして一つの青い星が光つてゐます。その星は、毎夜毎夜、他の星が出ない時でも、私が何気なく空を見上げる度に、青くさみしく光つてゐる星です。私は、その星を見る度に『またあの星が光つてゐる』と思ひます。そして、何故か、その星を見つめずにはゐられないやうな氣持になります。いつまでもちつと見つめてゐると、きつといふゝな、

ちひさい時に星を見た思ひ出がうかんでくるのです。

私がまだ十位の時でした。みんなで縁側に出て涼んでゐました。

『まあ、星がきれいなんです。』

お母様がおつしやいました。みんな一度に空を見ました。

『ほんとにきれいだ。』きれいだ。

お父様も、妹達もみんなほめました。

『きれいだ。』と、私も思ひました。けれど

なんだかこはいやうな、不思議なやうな、

氣がしました。あんまり美しいからそんな

氣がしたのかも知れません。何だか、外の

ものゝ美しさこちがつた、つめたい、そし

て深い不思議な美しさだと思ひました。け

れど、何となくつかしい所があるやうな

氣がして、いつまでも、いつまでも、見つ

めてゐました。

見つめてゐると、何だか星の光に吸ひつ

けられて大空をとんでゐるやうな、青い青

い空氣が自分のまわりを、うんでゐるやう

な、氣持になりました。そして、いつまで

は殺してしまつた。

ところが、朝飯を食べてゐると、又別の

蜘蛛が、戸のそばをすうりと下りて来て、

また中途で止つたり動かなかつた。

家の者に『朝来る蜘蛛は、何の蜘蛛だい』

と聞くと、お母さんが『朝来る蜘蛛は、御

客蜘蛛だよ』と言つた。『ちやあ、今日は何

處からか御客があるのだろ』と言つて、來る

かと思つて心持ちにしてゐると、お晝頃に

なつて、果して、親類から御客があつた。

でも、昨夜と今朝の蜘蛛のことで、私の

頭はいっぱいだつたので、なんとなく、御

客が蜘蛛のやうな感じがしてならなかつた

弟(賞)

長野縣下伊那郡伊賀良校尋六

矢澤 徹

『研逸。今日先生から聞いたお話をしてやうか』

『うん』

『學校ではうんと言ふと先生にしかられるから『はい』と答へたら話してやらう。』

研逸は、しかたなしに『はい』と答へた。

も夢中で星を見てゐました。

しばらくして氣がつくと、縁側にはもう

誰もゐませんでした。私は急にこはくなり

ました。空を見ると、どの星もどの星も私

をちつと見つめてゐるやうな氣がしました

私は『わつ』と泣き出しました。そして、

大急ぎで茶の間へかけこみました。それから

どうしたかおぼれしました。けれど、それか

ら私は、星程美しいものはないと思ふやう

になりました。そして、星程不思議なもの

はないといつも思つてゐました。

今夜も、こんな思ひ出がなつかしくうか

んで來ました。青い星は、相變らず美しく

光つてゐます。さつきからどの位たつたの

か、隣の部屋から、さつきまで騒いでゐた

妹の聲がかわいらしく聞えます。

蜘蛛(賞)

神奈川県高座郡大野校高二

天野 寛一

或る夜の事、夕飯を食べて居ると、天井

から大きな蜘蛛が、おしりから糸をふきな

『昔おぢいさんとおばあさんがあつてな』

『はい』とれむさうに答へた。『おぢいさん

とおばあさんは大さう夫婿がよくてな』

『はい』其の時はほんとに睡さうであつた

それから、とうとう『はい』が又『うん』にな

つてしまつて、ごろりと横になると、もう

ぐうぐう高いびきをかいてゐる。

かあらしい弟を、僕はぼんやり見てゐ

た。まもなく足をこたつの中へ落して、じ

たばたしたかと思ふと、又ほつとしたやう

にれてゆく。電氣の光で顔がリンゴの様に

赤くして、ほうたんをビクビクさして、夢

でも見てゐる様に見える。二本鼻汁が光つ

てゐる。かわいらしいこの弟の顔へ、すい

自轉車

金澤市松ヶ枝町校尋五

細川 公正

『公ちゃん、通宅まで砂糖を買ひに行つて

来て下さい。道がきたないから、よく氣を

つけてね』

母から使ひないひつけれられて家を出た。

がら下つて来て、中途でひよいと止つたかと思ふと、今おしりからふいた糸を傳はつて、又天井へ上つて行つてしまつた。

見てゐると、蜘蛛がおしりからふいた糸が風にゆられて、ふは／＼してゐる中、障子のすき間を通つて來た風が、その糸にあつたと、忽ち吹きとばされて行つて、障子のさんにくつ／＼してしまつた。蜘蛛はそれを上から見て居たのに違ひない。糸が障子のさんにつくが早いから、其の糸を傳はつて下りて来て、中途で又休んで糸を飛ばしては物にくつ／＼して、しまひにはとう／＼立派な巢をこしらへてしまつた。

私が『それ見る、でかい蜘蛛が巢を作つた』と言ふと、お母さんが『夜来る蜘蛛はどろば蜘蛛だ』と言つたので、私は棒を持つて来て、その巢をこはしてしまつた。蜘蛛は何處へ行つたのか、もう天井には見へなかつた。

つぎの朝、目を覺まして見ると、天井と私の頭とへ蜘蛛が糸を引つて作つて巢を作つてゐた。昨夜の蜘蛛に違ひない。私にくやしなつて、すぐにその巢をこはし、蜘蛛

『さうだ、近い所だが、自轉車につてやらう』かう思つて早速自轉車を出して來た然し雪があるので、中々力がある。少し廣い様な所へ出たが、人通りが多くて、非常に走らすのがむづかしい。其の上まだ僕はへたなので、右にまがつたり左へまがつたりする度に倒れかかる。少し行くと、向ふの方から荷車引きが二人、道にダ―ばいになつてやつて來た。やあ又來たな。かう思ふとハンドルを握つた手がふる／＼とふるえた。下りやうとしたが、あまり急でおりられない。もぢ／＼してゐる内にだんだん近づいて來た。然し荷車引きは兩方に聞いてくれたので、ほつと安心して其の方へハンドルをかたむけた。其のとつさ、今まで荷車の後からゆる／＼自轉車を走らしてゐた何所かの小僧が、急に其の間へ入つて來た。『あつ』と思つたが、今更とめるわけにもいかない。

グワシヤン。とう／＼つき當つて、僕は雪とけ道へ自轉車の下になつて倒れた。そして荷車にひどく手をうちつけた。僕は小僧にくらしくてならなかつた。子供達は

はやまわりに集つてわい／＼さわいである此の時二三人の女の人が來て、親切に自轉車を起してくれた。僕は何か、はづか／＼してしようがなかつた。落物はもう泥だらけになつて、自轉車も前輪がひどくゆがんだ向ふの小僧も落物を泥だらけにして、腰でもうつたのか、いたさうにさすつてゐる。そして、自轉車の後につけてあつた荷をくちや／＼にして、困つた顔をしてじつと僕を見つめた。僕はきまりが悪くなつて、こわれた自轉車をひきづつて家に歸つた。あゝ今頃はきつと荷をこわした事を、主人からひどくしかられてゐることだらう。僕はあの小僧さんがかわいさうになつた。

こかられた

兵庫縣出石郡小野校尋五

中田富江

私が昨日のばんに、ふさが四郎ちゃんげにふる入りに行つてゐるまに、こたつの中にはいつて、ふさの大切なべん軸とインキをつかつて、ざつしに人形さんを書いて居たら、しらんまにインキびんがひつくりか

てきた。顔は湯に行つてぬくもつたのかしらんが、まづかな顔をしてゐる。ついたてにぬれた手ぬぐひをかけて、こたつにはいつたらふとんの上にけんきゆうしよがあつたので、それをとつて見たら、うらには一ぱいインキがついてゐた。ふとんの上にもインキが一ぱいこぼれてゐたので、ふさはおこつて『わりやあゝ、なにするつてこな

あインキをよけよこべさんだいやあゝ』といつて、汽車の笛の様な聲を出して泣いた。私はそれでもしらん顔をして、あたつて居た。そして『なんにも書けへんはいやあ』といつて居るうちに、お母が目さま／＼として、『とみ。わりやあ、おかあが、ふさの物をぬろうとおこるしやあに、いろんなあといつてゐるのに、なんでいるつた』といつて、からだを私の方に向けて、ばたんと私のせ中をたきなつた。私はしらん顔をして、うた／＼をねをして居ると、おかあは又、私のせなかを、ばたんといた。そして、『とみ。ねよやあ』といはんと『ちよつとも、わしのことをきよさへん』といつて、だまつて部屋にいつてしまひなつ

た。私はまあ、おかあがはこかつたから、ねへちやんの方にれました。

死んだおばちゃん

栃木縣那須郡野村大字
南郷屋七五(尋六)

成田達也

おばちゃんは、僕をかわいがつて下さいました。そしておばちゃんは、僕をよくそだて、下さいました。僕が四才の時、とうちやんに自動車を買つてもらひました。その時、おばちゃんは、僕がまだ小さいので大きい子供にのらないようにあとなつてゐるきました。僕は、小さい時はおばちゃんといつしよに寝たのです。おばちゃんは、いろ／＼のお話をして下さいました。

會津の人が大田原にせめて來た時、おばちゃん等は山に逃げ込んださうです。そして、しばらくたつてから歸つて見ると、僕の家の前がけつたやと、僕の家だけはのこつて、あとはまるやけになつたと云ふ話や、殿様のおとほりの時のお話をなどおしへて下さいました。或日僕がおばちゃんに『お

へつて、大かた半分もこぼれてしまつた。私は、まづ先にお母の目を見たら、お母はさいはひに『なべさでれむつて、うすひきをしてなんなつた。私は紙の音をさせぬように、ざつしの紙につばなつけてやぶつてそれでインキをふかうと思つたが、あまり小さくてふけなかつた。そお／＼とすみの方をさぐつて見たら、大きなしんぶん紙が見つかつたので、それでふいて見たら、手に昔インキが一ぱいついてしまつた。またふとんの上はべたべたにぬれてゐて、ひないので、こまつてふさの地理のけんきうしよの裏を見たら、インキがついても、わからぬやうにあつたので、それをのせてこたつから出て『おかあ、まあ部屋に行かあな』といつたら『さきに行けいや』といひなつた。その時、ふさが四郎ちゃんえから出たやうな音がして、けたをけんころん、けんころんいはせもつてもどつて來た。私は、しらんふりをして『ゆり』にあたつてぬれむりをしてゐた。ふさは戸をがらつとあけて、ぬれた手ぬぐひ／＼かたにかけて、せつけんを左の手に持つて通入つ

ばちゃんはどこで、生まれたの』と聞いたが『木のまたから生れたんだ』と云ひました。『ふん、人が木のまたから生れるもんな』と生れるとも。そして、とうちやんの姉さんの名は、おつれちゃんといつて、大變りこつたつたが、せつて死んでしまつたよ。『そんなにりこつて、なぜ死んだんだらう』とこつたつて、ばかだつて、死ぬ時は死ぬんだ』とおばちゃんは、こんな話をしました。

野村に來てからも、おばちゃんは僕をかわいがつて下さいました。おばちゃんは、大正十四年の八月の中頃、死んでしまひました。年は九十才でした。僕はいつもおばちゃんの顔を思ひだすたびに、おばちゃんになつてゐるやうに思ひます。

書き方と理科の時間

赤坂區福吉町一乙の十六

坂倉末子

(十四才)

此の間先生が『これからはお天氣がよかつた、理科でも體操をします。そのかは

リ機嫌の時、雨がふつたら理科をしませう」

と、おつしやつた。私の級は、ほとんど、おてんばそろひの人達ばかりなので、皆一せいにさんせいした。中でも鈴木さんはうちやう天になつて喜んでしまつた。

今日は其の第一日の理科の時間で、空はすっかり晴れて雲一つ見えない。皆は大喜びであつた。ところが先生は、『今日は理科をするから、皆教室へ入れ』とおつしやつた。さあ皆がきかない。教室へ入つても先生がお言ひになる事は、てんでに耳に入れない。其の時の鈴木さんは、小さな聲で長咽を歌つてゐる。後の方ではふざけてゐる私も其の仲間の一人で、前の人と私達こそ、話を始めた。第一に前の加知さんが頭に「三三三」こんな物をさしてゐるから、『これ、なに』と聞くと『はげかくし』と答へた。そこでおとなりの守屋さんと相談して、加知さんをハゲさんとあだ名を付けた。するとハゲさんはおこつたおこらないの、守屋さんの色の黒いにつけこんでクロさんと付けた。私もだまつてゐればよかったのに、つい口がすべつてしまつて、

自分のブルドックのわけなすつかり話してしまつたものだから、とうとうブルドックをかん算にして、ブルにされてしまつた。次の書き方の時間も、はじめの内はまじめに書いてゐたが、半リンが鳴つて少ししたつたら、先生が教室を出てしまつたものだから、又一時に『わー』とさわき出した。するとクロさんはとつぜん『ハゲさん』と云つたハゲさんは『えー』と後を向くと、いきなりクロさんが墨の付いてゐる筆を付けたものだから、ほつべたにべたつとついた。それを見ると、たまたまなくおもしろくなつて、私も前の藤丸さんにさつきの通りにしたらなが／＼こつちを向かない。しばらくたつて、やはり『えー』とこつちを向いた。其の時すばやくほつべたにべたつとつけた。藤丸さんは怒つて、私の顔につけた。するとハゲさんもクロさんもつけたものだから、とうとうまつくるになつてしまつた。

お酒を飲まれた時

神奈川縣三浦郡逗子町櫻山一〇六五
中村 義子

お父様がお酒を飲むと、きつと私が『頂だい／＼』とだ／＼をこれるので、或時私にお酒を飲まされました。私は水のつもりで『がぶつ』と一口飲んだら、其のからいこと忽ち眞赤になつて、苦しうてせきをしました。それから駄々をこねないやうになつたのは、言ふまでもありません。

飲んだ時はあまり苦しかつたので、おぼえてゐますが、後は忘れてしまひました。毎晩お父様がお酒をのんでゐると『とつとおぶ。よつこがやい』お父様にお湯でも、義子にはからい』といつたさうです。此の事は、はや数年前の思ひ出となつてしまひましたが、時々思ひ出しては家中で笑ひます。

おねかき

神奈川縣高座郡大野小学校高二
高坂 金一

おこじやうから父につれて、おねかきにいつた。かきまにあはないといけなないので三作ばかり父にかいてもらつた。それから父はさくり、私がかいた。あまり島がかわ

かわいいそうな子供

神奈川縣高座郡大野校高二
高坂 金一

二十四日の朝、家ではまだれてゐるのに、誰か

『おはよう』

と、戸口へ立つたものがありました。母がすぐ起きて行きますと、それは谷戸のえいちやんでした。母はさうさう火をたきつけて、『寒かつたでせうから、まあ一くべおあたんせい。』といつた。えいちやんは、ゐるりのふちにすはつた。

私はこんなに早く来たのにきつとなにか急な事が出来たのにちがいない、と思つて、れどこで耳をすませて、なにをなすかと思つて居た。父が起き出すと、『つれちやんがひどく悪くなつたから、今すぐおばさんに行つてもらふんだよ』と言つた。つれちやんは母の嫁なので、母は顔色をかへてしまつた。

父は『なにしろ早く支度をして、行つて見るがよい』と、言つた。母はふだん驚

物の上に、はなりを着たまゝお茶のますに行つてしまつた。

ゐるりであつて居た父は、顔を洗つて来て私をおこすので、私も起きた。私が『今死ぬと、あとにのこつた小さい子供が、かわいいそうだなり。』と言ふと、父は『うん、かわいいそうだとも。あとに女してもあればいいが。』と言つた。

その朝はそのまゝ、學校に来てしまつた。學校にゐてもその事なんかへると心配でならなかつた。

歸りにもいそいで歸つて見た家には父も母もゐた。私が

『谷戸のおばさんはなほつたか。』

と言ふと、父は

『とうとう死んでしまつた。』

と言つた。

その時には私も母もつい泣きました。

その夜、父はつやに行つた。

とむらひがすんでから、七日目といふ日には、母も私も墓まゐりに行きました。

今でも母の小さい子供を思ふと、かわいそうでなりません。



通信

童謡研究欄への

寄稿を乞ふ

野口雨情

金の星童謡更新の一つとして、又、童謡道のために、童謡研究欄を設けて、童謡に關する權威ある評論、感想等を毎號募集して掲載することにいたしました。かうした企ては、童謡道の當然なすべきことであり、一般童謡愛好者諸君にも大なる参考とならうと思はれます。同欄へ寄稿の原稿は、なるべく簡明に責任をもつてお書き下さることなぞを乞ひます。ことに、童謡と教育との一致研究に關した賞賜問題などは最も歡迎するところであります。尤も原稿の取捨

は私へ一任して下さることを願ひます。かうして金の星が童謡道のために、逐漸蕭々として如何に努力するかな御覽願ひたいのであります。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

○今月もたくさん投稿が集まりましたが、そのうちに、作が見當りませんでした。入賞作の二三を除く外は、皆んな普通の出来栄です。

○阿部和子さんの『星の思ひ出』を第一に推しました。別段これと云つて取り柄があるわけではありませんが、自分の心にほんたうに感じた所を、ありのまま、書いたために、この種の作に有り勝ちな『厭味』が出てをりません。この作者に望みたい事は、どうか、これから後も、決して『うまく書かう』としなくて、何處までも素直に進んで行かれん事です。

○天野寛二さんの『蜘蛛』高等科二年の作としては、決して『うまい』とは云はれませんが、その代り少し生意氣な點がなく、讀む人の心に愉快な感を與へます。この作を讀む人は、何人も或る無氣味さを感ずるでせう。執念深い蜘蛛の無氣味さ、それは決して作者の意圖によつて出たものではありません。作者はたゞありのままに

事件のなりゆきを記したのに過ぎませんが、かへつてその爲に人を動かす力があるのでせう。この點は、文を書く人のよく心すべき所だと思ひます。――また最後の數行の句は、この文全體を引き締める事が出来ました。

○矢澤徹さんの『第一』少し簡略過ぎる體みがあります。二ツ三ツ、文句を加へて置きました。ありふれた題材ですが、矢澤さんの弟を思ふ心持がよく現はれてゐて、思はずほゝふまれます。

○紙面の都合で、他の作品の批評は略します。終りに一言したい事は、毎月集まる綴方の中で、兒童の受持者の先生や、お母さま方が代筆されたものがあります。選をする私共に取つては、讀み易くて大へん結構ですが、その代り文字の上から看取することが出来る兒童の氣持なり態度なりが、全然失はれてしまひます。どんなまづい文字でも、ぞんざいでさへなければ結構ですから、どうかそのまゝお送り下さい。

童謡の選後に

齋藤佐次郎

○今月集まつた童謡の中から、左の七篇を推薦候補作に上げました。

(大人篇) 福井勝秋

○今月から童謡欄を擴張しました。推薦作を餘計に出しました。これからは、特別に優秀な作を特選作として發表することにしました。子供篇の童謡が澤山に出ませんでしたが、これも次號にはもつと餘計に出します。

▽四月號の表紙裏は、毎號執筆されてゐる岡本輝一先生のお父様がお亡くなりになつた爲めに、遂に間に合ひませんでしたので代つて岩岡と枝先生にお願ひいたしました。大層面白いものが出来ました。

▽童謡、童謡ともには、精選した大家の傑作を發表しますが、『金の星』は名作も實際に重きを置く事をモットーとしてなりましたから、その意味でも、新人の優れた作を紹介したく、愛讀者の研究諸氏の作には、今後大に注意をそゝいで行きます。

▽四月號には、水谷まさる先生や北村壽夫先生などのかわつた作を掲げることが出来ました。

赤屋根と林檎

(月本三千尾)

○赤屋根と林檎の批評は、一月號で述べましたが、此處には略します。

○大人の方の不成績にひきかへて、子供の方は思ひの外の出來榮えでした。まづ、上記の四篇を推薦に入れて、それを更に厳選の上、『お寺の百目柿』と『狐と狸』の二作を入選と定めました。『お寺の百目柿』は本月號に掲載の筈でしたが、紙面の都合で次號へ廻りました。

○狐と狸は、九二頁に掲載しました。何んの新味もない、平凡な作ですが、作者の愉快なんびりとした氣分が現はれてゐて

編輯室より

(記者)

▽前號で童心句の募集を發表しましたところ非常な應募數が毎日で、編輯部でも驚いたほどでした。尚、毎日ぞくぞくと集つて來ます。しかし、四月號には頁の餘裕がなかつたために、澤山載せることが出来ませんでした。五月號からはもつと澤山發表します。

○今月から童謡欄を擴張しました。推薦作を餘計に出しました。これからは、特別に優秀な作を特選作として發表することにしました。子供篇の童謡が澤山に出ませんでしたが、これも次號にはもつと餘計に出します。

▽四月號の表紙裏は、毎號執筆されてゐる岡本輝一先生のお父様がお亡くなりになつた爲めに、遂に間に合ひませんでしたので代つて岩岡と枝先生にお願ひいたしました。大層面白いものが出来ました。

▽童謡、童謡ともには、精選した大家の傑作を發表しますが、『金の星』は名作も實際に重きを置く事をモットーとしてなりましたから、その意味でも、新人の優れた作を紹介したく、愛讀者の研究諸氏の作には、今後大に注意をそゝいで行きます。

▽四月號には、水谷まさる先生や北村壽夫先生などのかわつた作を掲げることが出来ました。

▽五月號はもつと、面白いにします。記者一同、どうしたら皆さんをお喜ばせする事が出来るかと、頭をなやめたりします。就いては、讀者の方よりも、金の星内容に關する批評とか、或ひは希望などをどしどしお知らせ願ひたい存じます。私共はかうして、讀者の方々と相協力して、金の星を益々立派な雑誌にして行きたいと思ひますから……。

童心句掲載外佳作

正夫(東京) 藤澤 一郎(東京)
貴田 幸子(千葉) 山崎 孝(東京)
小池 秀路(東京) 後藤 賢三(東京)
安 勝比古(茨城) 金子 虹(東京)
高橋 草(栃木) 何野 青雨(朝鮮)
加藤 正治(東京) 澤田 美津緒(愛知)
澁谷 正治(東京) 加藤 勇(東京)

綴方掲載外佳作

河田 實代(千葉) 吉野 徳子(千葉)
大谷 嘉一(神奈川) 高坂 金一(神奈川)
萩原 千江子(埼玉) 野口 ハル(埼玉)
小西 正治(東京) 中里 素行(神奈川)
橋爪 俊子(徳島) 岩倉 明(福岡)
金子 スヰ(神奈川) 柿本 留吉(福岡)
山本 一夫(兵庫) 山岡 喜久男(長崎)
佐藤 紫洞(山形) 佐藤 圭一(新潟)
熊切 三郎(不明) 橋本 美枝(奈良)
長島 いつ(埼玉) 田中 直介(埼玉)
高橋 研作(長野) 川島 秀雄(東京)
遠藤 敏夫(愛媛) 林 善太郎(東京)
岡部 康子(東京) 矢崎 毅(長野)
岡本 清一郎(不明) 飯島 守夫(長野)
板倉 末子(東京) 横山 寛(長野)
山口 吉三(滋賀) 森 花水(秋田)

童話掲載外佳作

吉宮 都美三(神奈川) 河部 和子(宮城)
福井 勝秋(愛知) 崎可 島山(山口)
佐藤 幸信(大分) 柿内 けん路(愛知)
北村 俊夫(神奈川) 横矢 萬蔵(福岡)
木村 田長(長野) 三池 秀雄(東京)
郷間 慈登(栃木) 中川 秀雄(東京)
雪月 永京(都立) 佐藤 圭一(新潟)
末松 安一(山口) 大和 勲(東京)
桑原 まさ子(東京) 牧野 富之助(山口)
近藤 民雄(不明) 矢崎 毅(長野)
黒岩 一男(鹿児島) 田中 健康(福岡)
戸井 田道三(東京) 吉田 岩雄(福岡)
上原 文孝(長野) 福司 喜太郎(秋田)
松井 雅夫(福岡) 長谷 川基(香)

童話掲載外佳作

松井 雅夫(福岡) 關野 正長(長野)
千葉 仔郎(不明) 古莊 武雄(東京)
山田 惣之介(新潟) 古室 一(不明)
原 山(長野) 前田 博次(長野)
賤機 多味男(静岡) 福田 初(神奈川)
高野 星流(山形) 池田 勲(千葉)
林 俊夫(東京) 廣瀬 正(茨城)

金の星誌友募集

金の星の誌友を募集いたします。誌友には色々の特典や便宜がありますから、どうか振つて御加入下さい。ハガキで本社へお申込み次第、誌友規則書をお送りいたします。

山岡 静子(岡山) 法本 美夫(福井)
根岸 啓(茨城) 渡田 稔(和歌山)
澄田 郁(和歌山) 中川 静村(奈良)
沼田 滋夫(神奈川) 飯島 守夫(長野)
畑山 佐太郎(秋田) 賀定 好子(不明)
村尾 嘉子(岡山) 長谷川 兵(兵庫)
岡 サツキ(長野) 山口 コト(栃木)

新誌友名簿

石原 孝(東京) 原田 善郎(神奈川)
得能 正通(岩手) 保坂 昌雄(東京)
中川 静村(奈良) 竹内 ミヅ(北海道)
西岡 穂雄(愛媛) 村山 義忠(東京)
篠崎 正吉(東京) 土居 新花(愛媛)
市川 博江(京都) (以下次號)

『童女の島、前編までの梗概』 支那の王様の宮殿は陶器で出来た世界に誇らしい立派なものでした。ところが或夜、不意に地震が起つて陶器の宮殿に大きなひびが出来て了りました。王様は大層お叱きになつて、元通りに宮殿をなほした者は王女の銀簪を姫のお新さんにするといいお振れを出しました。誰一人なほせる者がありませんでした。この物語の主八公達も、このお振れを聞きつけて都の御殿の方へ駆けつけましたが途中で不思議なお婆さんに遭遇しました。お婆さんは魔女だつたのです。連麻は魔女のために捕はれて不思議な家の中へ連れて行かれてしまひました。そこで連麻は、いろいろと苦しい仕事をさせられました。たうとう終ひに、宮殿のひびを癒すことの出来る『真珠のれりぐすり』を盗み出す事が出来ました。連麻は大喜びで魔法の島に乗つて家へ歸つて来ました。

新らしく出た本

○世界童話叢書
第九 篇 イギリス童話集

金蘭社の世界童話叢書は、巻を逐ふに従つて益々美しく、益々權威あるものになつてゆく。殊にこのイギリス童話集に至つては、その精髓を最もよく發揮せるものとして、廣く世に紹介したいと思ふ。親指トム、ジャックと豆の木等、代表的ものを始めとして、その他二十篇、何れを讀んでも面白く、それらイギリス各地方の地方色な人も、民族的心理なりを窺ふ事が出来る。大人も子供も、一度は必ず讀んで置かねばならぬものである。四六判箱入三〇六頁、原色版挿畫多數入、定價壹圓五拾錢、東京市外東鴨上町二十八、金蘭社發行

○少年少女科學大系 兒童天文學
第一 (松平道夫編、池上浩義校)
『子供の讀む科學の本』は、これまで色々数多く出版されてゐるが、何れも説明が六ヶしかつたり、定價が高過ぎたりして、適當なものになつた。今度、金蘭社から出版された本書は、その點に細心の注意が拂はれてあつて、自然界のあらゆる現象を、兄と弟の會話を以て説明するあたり、著者のなみけならぬ苦心の程が偲ばれる。なるほどこれなれば兒童は喜んで、始めから終りまで多大の興味を以て讀み終るであらう。口繪や本文の中に、多數の寫眞版が挿入されてゐるのは嬉しい。本書の如き立派なものを手にする事の出来る日本兒童は、なんと云ふ幸福な事であらう。四六判一八〇頁、定價壹圓、東京市外東鴨上町二十八、金蘭社發行



讀者だより

▼三月號の表紙結構です。二三年前の春のお休みに有志の人達と先生につれられて、多武峰へ行ったときの事を想ひ出します。山には雪があつたけれど、極原へ下りる村々の景色は、丁度あの畫と同んなじやうに桃の花が咲いて、のんびりしたものでした。歸一先生おりがたうございました。この後もまたあのやうなお願ひいたします(大阪市此花區上福島 玉井哲太郎)

▼童話の心から喜びます。皆さん、うんと好い童話を發表して下さい。及ばず自ら、好い童話には學園にて作曲し、童謡として發表いたします。私たちが實際運動者にとりましても心から喜びます。私は流石にかゝり肺炎を併發し、やつと克くなりつゝある床の上でこの手紙をたしめてお

ります。克くなりましたら活動します(大阪お伽學園にて 藤野福雄)

▼大阪の岡本廣夫様の御指導により、新年號より御誌を愛讀いたして居ります。今まで金の船だけ見て居つて私の不満を、完全に御誌は補つて下さいました。ほんとうにうれしうございます。これからいつまでも御誌を拜見して行きたいと存じます。どうぞ御友達に入れて下さいませ。誌友の規則書でどんなものでせう。新しい愛讀者でございませう。それを知らないものでございませう。どうぞ御教へ下さいませ。これから拙な作のみで御助しうございませうけれど、投稿いたしますから、御指導下さいませ(宮城縣鹿島臺村 野田政子)

▼誌友規則書、御送りしましたからどうぞ御覽下さい(記者)

▼金の星三月號、表紙からして素敵でした。童話の盛況、沖野先生立石先生 横田先生等——それら童話欄が擴張された！僕は躍り上つて喜んだのです。野口先生の『金の星童話の更新について』を見て、さらに喜びました。記者と讀

者との『金の星』はほんとにほんとにさうです！これからは益々よくして下さい。終りに讀者諸兄姉様、私は今度童話欄を創刊することに成りました。『童話陣』と稱します。どうか貧しい私に御援助下さいませ。入會、御寄稿下さることを偏にお願ひ申し上げます。誌に關する問合せ、寄稿等はすべて(東京府下灘ノ川町田端九七、川島秀雄)宛にして下さいませ。寄稿を待ちわびております。東京川島秀雄)

▼私は川島君と、金の星社を訪ねました。道義君が出てくると思ひました。他の人が出て来ました。齋藤先生に會ふことが出来なかつたので、大そうものたりなく思ひました(東京 山形新次郎)

▼折角お出下さいましたのに、留守にしてをりまして相済みませんでした。皆さんを誘ひあはせて、又ぜひお下下さい(齋藤先生)

▼僕はあの時、齋藤先生と暫くへ行つてゐたのです(給仕の道義)

▼これ、何を云ふのです。お前はあの時、印刷所へ使ひに行つてゐたではないか(ヨコヤリ先生)

▼野口雨情先生、御願ひ致します。之から推薦或は賞などの大人達小供達の秀逸な作品に、御面倒でせうが個人的批評をして下さることを。短評でかまひませんからこれほど我々童話を創作する者にとつて爲になることはないだらうと思ひます。私は今まで大人に童話の個人的批評のなかつたことを物足りなく思つて居ました。どうぞ出来ることでしたら御願ひ致します。先生の『關所遊び』は大變面白うございました。本居先生の詩と合せて何度も歌つて見ました。(長崎 山野達雄)

▼一月九日『金の星童話心會』を開きました。集まつた者は小林先生後藤君、加藤君、福島君、大藏君と僕です。皆良く出来たと先生がほめられました(下谷區金杉下町一五一 藤澤一朗)

▼僕も行きたかつたな(給仕)

▼上田君の『鳥の横とび』大變面白く拜見致しました。ユーモアの漂つた、作品です。石橋君の『鷹』もいいと思ひます。古村徹三君の作が見られなかつたのが淋しい氣がします。僕の『今そささい』拙らわものです。今後藤田都の名か

めて、本名に戻りますから宜しく(和歌山田邊町福路町 檀上春浩)

▼秋のすきな／＼金の星。月々に見違へる程大きくなつて居ることを大へんよろこんでゐます。教へ子らは『先生』金の星の次ぎのは、いつ来るの？と、毎日のやうにききます。私は六十人の子供と一緒に、首を長くして待つてゐるのです。子供の世界には何んの汚れもない、きれいな暖かい童心のみが漲つてゐます。未だこちらには雪が大分ありまして、吹雪の時などは何にも見えなくなり、外へも出られません。ところが、今日に珍らしい静かな日なので、體操の時間に庭へ出て大きな雪だるまをこしらへました。『サア／＼みなさん、この雪だるまを東京の金の星社へ送つてあげやう』などと話して笑ひました。そして、遊が東京の方へ向いて、金の星社及び諸先生の萬歳を心から祈つて、それ／＼子供たちは家へかへりました(山形縣鶴岡郡一條村瑞光コードモ會 庄司泰玉)

▼給仕『その雪だるまをぜひ送つて下さい』

▼先生『何にするつもりか！』

給仕『しまつておいて、夏になったら賣り出すのです』

▼金の星は、ますますのびてゆきまです。殊に、表紙、口絵は美しいです。『たれまき』は繪の中になんか教がふくまれてゐるやうです。寺内先生は『かはい、鳩さん』のやうに、かはらしい繪がお上手です。野口先生の『關所遊び』の童話は大すきです。それから大人篇の『鳥のよことび』は、ほんとうにうまいと思ひます。私も誌友のお仲間入りなさせてくださいませ。どうぞ規則書をお送り下さいませ(朝鮮大邱 山本力)

▼寒い／＼と云つてゐる中にもう春です。加茂川原には若草が青ばみ、御苑にはクロバネが燃え出ます。私が京都へ来てから初めて経験する冬は、餘りにも私に奇蹟でした。いつも温かつた南の國を思ひ出せましたが、又温い思ひ出の春を迎へることが出来るのはほんとうに嬉しく感じます。雨情先生が選評して下さいませ。私は双手を舉げて賛成するに躊躇しませんでした。今度私たちは『新童話時人』を『新童話』として活版印刷にし

内容の充實を圖りました。素晴らしい出来栄です。二錢切手十二枚御送付の方に見本として一部御送り申し上げます。終に記者先生にお申し上げますが、童話心會は大人の部に投稿は出来るのでせうか？御面倒でも誌上でお答へ下さいませ(京都市柳馬場通丸太町下ル中大路方 駒田行香)

▼僕はあの時、齋藤先生と暫くへ行つてゐたのです(給仕の道義)

▼これ、何を云ふのです。お前はあの時、印刷所へ使ひに行つてゐたではないか(ヨコヤリ先生)

私の私をどうぞお許し下さい。金の星のためにお互ひに盡しませう(京都市 駒田定一)

▼皆様の内にて文藝誌お好みの方は、切手二錢お送り下さいませ(東京市外駒澤町上馬 大川十六)

▼特ちに待つた三月號を手にするのが出来た。表紙はほんとうに美しくてうれしかつた。石橋さんや村山君の童話を、よく拜見しました。それから今後、童話童話を募集しては如何ですか。童話童話二編お送りしますから、何うぞ御批評下さい。最後に金の星の発展をお祈りします(山形縣鶴岡 高野文雄)

▼金の星の皆さん。私は毎日楽しく『金の星』を讀んだり、文を作つて居ります。私は此の頃友達から『金の星』を借りて、其の雑誌の立派な事、學生としての精神はよく感じ、これは面白い物だとしみ／＼感して、此の間より皆様の仲間入をさせていたゞきました。金の星の皆さん、どうぞ御體を大切にしてい



金の星社 四月號

出版だより

近刊書のお知らせ

二月は豫定の通りの本が全部發行になりました。三月中に出版の豫定にある本は左の五冊です。

○トルストイ童話集
(名著大系の三十六)

○曾我兄弟
(賞傳物語叢書ノ二)

○コロンプス
(偉人傳大系ノ十)

○人買物語
(世界名作童話ノ十)

○金の星家庭文庫

○トルストイ童話集
(「トルストイのお話」は、作者が偉い人だけに、立派な藝術を持つたもので、作者獨特の教訓は少年

少女に深い感動を與へるものばかりです。

一體、トルストイの童話といふのは、面白いものはさう澤山はないのです。「馬鹿のイワン」といふ代表作を抜かすと、後はイソップ式の比喩譚が多く、面白い、立派な作は却つて民話の方にあります。それで、この「トルストイ童話集」は、少年少女に聞かせる話として最も面白いと思はれるものをトルストイの童話と民話の中から選び出して、それをまとめる事にしました。

「馬鹿のイワン」「二人巡禮」「僧正と大泥棒」「コウカサスの捕虜」の四つのお話をまとめた。中では、「コウカサスの捕虜」は非常に長篇です。

この四つのお話を讀めば、トルストイの精神がわかり、そして又話としても非常に面白いものばかりです。

りですから、知らず／＼の内に面白讀んでしまひます。「トルストイ童話集」は是非皆さんの讀まねばならぬ本の一つだと思ひます。

『曾我兄弟』

「義経」が皆さんに人氣があるやうに、この「曾我兄弟」は、或はもとと人氣があるかも知れません。

三島雅川先生は、はしがきに曾我兄弟は、親の仇を討つために生れて来たやうなもので、それだけに、あはれであり、はかないものだといはれてゐますが、全く此の曾我兄弟のお話は勇壯なお話といふよりは、あはれを感じるお話です。

三島雅川先生の「曾我兄弟」は、そこらにありふれた曾我兄弟の本と違つて、例の通り本當の事實を研究して書かれたものでありますから、この本を一度讀んだ人には五郎、十郎の兄弟が親の仇を討つての苦心がはつきりわかるばかりでなく、この兄弟をかこんだ周囲の人の様子もわかつて、本當の面白さがわかります。

この本を作り乍ら、記者は「こ

んな面白い本は、是非日本の少年少女に讀ませたい」と思ふ心で一ぱいになりました。

西洋のお話は讀まなくとも、かういふ日本の話だけは是非讀む必要が有ります。

装幀と挿畫とは例の羽鳥古山先生が非常な苦心をされたもので、他に見られぬスバラシイものです。

『コロンプス』

名著大系の一冊として發行した事があります。今度偉人傳の第十篇として新たに發行になります。コロンプスの事は、教科書にも出てゐますが、今更申すまでもあります。この本を讀んだ人は成程とコロンプスの偉かつた事がわかると思ひます。

たアメリカ發見者として有名なコロンプスだけを知つて、その裏に、コロンプスがどれ程かんなしくしてこの大冒険をやつたかといふ事は、大抵の人は知らないでせう。

先づ、この本を讀んで偉人コロンプスの面影を知つて置く必要が有ります。一つの修養書としても立派な價值がある本ですから、各

家庭は勿論、學校や圖書館に備へて欲しいと思ひます。

『人買物語』

丹後の由良の港に傳へられてゐる人買物語「三莊太夫」のお話です。日本には、昔から人買ひの話はさる／＼澤山にありますが、このお話ほどあはれを感じるお話はありません。

安壽姫と厨子王の姉弟と母親とが、一國の城主の家族であり乍ら父の死後、悪い家來の爲めに國を逐はれて、知る／＼なつて行く途中、人買ひにだまされて、安壽姫と厨子王は丹後の由良の港の三莊太夫といふおそろしい男の處へ賣られてしまひます。

また母親は佐渡ヶ島へ賣られてしまふのです。

かういふあはれな事になつてしまつて、安壽姫と厨子王は三莊太夫のところで、ひどい目にあはされて悲しい日を送り、姉の安壽姫は弟を逃れさせるために自分が犠牲になつて、遂に殺されてしまふのです。

それから後、何いろ／＼のお話があります。最後になつて、厨子王が都に出て出世して、丹後の

領主になり、三莊太夫を捕へて刑に處し、母親の行方をたづねて、遂に佐渡ヶ島にある事がわかり、母親は悲しみの爲めに盲目になつて島追ひなしてゐました。

「人買物語」はかういふお話の筋を持つたものです。各作童話大系の一冊として安い定價で美しい本となつて發行されますから是非御一讀下さい。

『金の星家庭文庫』

これは本社の新しい計畫として發行になるものです。世界の名作を一冊づつでなく、各編に三冊づつ集めて六百頁の立派な本にして出すのであります。

内容は勿論の事、装幀なども、模範的な立派なものであります。家庭文庫として、皆さんの御家庭に備へつけていただくには、いかしくないやうな完全なものにする積りで、本社の出版部が努力なしてまいりますから、必ず皆さんが喜んで迎へていただける事と思ひます。

第一巻には、世界の少年文學の、最も代表的である「ロビンソン

漂流記」「アラビヤン、ナイト」「ガリバー旅行記」の三種をまとめて發行します。

【近刊豫告】

○赤穂四十七士
(賞傳物語ノ三)

○支那英雄物語
(名著大系ノ廿七)

○荒野の勇士
(名作童話ノ十一)

○繪入・世界童話集

○野口雨情童話全集
(第一卷)

『野口雨情童話全集』に就て

野口雨情先生の全集が本社から近日出版になります。目下雨情先生は原稿の整理中であり、四月第一巻が發行の豫定であります。次號に於て精しくお知らせいたします。

本社發行圖書の評判

「家なき子」をよんで

東京上野小路二五

本多 鐵磨

佛蘭西の子供の心の中には、又世界いづれの國の子供達の心の中にも、日本の子供達の心の中にも、それは何であるかといふことは言ひ得ませんけれども、その何かが流れてゐると、この「家なき子」を讀んで私の胸裏により深く記憶付けられました。そして又この本が彼の地の子供達にやるにこれに恥ぢられてゐると、この機會を得て、私はその理由をよりよく知り得たやうに思はれました。否、かくあるべきが當然のことであつたらうと考へたのであります。文豪マローの傑作、家なき子！私は拾得した……といふ悲しい言葉にこの長篇の頁がくられ、おはなしが始まるのです。なつかしい故郷と別れてさすらいの旅がそれからそれへと續きます。その間に悲しい出来事の數々があ

りました。可愛い仲間と死別しました。悲しい風の吹く夜には親切な老人とも死別しました。そして自分自身も死に瀕したルミはあつた、かき人の情に助けられることが出来たのです。けれどもルミは眞の世界にたつた一人ぼっちになつてしまつたではありませんでした。ルミはかう言つてます……

私は世の中に目覚めて持つやうになりました。私を愛し、また私の愛してある人達の爲に生きなければならぬと思ひました。

新しい生涯が私の目の前に開けました。

前へ……

『赤い猫』を讀む

府下瀧野川町田端九七

川島 秀雄

さうです。ルミは前へ前へと進まねばなりません。併しそれはルミばかりではありません。すべての人々がさうの艱難と戦ひつゝ進まねばならぬと思ひました。

この物語に同情と涙をそそぎながらも、私の心にはいつもこの尊い教訓がひし／＼と響いて來たのであります。

雪の夜(西遊記讀後感)

山梨縣東八代郡祝村

雨宮 恒之

一月八日、童話讀本『赤い猫』を求む。その中で、『庄屋と鹿』『環々長者』『庄屋と代官』『鎌倉堀五郎』などはすでに以前に、『金の星』『金の船』時代(後の十二才時分)に載つてゐたものである。

當時は姉が『金の船』を買ふと第一に沖野先生の作品を讀んだものであつた。そしてそれが一番面白

かつた。沖野先生の作は今でも非常に面白く讀んでゐる。先生の童話は誰にでも面白く讀めることだらう。

『赤い猫』の中に納められてある童話は、先生自身で『自信のある作』と言はれてゐるだけに矢張りいいものが多かつた。

鬼も角『赤い猫』は面白くてたぬになる。故に、私はこの書を誰にでも讀みなさい、とおすゝめする次第である。

『家なき娘』を讀みて

東京府下大島町八ノ五四二

大木 實

桃色の表紙の中にやさしさうな女の子、寺内先生の装幀はいつも美しいと思ひます。

三井先生の平易な譯文は知らず／＼引きつけられます。挿繪も原本を用ひたのも良いと思ひます。

『家なき娘』題が女であるから、中々女らしくて僕等男にはつまらないだらうと思ひましたが、それどころかありふれた少女の本とはまるきり違つてゐます。さすが三井先生の譯文だけあると思ひまし

た。

『わしの目があいてゐたら、もつと早くお前を孫と、見分けたがな』と言ふあたりには思はず微笑しました。それは當然来るべき事でありましたが、バリヌと祖父ののりあひの所など最もすてきでした。家なき娘バリヌの苦心がよ／＼あらはれてゐました。私のやうなものには『家なき娘』の價値が言ひあらわされませんが、ぜひ一度はよむべきです。原作は佛國の文豪マローですが、三井先生の譯文と寺内先生の装幀はいつさう明き立てゝゐます。

日本の少年少女諸君、ぜひ一度は家なき娘をよんであわれなバリヌに清き涙を流してやりたまへ。私は一冊でもこの本がよまれる事を希望する。

『アンデルセン童話』

推薦

鳥取縣東伯郡三徳村門前

誌友 武部 政一

紅色のクロスにくつきりと浮き出したやうな原色版の、目もさめるやうな可愛らしい繪に飾られ

た寺内萬治郎畫伯の麗筆になる美しい装幀は、一と目見ただけで誰しもきつと類笑ますにはあられな

年」が大さう評判がよいと聞くと直に買いたくなつてしまひました。直ぐ本屋へ行つて買つて見ますと

子」によりてつく／＼感ぜられまし

『労働の少年』と『森の祈り』を讀んで

長野縣上伊那郡西春連村

小田白澤

い綺麗な本です。内容の面白いことはまた格別です。何しろ世界第一の童話作家と稱せられてゐるアンデルセンの代表的傑作である『親指姫』『大タラウスと小タラウス』『鶴』『雀から聞いた話』『ハンズの馬鹿』『一つの莢から出た五つ』『皇帝の新しい御石物』『火打箱』など、實にアンデルセンの一大傑作集で、一つ一つのお話が寶玉の如く輝いてゐます。それに柳田謙吉畫伯の美しい挿繪が多数挿入されて一段と光彩を添へてゐる。アンデルセンのその理想的夢幻的童話は、世界の寶として最も上品な藝術的價値ある尊いものです。この藝術味豊かな『アンデルセン童話』を最も上品な兒童讀物として推薦する。

も眼もさめるばかり美しいものでした。二六〇頁の長い間、息一つつくひまもなく讀む事が出来たのは沖野先生の靈筆によるものでせう。僅しい春吉少年と勇ましい岩吉少年の活躍が、鐵山を背景にして、いろんな生きた教訓や、何とも言われない心持が次から次へと起つて參ります。ほんとうに勇ましくも可哀さうな物語です。初めから終りまで活動寫眞を見てゐる様な素敵な面白さです。これ程の大冊に對して美しく思ひます。

これ即ち小公子の生ひ立、其の一言一行が如何に多大の感銘を効き人々に與へてゐるかを説するものでありませう。

少年少女諸君は勿論、世の母たる人も、是非この前代不出の名著『熱情溢る、母の愛と、それによつて育まれた幼き心の、純美と伶俐との物語を、速かに熟讀玩味せられん事を私より切に希望致します。

盗まれた王女

朝鮮京城若草町一〇六

河野 砥吉

僕は金の星社から『盗まれた王女』といふ本が出たときいて、名前から面白さうなので、本屋へ行って買つた。歸つて早速よんだら面白かつた。終るまではなすことができなかった。王女はほんとに勇ましくなつた。今までにこんな面白本をみたことがない。箱も表紙も口輪も美しく、又挿繪がたくさんあるし、こんな立派な本がなつた六十銭とはほんとに驚いた

『小公子』について

秋田縣北仙郡荒川村上荒川

岩谷 貞三

『小公子』は世界各國の少年少女から、又あらゆる家庭から絶大な歡迎を受け、向舞臺に上り、映畫ともなつて、益々其の名聲を高めつゝあるとは貴社發行の『小公

子』によりてつく／＼感ぜられまし

た。

『わしの目があいてゐたら、もつと早くお前を孫と、見分けたがな』と言ふあたりには思はず微笑しました。それは當然来るべき事でありましたが、バリヌと祖父ののりあひの所など最もすてきでした。家なき娘バリヌの苦心がよ／＼あらはれてゐました。私のやうなものには『家なき娘』の價値が言ひあらわされませんが、ぜひ一度はよむべきです。原作は佛國の文豪マローですが、三井先生の譯文と寺内先生の装幀はいつさう明き立てゝゐます。

日本の少年少女諸君、ぜひ一度は家なき娘をよんであわれなバリヌに清き涙を流してやりたまへ。私は一冊でもこの本がよまれる事を希望する。

懸賞創作募集

【意注】童綴童 【意注】童童童

方 野口雨情先生選
心 齋藤佐次郎先生選
句 野口雨情先生選

課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに句なり、文なりに書いてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は学校や学年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。
用紙は童心句はハガキ、童話や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號轉切は三月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は六月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地金の星社。

（一般讀者の創作）

話 野口雨情先生選
心 齋藤佐次郎先生選
句 野口雨情先生選

童話は十五行以内、童話は二十字語二百行以内、童心句はハガキ一枚に三句以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には一圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
振替口座東京五九五六番

【意注】金の星

▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（登録切手）一割増しです
▽第何巻第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください

昭和三年三月七日印刷納本（毎月一回）
昭和三年四月一日發行（一日發行）
編輯發行人 齋藤 保
印刷人 小 端 安之助
印刷所 東京市本郷區動坂町三三三番地 安 堂
電話 神田二二三三番

發行所 金の星社
振替口座東京五九五六番
電話 小石川五三八七番

世界名作童話大系

錢六料送・錢十六價定・本美入箱判六四

無類の安價

金の星社發行

編一第 魔法のバラ

編二第 ほら博士

編三第 盗まれた王女

編四第 親指トム

編五第 アラビヤン航海の巻

魔法のバラは王子の爲めに國を遣はれ、王子が女神から魔法のバラをさげられ、そのバラのおかげで、あらゆる困難から救はれるといふ面白くお話です。

ほら博士といふほど大ぼろ吹きの男爵のお話です。實になんともかんとお腹をかへて笑はずにはあらねない面白くお話です。まア一度読んでごらん下さい。

ベルシャの不思議なお話です。リンダガルといふ王女様が悪い魔法使にさらはれたので、それを王子があらゆる困難をおかして助けに行くお話です。

西洋の一寸法師のお話です。親指の大きさが、親指トムが、ありとあらゆる冒険を行ふ痛快な物語です。お腹なかへて笑ふ事程度か知れませんか。

有名なアラビヤン・ナイトの中でも「一番面白い話」といはれてゐる「シンドバッドの航海」のお話です。恐らくこれ程面白い話は世界にも少いといはれてゐます。

K2A-25

ライオン歯磨の漫画

